

靈界物語 第二四卷 如意寶珠 亥の巻

出口王仁三郎

凡例

【】……底本で傍点が振られている文字列

(例) 【ヒ】は火なり

「ス」を現す記號(丸にホチ)は「」に置き換えた。その他、文字コード(ユニコード)に無い文字は「ニ」に置き換えた。

底本

『靈界物語 第二四卷』愛善世界社

1998(平成10)年02月03日 第一刷發行

底本をもとに若干の編纂を加えてある。詳細は次のウェブサイト内に掲載してある。

『王仁三郎ドット・ジエイピー』(オニド)

<http://onido.onisavulo.jp/>

現代では差別的表現と見なされる箇所もあるが修正はせず底本通りにした。

圖表などのレイアウトは完全に再現できるわけではないので適宜變更した。
編纂・データ作成：飯塚弘明（オニド主宰）

2009年11月20日修正

〵〵〵〵〵〵〵〵〵〵

目次

序文 じよぶん

總説 そうせつ

第一篇 流轉の涙 るてん なみだ

第一章 粉骨碎身 ふんこつさいしん（七三一）

第二章 唾伝 あうん（七三二）

第三章 波濤の夢〔七三三〕

第四章 一島の女王〔七三四〕

第二篇 南洋探島

第五章 蘇鐵の森〔七三五〕

第六章 アンボイナ島〔七三六〕

第七章 メラの瀧〔七三七〕

第八章 島に訣別〔七三八〕

第三篇 危機一髪

第九章 神助の船〔七三九〕

第一〇章 土人の歓迎〔七四〇〕

第一章 夢の王者〔七四一〕
第二章 暴風一過〔七四二〕

第四篇 蠻地宣傳

第三章 治安内教〔七四三〕
第四章 タールス教〔七四四〕
第五章 諏訪湖〔七四五〕
第六章 慈愛の涙〔七四六〕

靈の礎〔一〇〕

靈の礎〔一一〕

神諭

〕
〕
〕
〕
〕
〕
〕
〕
〕
〕
〕

序文 じよぶん

一、靈界物語もいよいよ二十四巻まで口述し終りました。此總日數一百二十八日間、一冊に就き平均五日強を要した次第であります。

一、大正十一年六月は、種々の故障の出来せしたために、一ヶ月間口述を中止いたしましたので豫定とは非常に番狂はせを致しました。

一、いよいよ七月より又もや神助のもとに口述を初めむとする際、編輯長外山氏病氣の爲、休養さるる事となりましたので、筆記も思う様に抄らぬのを遺憾に存じます。幸ひ手八丁口八丁の勇者松村眞澄氏を初め、加藤明子の熱心者、北村隆光、谷村眞友の四氏が執筆されて居ますから、稍安心を致して居ります。

一、今年の夏は少し旅行する考へですから、又々口述が遅延するかと案じて居ります。唯何事も惟神に任すより仕方はありませぬ。

大正十一年七月五日

於松雲閣

現代は眞の宗教無く、又宗教家もない。キリスト教徒はキリストを知らず、佛
 教家は佛敎を知らず、教育家は敎育を知らず、紺屋の白袴、箕賣り笠で【ひる】
 譬の通り、眞に宗教や敎育や、將た又政事を解したものは尠い。従つて人間とし
 て談をしようと思ふ者も餘り澤山に有りさうもない。歩行く樹木か石地藏か、も
 の言ふ案山子かと思つて居たら餘り大きな間違ひもない様だと、私の副守らしい
 ものが囁いて居る。神代に於ける神の道の宣傳使（今日の所謂宗教家）の舍身的
 活動と、無抵抗主義と忍耐の強き事を思ひ出せば、現代の宗教家には五大洲中唯
 の一人も無いと謂つても過言ではあるまいと思ふ。私は現代の敎役者の日々の行
 動と、その心理状態を見るにつけ、神代の敎役者の活動に比し、實に天地霄壤の
 差あること歎息せずには居られないのだ。

本卷末尾には、神代に於ける宣傳使の至善至美、至仁至愛の大精神が遺憾なく
 口述されてあるから、宣傳使は更なり、凡ての宗教の信者たるもの、本卷を一讀

されて大神の大御心を覺り、且つ信者たるものの軌範となし、眞の日本魂を發揮
されむ事を希望する。キリスト教と云ふも、佛教といふも、神道といふも、その
眞髓を窮めて見れば、何れも日本魂の別名に外ならぬのである。況んや日本魂の
本場たる神の國に生を托するものに於てをやである。

大正十一年七月五日

於松雲閣

口述著者識

第一篇 流轉の涙るてん なみだ

第一章 粉骨碎身ふんこつさいしん〔七三一〕

遠き神代の其昔とほ かみよ そのむかし 埃及國に名も高きエジプトこく な たか

イホの都に現はれしみやこ あら バラモン教の大棟梁けう だいとうりやう

鬼雲彦が片腕とおにくもひこ かたうで 頼む鬼熊別夫婦たの おにくまわけふうふ

イホの館の没落にやかた ぼつらく 後悔まして瑞穂國あとくら みてほくに

メソポタミアの顯恩城にけんおんじやう 教の射場を立直しをしへ いば たてなほ

時めき渡るバラモンのとき わた 勢旭の昇る如いきほあさひ のぼ ごと

教は四方に輝きてをしへ よも かがや 天地自然の樂園にてんち しぜん らくゑん

光を添ふる芽出度さよひかり そ めで た 鬼熊別と蜈蚣姫おにくまわけ むかでひめ

ふたりの中なかに生うれたる 十五じふごの春はるの小こ絲いと姫ひめ

ひとつぶだね 一粒ひとつぶ種ねの初はつ愛まなこ娘こ 蝶てふよ花はなよと育はくくみて

隙すきま間の風かぜも「アテド」なく 寵ちよつ愛あい過すぎて氣き儘まま者もの

父ちちと母ははとの言ことの葉はを 尻しりに聞きかして小こ娘むすめが

年としに似に合あはぬ悪いた行つらも 直なほ日ひに見み直なほし聞き直なほし

又また宣のり直なほし目めの中なかに 飛とび入いるとても痛いたからず

悪あく逆ぎやく無く道だうの兩ふた親おやも 我わが兒この愛あいにひかされて

眼まなこは晦くらみ耳みみは聾しへ 鼻はなも無なければ口くちもなし

戀こひに溺おほれてお轉てん婆ばの あらぬ限かぎりを盡つくしたる

小こ絲いとの姫ひめの身みの果はては 初はじめて知しつた初はつ戀こひの

胸むねの焰ほのほに焦こがされて 人ひとも有あらうに出で齒ばを男とこ

團どん栗ぐり眼まなこの鼻はな曲まがり 鼻びとつ頭つに印しるした赤あか痣あざは

慕したうた女をんなの眼まなこより 見みれば牡ぼ丹たんか櫻さくら花はな

大おほきな口くちを打うち開ひらき 笑わらふ姿すがたを眺ながめては

男をとこの中なかの男をとこぞと 思おもひ初そめたが病やみつき付つきで
 親おやの許ゆるさぬ縁えにしをば 人ひと目めを忍しのび結むすび昆こ布ぶ
 濡ぬれてほとびてグニヤグニヤと 寢ね屋やの衾ふすまの友とも彦ひこを
 此こ上よなき者ものと思おもひ詰つめ 手てに手てを取とつて兩りやう親しんが
 館やかたを脱ぬけ出いでエデン川がは 人ひと目めの關せきや淚なみだがは川がは
 流ながし渡わたりて波斯フサの國くに 水い火きを合あはして遠をち近ちと
 三さん十じふ男をとこに手てを曳ひかれ 蜜みつより甘あまき囁ささやきに
 肝かん腎じん要かなめの魂たましひを 抜ぬかれて笑あつ壺ぼに入いり乍ながら
 廻めぐり廻めぐりて印ツキ度キの國くに 錫セイ蘭ロン島たうに打うち渡わたり
 小ちひさき庵いほりを結むすびつつ お前まへと私わしとの其その仲なかは
 假たとへ令てん地ちは覆かへるとも 月つき日は西にしより昇のぼるとも
 千ち代よも八やち千ちよ代よも永とこ久しへに ミロクミロクの世よまでも變かはるまい
 竹たけの柱はしらに茅かやの屋や根ね 手て鍋なべ提さげても厭いとやせぬ
 ゴツゴツコンコン惚ほれた二人ふたり仲なか 天てん地ちの愛あいを一身いつしんに

独占したる面色に

二月三月と暮す内

小糸の姫は漸うに

男の臭氣が鼻につき

熱き戀路も日を追うて

薄れ冷たき【あき】風に

吹かれて變る冬の空

雪にも擬ふ玉の肌

冷えては最早熱もなく

隙さへあらば飛び出して

理想の夫に身を任せ

社交の花と謳はれつ

時めき渡るも女子の

誇りと心機一轉し

うるさくなつた友彦の

酩酊を幸ひ一通の

三行半を遺し置き

あとは野となれ山となれ

男早魑もなき世界

如何なり行ことママの川

浮いた心の捨小舟

戀のイロハの意氣を棄て

櫓を操りて印度洋

浪のまにまに漕ぎ出せば

何の容赦も荒海の

忽ち船は暗礁に

正面衝突メキメキと

碎けて魂は中天に

飛んで出でたる居りもあれ
三五教の宣傳使

五十子の姫の神船に
ヤツと救はれ太平の

洋の真中に泛びたる
龍宮島に上陸し

人氣の荒き島人に
日頃のおキヤンを應用し

鰻上りに島國の
女王と仰がれ三五の

神の教に歸順して
誠の道を傳へたる

黃龍姫の物語
褥の船にウキウキと

身を横たへて太平の
洋をばここに「瑞月」が

男波女波を照しつつ
天涯萬里の物語

心の色は「眞澄」空
北極星座に安臥して

北斗の星に取巻かれ
七劍星に酷似せる

鉛の筆で研ぎすまし
千代に傳ふる萬年筆の

ペンペンだらりと述べ立つる
手具脛引いて「松村」氏

唯一言も漏らさじと
耳を敬て息こらし

神のまにまに誌し行く

あゝ惟神々々

御靈幸はひましまして

二十四巻の物語

いと速やかに編み終せ

世人を神の大道に

救ふ栞とならせかし

天地四方の大神の

御前に祈り奉る。

海中に浮かべる錫蘭島は、昔はシロの島と云ひけり。バラモン教の鬼熊別が部下に仕へし雉子と云ふ男、世才に長けた所より、巧言令色の限りを盡し、鬼熊別夫婦に巧く取り入り、夫婦の覚え芽出度く、遂には拔擢されてバラモン教の宣傳使となり、名も友彦と改められたり。得意の時に圖に乗るは小人の常、友彦は何時しか野心の芽を吹き出だし、追々露骨となりて、夫婦が掌中の玉と愛で慈む一人娘の小糸姫に目をつけたり。友彦の心の中は、夫婦が最愛の娘さへ吾手に入らば、鬼熊別の後を襲ひ、天晴れバラモン教の副棟梁、あわよくば鬼雲彦の地位を奪ひ、野心を充さむと晝夜間斷なく心慮をめぐらし居たりける。

鬼熊別夫婦はエデン河を渡り、對岸の小高き丘に登り、數多の從臣と共に花見の宴を催し、酒に酔ひ潰れ、舌も廻らぬ千鳥足、踊り狂ひつ天下の春を獨占せし心地して、意氣揚々と、再びエデンの河を渡り此方に向つて歸り來る。鬼熊別は酩酊甚だしく、船中にて手を振り足踏みならし踊り狂ふ惡酒の、無暗に鐵拳振廻し、あたり構はず從臣を擲りつけて興がり居たりしが、一人の從臣は鬼熊別の鐵拳を避けむと、周章狼狽き逃げ廻る機みに、船端に立てる今年十五才の小絲姫の身體に衝突せし途端、小絲姫は「アツ」と一聲、渦卷く波に落ち込み、後白波となりける。

鬼熊別夫婦を初め船中の人々は、初めて酔も醒め「アレヨアレヨ」と立騒げども、小絲姫の姿は見えず、狭き船中を右往左往に狼狽へまはる。此時身を躍らし赤裸の儘、河中に飛び込んだ二人の男あり。一人は小絲姫に衝突した三助、一人は友彦なりき。友彦は水練に妙を得、浮きつ沈みつ、姫の行方を足もて探り探り、立泳ぎしながら流れ行く。漸く姫の姿をみとめたる時は、既に十數丁の下流

なりき。友彦は小絲姫を小脇に抱へ込み、河邊を辛うじて攀ぢ登り、水を吐かせ、種々雑多と手を盡し、漸くにして蘇生せしめ、意氣揚々として鬼熊別が館に立歸りたり。

是れより先、鬼熊別夫婦は數多の人数を召ひ集め、小絲姫の陥りし河の邊を力限りに搜索し、到底絶望と諦め、我家に立歸り、夫婦互に我子の不運を歎き悲しみ、涙に暮るる折しも、友彦は小絲姫を背に負ひ、門番に送られ、得意の色を満面に漂はし、揚々として入り来る。鬼熊別夫婦は此態を見て驚喜し、
「ヤア小絲姫、無事なりしか、如何してマアあの激流に生命が助かりしか」
蜈蚣姫は、

「ア、娘、よく歸つて呉れた。是れと云ふも、全く大自在天様のお恵だ。ア、有難い有難い。……おやぢさま、どうぞモウ此れからは妾が何時も云ふ通り、大酒は廢めて下さい。酒の祟りでコンナ心配をしたのも、全く大自在天様のお氣付けであらう……生命の親の大神様……」
と泣き沈む。友彦は怪訝な顔付きにて、

「モシモシお嬢さま、チツト貴女何とか仰有つて下さいませ。神様も神様だが生
命の親は誰で御座いましたかなア」

「お父さま、お母さま、妾既に締切れて居りましたのよ。そこへ此友彦が生命を
的にして妾を救つて呉れました。澤山な家來はあつても、妾を生命がけになつて
助けて呉れた者は友彦一人、生命の親は友彦で御座います。どうぞ褒めてやつて
下さいませ」

夫婦は一度に友彦の顔を眺、顔色を和らげ、

「ヤアお前は常々から氣の利いた男だと思つて抜擢して宣傳使に命じたが、わし
の眼で睨んだ事はチツトも違はぬ。お前ばかりだよ。これだけ澤山に居つても
マサカの時に間に合ふ奴は一人も有りはせぬ。ようマア働いて呉れた。第一番の
手柄者だ」

友彦は志たり顔、

「これしきの事にお褒めの言葉を頂きまして實に汗顔の至りで御座います。今承
はれば貴方様は、これだけ澤山の家來があつても、マサカの時に間に合ふ奴は無

いと仰せられましたが、第一バラモン教の幹部の役員が分らぬからで御座いますよ。神様のお道は看板、自分の出世することのみを考へて居る連中ばかりで、自分より優つた者が現はれると、何とか彼とか申して物言ひを付け、頭を押へようとするものですから何程立派なバラモン教でも、誠の神柱は皆逃げて了ひます。何時までも世は持ち切りにさせぬと神様が仰せられるのに、今の幹部は何時までも高い所へ上つて権利を掌握しようと思ふ卑劣な心がありますから、至誠の者や少し間に合ひさうな人物は皆壓迫を加へ排斥を致します故、何時まで経つても幹部の改造をするか、幹部連がモウ些と神心になり、心の立替立直しを行つて呉れぬ事には駄目です。何程天に日月輝くとも、途中の黒雲の爲に光は地上に届きませぬ。私の様な立派な至誠の者が隠れて居つても、人格を認める目もなし、又認めても自分の地位を守る爲に却て排斥を致すのですから立派な者は皆隠れて了ひ、粕ばかりが浮上つて居るのです。石混りの塵芥を水溜りへ一掴み放かして見ると、重みのある充實した石は忽ち水の底に沈み、落着き拂つて居りますが、塵芥はパツと上に浮いて、風のまにまに浮動して居る様なものです。稲の穂の稔るに従ひ

頭を下げ俯む様に、充實した至誠の者は皆謙遜の徳を守り、實の入らぬ稲穂は
ツンとして空を向いて居る様なもの、是れでは到底バラモン教も發達は致します
まい。併し乍ら、貴方様は賢明なお方で、この友彦が實力をお認め遊ばし、土塊
の如く幹部より取扱はれて居た雉子を重用して宣傳使にして下さつたのは、實に
天晴れな御鑑識、友彦も……あゝ私は何とした立派な主人を持つただらう。私の
様な幸福者は又と世界にあるまい……と存じます。聖人野にありとか申しまして、
誠の貴方の御力になり、教の後を繼ぐ様な人物……言はば御養子になると云ふ人
物は、幹部に是れだけ澤山、表面立派な宣傳使はあつても、滅多に御座いますま
い。餘程御養子の御選擇は……如才は御座いますまいが……御注意を拂つて頂き
たいもので御座います。何程容貌は悪くても魂さへ立派であれば鬼熊別副棟梁様
の後が繼げまする」
と調子に乗つて勝手な理屈を竝べ立て得意がつて居る。鬼熊別はニコニコし乍ら、
「オイ友彦……お前は顔にも似合はぬ高遠な理想を抱いて居る者だ。吾々とても
同じ事、中々棟梁の家來は得られないものだ。たまたま力にならうと思ふ人物が

現はれると、忽ち雲が邪魔して光を隠さうとする。今の幹部だつて其通りだ。大自在天様の教に照して見れば、一人として及第する者はあるまい。耳を塞ぎ、目を閉ぎ、口をつまへて、神直日大直日に見直し聞直して居ればこそ、得意になつて幹部面をさらして居るのだが……ア、是れを思へば人を使ふと云ふ事は難事最大の難事だ。肩も腕もメキメキする様だ。どうしてこれだけ身勝手な没分曉漢ばかりが、バラモン教の幹部には集つて来るのだらうなア』

『屍の在る所には鷲集まり、美味の果物には害蟲密集するとやら、蟻の甘きに集ふ如く、良い所へは悪い者が來集つて来るものです。これからは今迄の様な和光同塵式は根本革正して、變性男子的にパキパキと率直に、嚴肅にやらねば、何時まで經つてもバラモン教は駄目で御座いますよ。それだから妾も貴方に推薦して雉子を宣傳使にしたのぢやありませんか。妾が雉子を推薦した時、貴方は何と言はれました。『彼奴は見かけによらぬ間に合ふ男だが、アンナ男を推薦すると幹部の連中の氣に入らぬから、雉子の人物は認めてゐるが、どうも仕方がない』……

と優柔不斷な事を仰有つたぢや御座いませぬか。あの時に御採用になつたればこそ、幹部として今日の花見の宴に同行致したお蔭で、一人娘が生命を拾うたではありませぬか、雉子を雉子の儘に置いてあつたなれば、どうして今日の花見の供が出来ませう。さうすれば忠義を發揮する機會もなし、見す見す可愛い娘を見殺しにせねばならなかつたでは有りませぬか。チト是から確かりやつて下さらぬと駄目ですよ」

「さうだなア、副棟梁の爲には何時でも生命をあげますとか粉骨碎身犬馬の勞を惜まぬとか云つて居た幹部の連中のあの態、俺も實は呆れて物が言はれないのだ」
友彦は得意顔にて、

「伸びる程土に手をつく柳かな……とか言ひまして、地に落ちて居るもの程立派な者が御座います。立派な人格者が御座います。氣に入らぬ風もあらうに柳かな……といふ……幹部が……精神になりさへすれば、バラモン教は旭日昇天の勢で天下無敵の勢力が加はります。されど利己主義の猜疑心の深い頭抑への連中計りが幹部を組織して居つては、到底發展の見込みは有りませぬ。現

状維持が出来ればまだしも上等、日向に氷の様に、日に日に衰へるは明瞭なる事
實で御座いませう。どうぞ副棟梁様、今後は情實に絡れず、適材を適所に抜擢し
て、神業第一と御心得遊ばして忌憚なく正邪賢愚を御立別けの上、御採用あらむ
事を懇願致します」

小絲姫は、

「お父さま、妾は大勢の役員信者の中でも、本當に偉いのは友彦一人だと思ひま
すワ」

蜈蚣姫は、

「オホ、、、、子供と云ふものは正直なものだナア。實際の間に合うたのは友彦
だけだワ。ナアモシ鬼熊別様」

鬼熊別は俯むいて當り障のない様な返辭で「ウウン」と云つて居る。蜈蚣姫は
夫に向ひ、

「今日は花見の宴で澤山なお酒を幹部一同戴き、まだ充分の酔も醒めず、此上悦
びの酒宴を催すのは妙なものだが、併し乍ら大切な娘の生命を拾つたのだから、

神様に御禮のお祭をなし、手軽い直會の宴でも開いて、友彦の表彰會を行はねばなりません。どうぞお考へなさいませるか。」
と夫の顔を覗き込む。

「ア、さうだナア。何と云つても神様に御禮の祭典を行ひ、次に友彦の手柄を表彰せなくてはなるまい。賞罰を明かにせないと、今後の爲にならぬから……ヤア片彦、釘彦の兩人、祭典の用意に取かかり、次で直會の宴を開くべく準備して呉れ。そして今日は顯恩郷在住の信徒、老若男女を問はず、残らず八尋殿に集めて酒宴の席に列せしめるのだから……」
片、釘の兩幹部は此一言に、又も酒かと雀躍りし乍ら「ハイハイ」と二つ返事で此場を立出で、部下一般に通達したりけり。

祭典は命の如く行はれたり。御祝ひを兼ね、信者は立錐の餘地なきまでに、八尋殿に溢れ出した。祭典は無事に済み、直會の神酒は子供の端に至るまで萬遍なく配られたり。小糸姫が無事安全を祝ふ聲、殿内も揺ぐ許りなりき。小高き壇上に現はれたのは鬼雲彦の棟梁なり。鬼雲彦は一同を見廻し、

「バラモン教の幹部を初め信者一同と共に小絲姫の無事安全を祝し奉り、鬼熊別御夫婦の御幸運をお悦び致します。つきましては私として少し感想を述べたいと思ひます。大勢の中には少し耳障りの方も有りなさるかも知れませぬが、バラモン教の教主兼棟梁としては已むを得ない立場で御座いますから、其處の所は宜しく御諒解を願つて置きます。抑も多士濟々たる本教は、開設以來旭日昇天の勢で御座います。これと云ふのも全く幹部を始め信者一同が、有るに有られぬ困難と戦ひ、所在困苦をなして、忍びに忍びて心魂を鍛へて來た結果と私は信じます。常世の國より渡來して、埃及のイホの都に始めて教を開いた時、コーカス山に根據を構へたる三五教の爲に種々雑多の妨害を受け、一時は孤城落日の破目に陥つた所、皆様はよく耐忍び、漸くにしてバラモン教は再び以前に勝る隆盛の域に達しました。併し乍ら艱難の極度に達した時は榮えの種を蒔くものです。今日のバラモン教は稍小康を得、日々隆盛に趣くに連れて人心弛緩し、知らず識らずの間に倦怠の心を生じ、今日では最初の熱烈なる忠誠なる皆様の精神は何處へやら喪失し、幹部は自己を守る爲に高遠達識の士を排除し、阿諛諂佞の徒を重用し、

各自競うて部下を作り、互に權力を争ふ如き傾向が仄見えて参りましたのは、本
教の爲に誠に悲しむべき現象と言はねばなりません。現に鬼熊別様の娘子小絲姫
様の遭難に對しても、肝腎の幹部は袖手傍觀手を下すの術を知らず、實に無誠意、
無能力を極端に發揮したでは有りませぬか、斯様な事で如何して神聖なる御神業
に奉仕する事が出来ませう。神に仕へ奉るにあらずして、利己心といふ欲心に奉
仕するのだとは云はれても、辨解の辭はありません。今日はバラモン教に對し
て國家興亡の境で御座います。教主として私の申す事が肯定出来ない方々は御遠
慮に及びませぬ。ドシドシと脱會下さつても、少しも痛痒は感じませぬ。否寧ろ
好都合だと確信致して居ります。本當の大神の御心が分つた方が一二人あれば澤
山です。それを種として立派に教が行はれませう。然し乍ら肝腎の幹部たる者、
神意を誤解し、利己主義を強持するに於ては、一匹の馬が狂へば千匹の馬が狂ふ
譬の如く、總崩れになつて了ふものです。それだから幹部の改心が先づ第一等
あります。源濁つて下流澄むと云ふ道理は御座いませぬ。どうぞ此際皆さまは申
すに及ばず、幹部の地位に在る方々から誠心誠意、神業の爲寛容の徳を養ひ、清

濁併せ呑み己を責め人を赦す大人の態度になつて頂きたいものです」

と諄々として鋭鋒を幹部の面々に指し向けた。幹部の連中は教主鬼雲彦の此教

示に對し、餘り快く感ぜざれども、一々胸を刺さるる此箴言に、返す言葉もなく

唯冷然として、空吹く風と聞き流し居る者も少くなかりける。

此時得意の鼻を蠢かして壇上に大手を振り乍ら、眼をキヨロキヨロ廻轉させ、

一同の顔を眺めつつ現はれた一人の宣傳使は、小糸姫の生命を救うた友彦なりき。

拍手の聲急霰の如く、場の四隅より響き亘りぬ。友彦は満場に向ひ軽く一禮し、

稍反り身になりて赤い鼻をピコツかせ乍ら、無細工な缺けた出齒をニユツと噛み

出し、厭らしき笑を湛へて握拳を固め、卓を一つトンと打ち、雷の如き蠻聲を張

り上げ「皆さま」と一喝し、

「私は只今の教主様の御演説につき感慨無量で御座います。皆様の大多数に置か

せられましても、敬神、愛教、愛民の教主の御心中に、嘸嗚咽感激遊ばした事と

確信致します。我々は大慈大悲の大神様は申すも更なり、教主様の仁慈無限の御

精神に酬い奉り、副教主として、重任の地位に着かせ給ふ鬼熊別様の教を思ひ給

ふ御熱情に對し、どこ迄も粉骨碎身、以て微力の有らむ限りを盡さねばならない
ではありませぬか。然るに今日の幹部は偷安姑息、大事に際して躊躇逡巡、なす
所を知らずと云ふ爲體では御座いますまいか」

聽衆の中より「贊成々々」と手を拍つ者四隅より現はれ來たりぬ。此聲援に力
を得て友彦は益々語氣を強め、

「現にエデン河の小絲姫様の遭難に對し、幹部の御歴々は如何なる活動をなされ
ましたか、幹部の總統たる片彦、釘彦の御兩人は、我より以下の者共早く河中に
飛び込み御救ひ致せ……と云ふ様な御態度でいらつしやる。次の幹部は又次へ、
又次へ、我々幹部にあつては人を統率すれば良い、命令權を持つて居るのだから、
直接活動すれば幹部の沽券を傷つけると云はぬばかり、次から次へ押せ押せに危
ない事は塗りつけ合ひ、唯一人として身を挺しお救ひしようとする方々はなかつ
たぢやありませんか。日頃のお言葉に似ず、實に冷淡極まる振舞、斯様な事でど
うして神業が發展致しませうか。我々は實に遺憾に存じます」

と又もや卓を叩く。場内は「贊成々々」尤も尤も」の聲破るる許りに響き渡り、

中には両手をあげて躍る者さへ現はれた。友彦は尚も語を繼ぎ、

「皆さま、今日はバラモン教の立替の時機ではありますまいか。上流濁つて下流

澄むと云ふ道理はありますまい。舍身的活動をなす至誠の士……例へて見れば九

死一生の人の危難に際し、生命を的に助けに行く丈の眞心を持つた眞人をして、

幹部の總統たらしめなば、名實相伴なふ所の立派なるバラモン教が築き上げられ、

神政成就の大望も容易に運ぶでせう。抑も幹部たるものは重大なる責任が御座い

ますから、自己の安全のみに焦慮する如き人物は、この際信者多数の團結力を以

て、根本改革を致さねば、迎も完全なる教は立ちますまい。何卒皆様の御熟考を

煩はす次第で御座います」

と結んで降壇せむとするや、片彦は怒氣を含み、拳を固め、壇上に現はれた。參

集者の中より「下がれ」「退却」「無腸漢」「利己主義の張本人」などと、頻り

に罵聲を浴びせかけ、喧々囂々鼎の湧くが如く、片彦は壇上に立往生の儘一言も

發し得ず、唇をビリつかせて居る。鬼雲彦、鬼熊別兩夫婦は信者一同に軽く一禮

し、館に悠々として立歸る。友彦も續いて退場する。

一同は片彦を壇場に殘し、先を争うて各々住家に歸りゆく。あとには幹部の錚々たる者合せて十二人何事かヒソヒソと話に耽りゐる。

忽ち聞ゆる暮の鐘、諸行無常と鳴り響き、八尋殿の屋根に止まつた二羽の鴉、大口あけて『アホーアホー』と鳴きたてゐる。

(大正一一・六・一四 舊五・一九 松村眞澄録)

(昭和一〇・三・八 於吉野丸船中 王仁校正)

第二章 唾伝〔七三二〕

友彦は鬼熊別夫婦の信任益々厚く、遂には鬼熊別が奥の間に内事係の主任として仕ふる事となりぬ。小絲姫も朝な夕なに友彦の親切にほだされ、好かぬ顔とは思ひ乍らも何時とは無しにスツカリ無二の力と頼むに至りける。蔭裏に生えた豆でも時節が來れば「はぢ」ける道理、十五の春を迎へたオボコ娘も、何時とはな

しに聲變りがし、臀部の恰好が餘程大人び來たりぬ。男女の交情を結ぶ第一の要點は談話の度を重ねること、會見の度の多きこと、及び時間の關係に大影響を及ぼすものなるべし。

小絲姫は何時とはなしに友彦の顔を見る毎に、顔赤らめ、襖の蔭に隠れ、竊みに覗く迄になりぬ。蜈蚣姫は信任厚き友彦に、小絲姫の身邊の世話を委託したるが、遠近上下の隔てなきは戀の道、優柔不斷フナフナ腰の友彦も何時とは無しに妙な考へを起し、遂には小絲姫の夫となつてバラモン教の實權を握らむと、野心の火焰に包まれ晝夜心を焦し居たり。

友彦が募る戀路に、小絲姫は襖の開閉にも、擦れつ纏れつ相生の松と松との若縁、手折るものなき高嶺に咲いた松の花、遂に友彦が得意の時代は到來した。猪食た犬の蜈蚣姫は敏くも二人が關係を推知し、夫鬼熊別に向つて言葉を盡し、友彦をして小絲姫の夫となし、鬼熊別が後繼者たらしめむとする意志を、事に觸れ、物に接し、遠廻しにかけて鬼熊別にいろいろと斡旋の勞を執りぬ。

されど鬼熊別は友彦の下劣なる品性と、野卑なる面貌に心を痛め、到底副棟梁

の後繼者として不適任たることを悟り、何時も蜈蚣姫の千言萬語を盡しての幹旋を馬耳東風と聞き流した。

友彦、小絲姫は父の心中を察し、人目を忍んでは二人の行末を案じ煩ひつつ、ヒソヒソ話に耽り居たりける。

ある時友彦は、

「小絲姫様、私は今日限り貴方に御別れ致さねばならぬことが出来ました。今までの御縁と諦めて下さいませ」

小絲姫は漸く口を開き恥し氣に、

「友彦様、そりや又何うした理由で御座います。たとへ何うなつても小絲姫のためには力を盡し、生命でも差出すと仰有つたではありませぬか」

「ハイ、私の心は少しも變つては居りませぬ。日に夜に可愛さ、戀しさが彌増し、片時の間も貴女のお顔が見えねば、ジツクリとして居られないやうに、戀の炎が燃え立つて来て居ります。併し乍ら貴女は尊き副棟梁の一人娘、何時までも私のやうな賤しき者と關係を結ぶ譯には参りませぬ。御父様の御意中は決して吾々兩

人の意を叶へては下さいませぬ。何程御母上が御取持下さつても、最早駄目だと云ふことが解りました。私は是より此の煩悶を忘れるため、貴女の御側を遠く離れ、世界を遍歴し一苦勞を致しませう。これが御顔の見納めで御座いますれば、何うぞ御兩親に孝養を盡し、立派な夫を持つてバラモン教のために御盡し下さいませ」

小絲姫は驚いて其の場に泣き伏し、

「アー何うしませう。父上様、聞えませぬ」

と泣き叫ぶを友彦は、

「モシモシ御嬢様、悔んで復らぬ互の縁、暫しの夢を見たお諦め下さいませ。誠に賤しき身を以て、貴女様に對し失禮を致しました重々の罪、何卒御赦し下さいませ……左様なら、これにて愛しき貴女と御別れ致しませう」

と立去らむとするを裾曳き止め、

「暫らくお待ち下さいませ。妾も女の端くれ、たとへ天地が變るとも、一旦言ひ交した貴方を見捨てて何うして女の道が立ちませう。苦樂を共にするのが夫婦の

道、假令何と仰有つても、妾は何處までも放しませぬ。何うしても別れねばならなければ貴方のお手で妾を刺殺し、何處へなりと御出で下さいませ
と泣き伏す。

「ア、困つたことが出来たワイ、別れようと言へば御嬢様の強き御決心、生命にも係はる一大事、大恩ある鬼熊別の御夫婦に對し申譯が無い。さうだと云つて大切な御嬢様を伴出しては尚濟まず、ア、仕方がない……。モシ御嬢様、私は此處で腹掻き切つて相果てます。何うぞ貴女は兩親に仕へて孝養を御盡し遊ばされ、幸に私の事を思ひ出された時は、水の一杯も手向けて下さいませ。千萬人の宣傳使の讀經よりも貴女の御手づから與へて下さつた一滴の水が、何程嬉しいか知れませぬ。小絲姫様、さらばで御座いまする」
と懐劍スラリと引抜き、腹に今や當てむとする時、小絲姫は其の腕に縋りつき、
「モシモシ友彦様、暫らくお待ち下さいませ。お願いいたし度いことが御座いま

す」
友彦は、

「最早覺悟致した上は申譯のため唯死あるのみ。何うぞ立派に死なして下され」
「どうして是が死なされませう。斯うなる上は是非がない。親につくか、夫につくか、落ちつく途は唯一つ。暫時は親に御苦勞をかけるか知れないが、何れ此世に長らへて居れば、御兩親に孝養を盡すことも出来ませう。何卒友彦様、妾を伴れて遁げて下さいませぬか」
「これはしたり御嬢様、親子は一世、夫婦は二世と申しまして、此世に親ほど大切なものは御座いますまい。友彦ばかりが男ではありませぬ。モットモット立派な男は澤山に御座いますれば、私のことは只今限り思ひ切り、兩親に御孝養願ひます。さらば、是にて御別れ……」
「と又もや懐劍を突き立てようとする。小絲姫は悲しさ【やる】瀬なく腕に喰ひつき満身の力を籠めて友彦を殺さじと焦り居る。友彦は感慨無量の態にて、
「ア、其處まで私を思つて下さるか。左様なれば仰せに隨ひ、暫らく私と一緒に何處かへ隠れて、楽しき月日を送りませう」

小絲姫は、

「あゝそれで安心致しました」
と奥に入り、密かに數多の路銀を懐中し、夜の更くるを待つて二人は館を後に、何處ともなく顯恩郷より消えにけり。

親子のやうに年の違つた二人の男女は、手に手をとつて波斯の國を、彼方此方と彷徨ひ、遂には高山も幾つか越えて印度の國の南の端に進んで來た。此處には露の都と云つて相當な繁華な土地がある。バラモン教の宣傳使市彦は相當に幅を利かし、遠近に名を轟かして居た。友彦は斯る地點に彷徨ふは、發覺の虞れありとなし、月の夜に紛れて海を渡り、セイロンの島に漕ぎつけ、奥深く進みシロ山の谷間に居を構へ、二人は暮す事となつた。物珍しき島人は、花を欺く小絲姫の容貌を見て、天女の降臨せしものと思ひ尊敬の念を拂ひ、日夜此の庵も訪ねて參拜するもの引きも切らぬ有様であつた。小絲姫は表向友彦を下僕となし、女王氣取りで無鳥島の蝙蝠王となりすまし、友彦と共に日夜快樂に耽りみたり。

友彦の俄に塗りたてた身魂の鍍金は、日に月に剥脱し、父母兩親の目の遠く離れたるを幸ひ、横柄に小絲姫を頭の先にて使ふ様になつた。さうして小絲姫が持

ち來れる旅費を取出しては日夜酒に浸り、或は島人の女に對し他愛なく戯れ出した。小絲姫は、漸く戀の夢醒むるとともに、友彦の言ふこと爲すことを、蛇蝎の如く忌み嫌ひ、友彦の方より吹きくる風さへも、身を切る如くに感じた。百度以上逆上せ切つた戀の夏も何時しか過ぎて、ソロソロ秋風吹き起り、日に日に冷氣加はり、冴寒き冬の如く、友彦を思ふ戀の熱はスツカリ冷却して氷の如くになり終りけり。

友彦は小絲姫の様子の日につれなくなるに業を煮やし、時々鐵拳を揮ひ、自暴酒を呑み、嘔がれ聲で吠鳴り立て、二人の仲は日に夜に反が合なくなりける。

或夜小絲姫は友彦が大酒を煽り、酔ひ潰れたる隙を窺ひ、一通の遺書を殘し、濱邊に繋げる小舟を漕ぎ、島人の黒ン坊二人を伴なひ、太平洋を目蒐けて大膽にも遁げ出したり。

友彦は酒の酔が醒め、起き出で見れば夜はカラリと明けはなれ小鳥の聲喧し。友彦は眠たき目を擦り乍ら、

□ 小^こ絲^{いと}姫^{ひめ}、水^{みづ}だ水^{みづ}だ[□]

呼^よべど叫^{さけ}べど何^{なん}の應^{いらへ}答^へもなきに友^{とも}彦^{ひこ}は、

□ ア、又^{また}裏^{うら}の山^{やま}へでも果^{くだ}物^{もの}を取^とりに往^ゆきよつたのかなア。何^{なに}を云^いうても御^{おぢやう}嬢^{やう}さま

で氣^き儘^{まま}に育^{そだ}つた女^{をんな}だから仕^{しかた}方^なが無^ない。併^{しか}し斯^かう云^いふものの、まだ十^{じふ}六^{ろく}だから子^こ供^{ども}

の樣^{やう}なものだ。餘^{あま}りケンケン云^いつてやるのも可^か哀^{あい}想^{さう}だ。チツトこれから可^か愛^{あい}がつ

てやらねばなるまい。顯^{けん}恩^{おん}郷^{きやう}に居^をれば、彼^{あち}方^ちからも、此^こ方^ちからも御^{おぢやう}嬢^{やう}さまと奉^{たてま}つ

れ、女^{ぢやわう}王^{やう}の樣^{やう}に持^もて囃^はされ、榮^{えい}耀^{よう}榮^{えい}華^{くわ}に暮^{くら}せる身^み分^{ぶん}だ。此^この友^{とも}彦^{ひこ}が思^{おも}はぬ手^て柄^{がら}に

依^よつてそれをきつかけに旨^{つま}く「たらし」込^こみ、世^せ間^{けん}知^しらずのオボコ娘^{むすめ}をチヨロマ

力^{ちから}した俺^{おれ}の腕^{うで}前^{まへ}、定^{さだ}めてバラモン教^{けう}の幹^{かん}部^ぶ連^{れん}も驚^{おど}いたであらう。俺^{おれ}の顔^{かほ}は自^じ分^{ぶん}乍^な

ら愛^{あい}想^{さう}の盡^つきるやうなものだが、それでも生^{いの}命^{のち}の親^{おや}だと思^{おも}つて、すねたり、跳^はね

りし乍^なら付^ついて居^ゐるのはまだ優^{しほ}らしい。たとへ俺^{おれ}を嫌^{きら}つて遁^にげ歸^{かへ}らうと思^{おも}つても、

遠^{とほ}き山^{やま}坂^{さか}を越^こえコンナ離^{はな}れ島^{じま}へ連^つれ込^こまれては、孱^{かよわ}弱^わき女^{をんな}の何^どうすることも出^で来^き

よまい。思^{おも}へば可^か哀^{あい}想^{さう}なものであるワイ……ア、喉^{のど}が渴^{かわ}いた。一^{ひと}つ友^{とも}彦^{ひこ}自^{みづか}ら玉^ぎ水^{よくすゐ}

を、汲^くみて御^{おあが}飲^がり遊^{あそ}ばす事^{こと}としよう[□]

と云ひ乍ら、門前を流るる谷川の水に竹製の柄杓を突込み、グイと一杯汲み上げ
聲を變へて、

「さア、旦那様、御上り遊ばせ。あまり御酒を上りますと御身のためによるしく
御座いませぬ。若しも貴方が御病氣にでも御なり遊ばしたら、妾は何うしませう。
ねー貴方、妾が可愛いと思召すなら、何うぞ御酒を餘り過ぎさない様にして頂戴
……ナンテ吐しよるのだけれど、今日に限つて若山の神様は何處かへ御出張遊ば
した。臆て御歸館になるだらう。それまで山の神の代理を勤めるのかなア」
と獨語言ひ乍ら、グツト一杯飲み乾し、

「ア、酔醒めの水の美味さは下戸知らずだ。ア、うまいうまい、水も漏らさぬ二
人の戀仲、媒酌人も無しに自由結婚と洒落たのだから、此の杓を媒酌人と假定し
て先づ一杯やりませう。何程「しやく」だと云つても、顯恩郷を遠く離れた此の
島、二人の戀仲に水差す奴も滅多にあるまい。併し乍ら小絲姫が時々癩を起すの
には、一寸俺も困る……「もしわが夫様、癩がさしこみました。どうぞ御介錯
を願ひます」……なんて本當になまめかしい聲を出しやがつて、俺は何時もそ

れが癩しやくに障さは………らせぬワ。ア、うまいうまい」

と、汲くんでは飲み汲くくんでは飲み一人興ひとりきようがりゐる。

斯かかる處ところへ黒くろン坊ぼうの一人現ひとりあらはれ來きたり、

「モシモシ友彦ともひこ様、女王ぢやわうさま様が夜前やぜん船ふねに乗のつて何處どこかへ往ゆかれたのを、貴方あなた御存知ごぞんじで御座ございますか」

と聞きくより友彦ともひこは眞蒼まっさをになり、

「何なにツ、小絲こいとひめ姫ひめが船ふねに乗のつて此處ここを去さつたとは、そりや本當ほんたうか」

「何私なにわたくしが嘘うそを申まをしませう。チャンキーとモンキーの二人ふたりが、櫓ろ權かいを操あやつり港みなとを船出ふなでしましたのを、月夜つきよの光ひかりに慥たしかに見届みとどけました。私わたくしばかりでない、四五人しごにんのものが

「みんな」見みて居をりますよ」

「ソナナラ何故なぜ早速さつそく知らして來こぬのだ」

「早速さつそく知らせに參まゐつたのですが、御承知ごしやうちの通とほり此この急坂きふはん、さう着々ちやくちやくと來こられませ

ぬワ」

「さうして小絲こいとひめ姫ひめは何處どこへ往いつたか知しつて居ゐるか」

「そこまではハツキリしませぬが、何でも舐を印度の國の方へ向けて出られましたから、大方露の都へ御越しになつたのでせう」

友彦は両手を組みウンウンと吐息を吐き、兩眼より粗い涙をポロリポロリと溢して居る。暫くして友彦は立上り、

「おのれチヤンキー、モンキーの兩人、大切な女房を唆かし、何處へ遁げ居つたか、たとへ天をかけり、地を潛る神變不思議の術あるとも、草をわけても探し出し、女房に會はねば置かぬ。其時にチヤンキー、モンキーの二人を血祭りに致して呉れむ」

と狂氣の如く荒れ狂ひ、鍋、釜、火鉢を投げ、戸障子に恨みを轉じ、自ら亂暴狼藉の限りを盡し、家財を残らず滅茶苦茶に叩き毀し、小絲姫の残し置いた衣服や手道具を引裂き、打碎き、地團駄踏んで室内を七八回もクルクルと廻り狂ひ、目を廻してパタリと倒れた。

黒ン坊の一人は驚いて側に驅寄り、

「モシモシ友彦様、狂氣めされたか。マア氣を御鎮めなされ、何程焦つても追ひ

つくことは出来ずまい。何れ印度の國の露の都に市彦と云ふ名高い宣傳使が居られますから、其處へ大方御越しなつたのでせう」

友彦は此聲にハツト氣がつき、

「何ツ、市彦が何うしたと云ふのだ」

「大方女王様は露の都の市彦の館へ御越しになつたのだらうと、皆の者が噂を致して居りましたと云ふのです」

「それは貴様、よく知らせて呉れた。さア、駄賃をやらう」

と金函を開き見れば、こは如何に、空ツけつ勘左衛門、鉦一文も残つて居ない。函の底に残つた折紙を手早く掴み披き見て、

「ア、何だか些も分らない。スパルタ文字で……意地の悪い、俺の讀めぬのを知り乍ら、遺書をして置きやがつたのだらう。併しこれは後の證據だ。大切にせなくてはならない」

と守り袋の中に大事相にしまひ込み、黒ン坊に案内させ、一生懸命にシロ山の急坂をドンドン威喝させ乍ら、大股に降り行く。

漸くシロの港に驅ついた。滅法矢鱈に黒ン坊と二人がマラソン競走をやつた結果、港に着くや、氣は弛みバツタリと此處に倒れて了つた。港に集まる黒ン坊は二三十人寄つて集つて水をかけたり、鼻を捻ぢたり、いろいゝとして漸く氣をつけた。

友彦は四邊キヨロキヨロ見廻し乍ら、
「オー此處はシロの港だ。さア、汝等一時も早く船の用意を致し、印度の國へ送れ」

「賃錢は幾何呉れますか」
「エーコンナ時に賃錢の話どころか、一刻も早く猶豫がならぬ。賃錢は望み次第後から遣はす。さア、早く行け」
と急き立てる。

友彦の懷中は實際無一物であつた。八人の黒ン坊は八挺櫓を漕ぎ乍ら矢を射る如く友彦の命のまにまに印度洋を横切り、印度の國の濱邊へ漸く着いた。此處は眞砂の濱と云ひ遠淺になつてゐる。船は十町ばかり沖にかかり、それより尻を捲

つて徒歩上陸する事となりあるなり。

「モシモシ大將さま、賃錢を頂きませう」

「ウン一寸待て、賃錢はシロの港まで歸つた時、往復共に張りこんでやる。二度にやるのは邪魔臭いから、此處に船を浮かべて待つてゐるがよからう」

「さうだと云つて……露の都までは二日や三日では往けませぬ。往復十日もかかるのに、コンナ處に待つてゐられませうかい」

「待つのが嫌なら先へ歸つてシロの港で待つてゐるがよからう。歸途には又他の船に乗るから……」

「ソナ事を言はずに渡して下さいなア。女房が鍋を洗つて待つてゐるのですから」

「實は金をあまり周章て忘れて來たのだ」

「ヘンうまいこと云ふない。女王にスツパ抜けを喰はされ、金も何も持つて遁げられたのだらう。今までは女王様の光りで、貴様を尊敬して居つたが、モースうなつちや誰が貴様に随ふものがあるか。金が無ければ仕方がない。貴様の身につ

けたものを残らず俺に渡せ。グツグツ吐すと、寄つて集つて此の海中へ水葬してやらうか」

「エー仕方が無い、ソナナラ暑い國の事でもあり、裸でも【しのげぬ】事は無いのだから、これなつと持つて行け」

とクルクルと眞裸になり、船の中に投げつけたるに黒ン坊は、

「ヨー思ひの外立派な着物だ。何分金に【あかし】て拵へよつた品物だから……

……オイその首にかけて居る守り袋を此方へ寄越せ」

「之に貴様等が手を觸れると、忽ち身體がしびれるぞ。さア持つて行け」

と首を突き出す。八人の黒ン坊は、

「ヤア、ソナナ怖ろしいものは要らぬワイ。勝手に持つて行け」

と云ひ捨て遠淺の海に友彦を残し、八挺櫓を漕ぎ、紫の汐漂ふ海面を矢の如く歸つて行く。

友彦は砂に足を没し、已むを得ず首に守袋をプリンと下げ、飼犬よろしくと云ふスタイルで、遠淺の海をノタノタと、四つ這ひになつて岸邊を指して進み行く。

第三章 波濤の夢〔七三三〕

野卑下劣なる友彦の態度にぞつ魂愛想をつかし、【ぞぞがみ】を立て蛇蝎の如く忌み恐れたるセイロン島の女王小絲姫は、友彦が大酒に酔ひ潰れ前後不覺になつた隙を窺ひ三行半を後に残し、黄金を腹巻にどつさりとしりとり程締込み錫蘭の港より、黒ン坊チヤンキー、モンキーの二人に船を操らせ、月照り渡る海原を力限りに迂り往く。

天上には淨玻璃の鏡嚴かに懸り、大地の水陸森羅萬象を映して居る。小絲姫が今往く此船も、矢張り月の面にかかつた天然畫中のものであらう。小絲姫は漸く虎口を逃れホツと一息つきながら獨言……。

ア、妾程罪深い者が世に有らうか。山より高き父の恩、海より深き母の恩、恩

に甘え、親の心子知らずの譬に漏れず、人も有らうに、萬人の見て以て蛇蝎の如く忌み嫌ふ友彦のやうな下劣な男に、何うして妾は迷つたであらうか。我と我身が怪しくなつて來た。執念深き男の常として、嘸今頃は酔も醒め、四邊をキヨロキヨロ見廻し、我殘せし手紙を見てアツト腰を抜かし、例の【いかい】目を剥き出し、嘸や嘸、腹を立てて居るだらう。思へば可憐さうな様でもあり、小氣味がよいやうにもある。妾の心は鬼か蛇か神か佛か、我と我が心を解き兼ねる。それにしてもあの友彦と云ふ男、金さへあれば朝から晩まで飲み倒し、體を碎き魂を腐らせ、殆ど人間としての資格は最早ゼロになつて仕舞つた所だから、今度の驚きで些とは性念も直るであらう。眞人間にさへなつて呉れたならば、妾とても別に憎みはせぬ。あの男に一片良心の光があれば、キツト心を取り直し、立派な人間になるであらう。さすれば今見捨てて逃げ出す妾の非常手段も、あの男の爲には却つて幸福の種、腐つた魂は清まり、酒に碎けた肉體は又元の如く健かになり、神界の爲、社會のために、活動するだけの神力が備はるであらう……友彦殿、妾が書置を見て嘸憤慨して居るであらう。併し乍ら之も妾が御身に對する惠の鞭

だと思つて、有難く感謝するがよいぞや。必ず必ず迷うてはならないよ。破れ鍋
に閉ぢ蓋、それ相當の女を見つけ出して夫婦仲よく暮しやんせ。提燈に釣鐘、釣
り合ぬは不縁の基と云ふ事は昔からの金言友彦の守護神殿、肉體、いざさらば之
にて萬劫未代お別れ致します

と頤をしゃくり、傍に人無き如き横柄なスタイルにて喋り立てて居る。無心の月
は淨玻璃の鏡の如く眞澄の空に緩やかに懸り、小絲姫が船中のモノログを床しげ
に見詰めて聞いて居るものの如くに思はれた。チャンキー、モンキーの二人は大
海原の眞中に浮び出たのを幸ひ、目と目を見合せ、そろそろ肩を聳やかせながら
體迄四角にして、機械人形の様に小絲姫の兩脇にチヨコナンと坐り、
何と今日のお月様は、まんまるい綺麗なお顔ぢやないか。恰で小絲姫女王のや
うな、玲瓏たる容色。空を仰げば如意寶珠の如き月光如來、船中を眺むれば雪を
欺く純白の光明女來の御出現、俺達も男と生れた上は、一つ此様な美人と握手を
したいものだなア、アハ、ハ、ハ、
と作つたやうな笑ひ聲を出す。

「オイ、チヤン、擦つたいやうな遠廻しにかけて何を云ふのだ。一里や二里ならまだしもだが、大空のお月さま迄引張り出しやがつて、そんな廻り遠い事は今の世には流行せないぞ。何事も簡単敏捷を貴ぶ世の中だ。海底にも此通り立派な月が浪のまにまに漂うて居る。月の上を渡る此船は、天人の乗った天の鳥船も同様だ。これ見よ……海の底には幾十萬とも知れぬ星の影、月と月、星と星とに包まれた此大空假令俺達の色が黒いと云うても、唇が厚いと云うても、最早此通り天上を翔る様になつたのだから、顯恩郷のお姫様に何遠慮する事があるものかい。僅か十六歳の纖弱き女、此通り頑丈な鐵のやうな固い腕をした我々の自由にならぬ道理があるか。際限も無き此海原、何一つ楽しみなくして何うして之が勤まらう。……これ小糸姫さま、お前の家來だと云うて連れて居つた友彦の鼻曲りや、出齒龜に比ぶれば幾層倍立派だか知れやしまい。色は黒うても淺漬茄子、何うだ一つ妥協をやらうではないか」

「ホ、ホ、ホ、これ二人の黒ン坊さま、冗談を云ふにも程がある。女だと思つて無禮な事をなさると了見はせぬぞエ」

「アハ、ハ、ハ、見事云ふだけの事は仰有りますワイ。まさかの時になれば言論よりも實力が勝つ世の中だ。もうかうなつちや此方の自由自在、何事も因縁ぢやと諦めて我々の要求を全部容れるがお前さまの身の爲だ。可憐さうに、あれ程焦れて居つた友彦を酒を飲まして酔潰し、其間にすつかり路銀を腹に巻き、逃げ出すと云ふ大それた年にも似合はぬ豪膽者、後に残つた友彦は………僅か肩揚の取れた計りの小娘に三十男が馬鹿にされ、どうして世間に顔出しがなるものか、「エ、残念や口惜や、假令千尋の海の底迄も小糸の後を探ねて、恨みを云はねば死んでも死ねぬ」………と恨んだ男の魂が結晶して副守護神となり我々兩人にすつかり憑依つたのだ、因縁と云ふものは恐ろしいものだらう。かう申す言葉は決して黒ン坊が云ふのではない、友彦の靈魂が口を籍つて云うて居るのだ。さア返答は如何だ」

と形相凄じく肩腕を怒らせ汗臭い體で兩方から詰寄せて来る。

「ホ、ハ、ハ、ハ、これこれ黒ン坊さま、何ぢやお前は、卑怯千萬な、友彦の靈魂だなぞと………なぜ黒ン坊のチャンキー、モンキーが女王さまに惚れましたと、キツ

パリ云はぬのだい」

「ヤア割とは開けた女王様だ。それも其筈十五やそこらで大きな男を翻弄し故郷を飛び出すやうな阿婆摺れ女だから、其位な度胸は有りさうなものだ。そんなら小糸姫さま、改めて私等二人は、お前さまに心の底から、スエートハートをして居るのだ。餘り憎うもありますまい」

「ホ、ホ、ホ、ホ、あ、さうですかいな。それ程私に御執着ですか。矢張天下無雙のナイスでせう」

「ナイスは云はぬでも分つて居る。何うだ、吾々兩人の思召を聞いて下さるのか」
「妾は聾ぢやありませんよ。最前から一言も残らず聞いて居るぢやありませんか」
「ソナ聞きやうとは違ひますワイ。要するに、吾々の要求を容れて下さるかと言ふのだ」

「アタ阿呆らしい、誰が炭團玉のやうな黒い男に秋波を送りますか、烏の芝居だと思つて、最前から、面白可笑しう観覧して居るのだよ」

「コラ阿魔女……かう見えても俺は男だぞ。女の癖に、裸一貫の大男を嘲弄する

のか

何程胴殻は大きうても、お前の肝は餘り小さいから、【サツク】迄が矢張小さ

く見えて仕方がないワ

何處迄も吾々を馬鹿にするのだな。よしよし、この船を何處へやらうと俺達の

勝手だから、往生する所迄苦しめてやるからさう思へ

同じ船に乗った以上は、妾の苦しい時は矢張お前も苦しいのだ。妾はかうして

お客さまだから手を束ねて見て居るが、お前達は勞働せなくては一日も暮れない

身分だ。常世の國の果迄なりと勝手に漕いで往つたがよからう。妾は此廣々とし

た此海面を天國のやうに思うて、假令三年でも十年でも漂うて居るのが好きなの

だ

何と豪膽な女だな。流石は鬼熊別の血の流れを受けた丈あつて、どことはなし

に違つた所があるワイ。なア、モンキー、用心せぬと此奴は化物か知れないぞ。

何程膽力があると云うても十五や十六で之だけ胴の据わる筈がない。三五教の守

護を致して居る高倉か旭の化身かも知れない。………オイ一寸尻をあげて見い。

尻尾でも下げて居やがりやせぬか」

と小糸姫の背部を一生懸命見詰めながら、

「矢張此奴は真正銘の小糸姫だ。………オイ、モンキー愈是から不言實行だ」

「ヨシ合點だ」

とモンキーは前より、チャンキーは後より小糸姫に武者振りつき、手籠にせむと

飛び掛るを小糸姫は右に左にぬるりぬるりと身を躲し、暫し揉み合ひ居たりしが、

強力なる二人の男に取り押へられ「キヤツ」と叫ぶ折しも、四人の乗った一艘の

船、此場に浪を切つて疾走し來り、一人の女は二人の男に當身を喰はしたれば、

二人は脆くも船の中にウンと云つたきり大の字になり打ち倒れける。

小糸姫は思はぬ助け船のために危難を救はれ、一人の女に向ひ、

「危い所をお救ひ下さいまして有難う御座います」

と月夜に透かし見て、

「貴女は今子姫様、何うしてまア斯様な所へ御入來遊ばしました」

と聞かれて今子姫は驚き、

「さう云ふ貴女は顯恩郷の副棟梁様のお娘子、小絲姫様では御座いませぬか。去年の春、友彦の宣傳使と手に手を取つて何處へかお越し遊ばし、御兩親のお歎きは一通りでは御座いませぬ。傍の見る目もお氣の毒で耐りませなんだ。さア貴女は一日も早くお歸り遊ばして、御兩親に御安心おさせ遊ばすが宜しからう」

「イエエ何うあつても妾は龍宮の一つ島へ參らねばなりません。少し様子あつて友彦に別れ、今渡海の途中で御座います。顯恩郷の本山は益々隆盛で御座いますか」

「私は三五教の大神、素盞鳴尊様の御娘子五十子姫様の侍女となり、三五教の信者で御座いましたが、鬼雲彦様や、貴女の御兩親に改心して頂かうと、種々心は碎きましたなれど何うしても駄目、とうとう天の太玉命の宣傳使が御入來になり、鬼雲彦初め、御兩親は何處へか身を匿され、顯恩郷は今や三五教の靈場となつて居ります。そして妾は五十子姫様、梅子姫様と宣傳の途中、片彦、釘彦等部下の爲に促へられ、此船に乗せて流されました途中で御座います」

と聞いて小絲姫は大いに驚き、

「さすれば貴女は三五教に寝返りを打った謀反人。鬼雲彦様を初め、妾の兩親の敵も同様、サア此上は覺悟をなされ」

と懐劍をスラリと抜いて斬り掛らうとする。五十子姫、梅子姫、宇豆姫は、乗りに來し船の上より、騒がず焦らず端然として此光景を打ち看守つて居る。今子姫は言葉淑やかに、

「マアマアお鎮まり遊ばせ。何程貴女がお焦慮なさつても、此通り此方は四人の女、貴女は一人、到底駄目ですよ。それより貴女の度胸を活用し、龍宮の一つ島へ渡りお道の宣傳を開始なさつたら何うでせう。妾もお力になります」

小絲姫は勝敗の數既に決せりと覺悟を極め、

「世界は皆神様のお造り遊ばしたものの、謂はば世界の間人は神様の御子で御座います。神の目から御覽になれば妾も貴女も皆姉妹、今迄の事はスツカリと河へ流しイヤ海に流し、相提携して神様に奉仕しようではありませんか」

「それは眞に結構で御座います。……五十子姫様、梅子姫様、宇豆姫様、貴女方の御考へは如何でせう」

三人一度に頷く。

「アレ彼の通りお三人共、妾と御同感、さア是から御一緒に一つの船で参りませう。併し乍ら二人の男に活を入れ、助けてやらねばなりませんまい」

と今子姫は「ウン」と力を籠めて活を入れた。忽ち二人は正氣づき涙を流して謝罪つて居る。

「これはこれは二人の黒ン坊さま、長々御苦勞であつた。妾は是より三五教の宣傳使となつて、世界の隅々迄巡歴するから、お前達はこれで歸つてお呉れ」

と懷中より小判を取り出し投げやれば、二人は押し頂き、

「誠に御無禮をいたしました上に、之程澤山お金を頂戴致しまして有り難う御座います。左様なれば貴女は彼方の船にお乗り下さいませ。私共は此船で錫蘭の港に引返します、萬一友彦様に遇うたら何う申して置きませうか」

「ア知らないと言つて置くが無難でよからう」

二人は「ハイ有難う」と感謝し乍ら手早く櫓を操り、東北さして漕ぎ歸る。茲に五人の女は代る代る櫓を操りながら、浪のまにまに流されて、遂にオーストラ

リヤの一つ島に無事上陸する事となりける。

(大正一一・六・一四 舊五・一九 加藤明子録)

第四章 一島の女王(七三四)

今迄皎々たる淨玻璃の月は忽ち黒雲に蔽はれ、満天の星光は瞬く中に雲の帳に包まれた。海面は俄に薄闇く、暴風忽ち臻り、小舟を波のまにまに翻弄虐待する。船底に横たはり以前の夢を見て居た小糸姫は驚いて目を睜り、

「ア、大變な恐ろしい夢を見た。……これ船頭さま、俄に闇くなつたぢやないか、此處は一體何と言ふ所だなア？」

「あまり暗くて薩張り見當がとれなくなりました。然し大方ニュージールランドの近邊だと思ひます。波は刻々に高くなり、もう此上は風に任せて行く處まで行くより仕方がありません。斯う言ふ時にバラモン教のお經を唱へて下さつたら、チ

ツトは風も凧ぎませう。お姫様、何卒神様に願つて下さいな」

「此通り風が吹き波が荒く立ち騒ぎ……櫓櫂の方に一生懸命に力を入れて呉れる方が妾に取つて何程安全だか知れませぬよ。最前の夢の様な目に會はされては迷惑だから……」

「夢にドンナ目に會はれましたな？」

と言ひ乍ら一生懸命に櫓を漕いで居る。山嶽の如き波の間を、船は木の葉の風に散る如く浮きつ沈みつ、荒波の翻弄に任すより途はなかつた。忽ち巨大なる音響と共に船は一つの岩山に衝突し、滅茶々々になつて仕舞つた。小絲姫は辛うじて壁を立てた如き岩に壁蝨の様に喰ひつき、運を天に任し經文を唱へて居る。二人の男は如何なつたか浪の音に遮られ、一聲さへも聞く事が出来なかつた。一時ばかり經つと思ふ頃、空を包みし黒雲は拭ふが如く晴れ、風は凧ぎ、浪静まり、魚鱗の月光は海上一面に不知火の如く瞬き初めた。斯かる所へ四人の女を乗せた一艘の小舟、島影より悠々と現はれ來り、小絲姫が叫ぶ聲を聞きつけ、中の一人は棹をさし述べ漸々にして小絲姫を船中に救ひ上げた。二人の男の影は目に當らな

かつた。小糸姫は疲勞の結果、船底に横たはつたまま二時、三時ばかり顔を得上
げず、禮をも言はず蟹の如うな泡を吹いて苦しみ居たり。

メソポタミヤの顯恩郷 鬼雲彦が本城に

種々雑多と身を賣し 神素蓋鳴大神の

御言畏み八乙女が 鬼雲彦の側近く

仕へ待りてバラモンの 惡逆無道を立直し

國治立の大神の 至仁至愛の御息より

現はれ出でたる三五の 神の教に服はせ

名實叶ふ顯恩の 郷の昔に復さむと

心を配る折柄に 天の太玉宣傳使

數多の司を伴ひて 顯恩城に入り來り

言靈戦を開始して 鬼雲彦の大棟梁

其他の魔神を伊照らせば 忽ち大蛇と身を變じ

雲を起して遁げ去りぬ
天の太玉宣傳使

顯恩郷を掌り
此處に八人の乙女子は

天地四方の國々に
三五教の御教を

宣べ傳へんと手を別けて
荒野を彷徨ふ折柄に

バラモン教の枉神に
嗅出されて捕へられ

いたいけ盛りの姉妹は
半破れし釣舟に

投げ入れられて浪の上
何處を當てと定めなく

漂ひ來る折柄に
大海中に突き立てる

岩ばかりなる一つ島
邊に漕ぎ着き眺むれば

何れの人か知らねども
年端も行かぬ眞娘

岩に喰ひ付き聲限り
救ひを求めて叫び居る

仁慈無限の五十子姫は
三人の女子と諸共に

言はず語らず心合ひ
棹を延ばして救ひあげ

互に櫓櫂を操りつ
風に送られ西南

龍宮島を指して行く
あゝ惟神々々

靈の幸を隈もなく
世人の上に照らします

至仁至愛の神の御救ひに
小絲の姫は生きかへり

撥ね返りたる心地して
朝日の豊榮昇る頃

漸く頭を擡げける
四邊を見れば四柱の

顯恩郷に見覚えの
娘と見るより仰天し

暫し言葉も無かりしが
漸く心落ち着けて

「あゝ訝かしやいぶかしや
夢か現か幻か

五十子の姫や梅子姫
御供の宇豆姫、今子姫

貴女は何故海原に
彷徨ひ來り在しますぞ

是には深き理由の
在するならむ詳細に

宣らせ給へ」と手を合せ
胸もどきどき問ひかくる。

五十子姫は小絲姫に向ひ、

「貴女は顯恩郷の鬼熊別様のお娘子、如何して、マア斯様な處へお越しなされましたか。さうして友彦様は如何遊ばしましたか」

「それよりも貴女等四人様、斯様な處へ御船に乗つてお越し遊ばすとは合點が参りませぬ。何の御用で何處へ御いでになりますか、お聞かせ下さいませぬ」

「是には深い仔細が御座います。何れゆるゆる聞いて頂きますが、貴女から何卒先へお口開きを願ひます」

小絲姫は「ハイ」と答へて、顯恩郷を出でしよりその後友彦に別れ、此處迄逃げ來りし一伍一什の顛末を包み隠さず述べ立てた。四人は年にも似合はぬ小絲姫の惡辣にして豪膽なるに舌を捲きける。

梅子姫は呆れ顔にて、

「随分貴女も人格がお變りになりましたね」

「さうでせうとも、妾は龍宮の一つ島の未來の女王ですから、今迄の様な嬢や坊では數多の國人を治める事は出来ませぬ」

と未だ島影さへも見えぬ内から、早くも龍宮島を腹に呑んで居る豪膽不敵の女な

り。

五十子姫、梅子姫は善悪は兔も角、野蠻未開の地の女王としては最適任ならむ、此船に乗つたのを幸ひ龍宮島に到着する幾多の日數を應用して三五教の教理を體得せしめ、精神的天國を建設せしめむと早くも心に定め……顯恩郷を立ち出で、三五教の教理を四方に宣傳せむとする時しも、バラモン教の片彦、釘彦一派に捕へられ、此海に漂流し來りし事の顛末を細さに物語り、互に敵味方の障壁を除却し、一蓮托生の船の上にて遂に首尾よく小絲姫に三五教の教理を植付けた。

小絲姫は船中より已に女王氣取で五十子姫、梅子姫を顧問か參謀の様に獨り定めにして仕舞つた。今子姫、宇豆姫は自分の小使として待遇して居た。五十子姫、梅子姫は良き機關を得たりと喜び、表面十六才の阿婆摺れ娘の小絲姫を首領と定め、漸くにして五人の女は龍宮島のクスの港に無事到着し、船を岸邊に繋ぎ、五人は宣傳歌を歌ひ乍らさしもに廣き一つ島を足に任せて進み行く。日は漸く没して四方闇黒に包まれ、五人はとある谷川の邊に蓑を敷き安々と寢に就きけり。

猛獸の聲は山嶽も揺ぐばかり唸り出した。豪膽不敵の五人の女は松風の音が琴

の音位に軽く見做し、其聲を就寢の栞とし、他愛も無く此處に一夜を明した。四邊の果實を「むし」りて腹を拵へ、草茫茫々と身を没するばかりの谷道を宣傳歌の聲に木靈を響かせ乍ら、進み進みて或る一つの平坦なる部落に出たり。山と山とに包まれたる摺鉢の底の様な稍廣き原野と山腹に穴を穿ち、炭焼竈の様に各戸煙をボウボウと立てて居る。五人は原野の中央にある小高き大岩の上に登り、聲を限りに天津祝詞を奏上し宣傳歌を歌ひ出した。此聲に驚いてか、山腹の數限りもなき穴より色の黒き老若男女一つの穴より或は五人或は十人、二十人と這ひ出で各柄物を手にし、五人の立てる大岩の周圍に蟻の如く群がり集まつた。此處は一つ島にても稍都會と聞えたる萱野ヶ原といふ處であつた。一同は色白き五人の美女が岩上に立てる姿を見て、天津乙女の天上より降り給ひしものと固く信じ隨喜の涙を流し乍ら、四方八方より掌を合せ拜跪敬禮して居る。

斯かる處へ山奥より法螺貝の聲「ブウブウ」と響き渡り、見れば數百人の荒男を率ゐた大男驛馬に跨がり、ツカツカと此場に現はれ來り、

「ヤア、汝は何れの國より漂着してうせた。此一つ島は、他國人の上陸を許さざ

る秘密境だ。誰の許可を得て出てうせた。速に其岩を下り一々事情を申し傳へよ

小絲姫は泰然自若、満面に笑を湛へて大男の一行を看守つた。四人の宣傳使も

同じく兩手を組み合せ、儼然として小絲姫の兩脇に立ち、一同の顔を打ち看守つ

た。大の男は聲荒らげ、

「此方は一つ島の大棟梁ブランジーと言ふ者である。此方の威勢に恐れぬか。一

時も早く座を下り我等が縛につけ

と鬼の如き眼を光らしグツと睨めつけたるを、小絲姫は莞爾と笑ひ、

「愚なりブランジー、妾は天津神の命を受け、只今四柱の從者を率ゐ、五色の雲

に乗り此一つ島に天降りしものぞ。此國は妾が治むべき神の定め眞秀良場なれ

ば今日より妾に誠心を捧げて仕ふるか。さもなれば、天譴を下して槍の雨を降ら

せ、雷の弾を以て懲戒の爲め汝等を打滅し呉れむ。返答如何に

とキツと言ひ渡せば、流石のブランジーも崇高なる女の姿に首を傾け、暫し思案

に暮れて居た。數百人の荒男は武装の儘大地に平伏し、五人に向つて萱野ヶ原の

住民と共に兩手を合せ隨喜の涙に暮れて居る。ブランジーは此光景を見て我を折

り、また又もや馬うまを下りくだ大地だいちに平伏へいふくして歸順きじゆんの意いを表へうしたり。小絲姫こいとひめは言葉ことば淑しとやかに、
「汝なんぢは天津あまつ乙女をとめの棚機たなばた姫ひめに歸順きじゆんせし徳とくに依よつて、妾われが從司じうしんとなし重おもく用もちひむ。飽あく

迄までも誠まことを以もつて吾等われらに仕つかへよ」
と巧うまく言靈ことたまを應用おうようすれば一同いちどうは感かんに打うたれ、五人ごにんの宣傳せんでん使しを神人しんじんと敬うやまひ、前後ぜんごを
護まもりて稍展ややてん開かいせる美うるはしき原野げんやの中なかの都會とくわいに導みちびき、廣殿ひろどのに五人ごにんを迎むかへて心こころよりの
馳走ちそうを拵こしらへ、いと懇ねんごろに誠意せいを表へうしたりける。

茲ここに五人ごにんは一つ島しまの花はなと謳うたはれ、三五あななひの神かみの教をしへを四方よもに宣傳せんでんし、其驍名そのげうめいは全島ぜんたう
に轟とどろき渡りわたりけり。此處ここを是これより地恩郷ちおんきやうと命名めいめいし、小絲姫こいとひめは遂ついに島人しまびとに擧あげられて
女王ぢやわうとなり黃龍わうりゆう姫ひめと改名かいいいする事こととなりける。

茲ここに五十いそ子こ姫ひめは今子いまこ姫ひめを從したがへ、梅子うめこ姫ひめ、宇豆うづ姫ひめを小絲こいと姫ひめが左右さいうに侍じせしめ、自おの
轉倒ころじま島しまさして神素かむす盞さ鳴の大神おほかみの御跡みあとを慕したひ進すすみ渡わたる事ことなりぬ。ブランジらんじーの妻つまに
クロンバクロンバーといふ女をんなあり。夫婦ふうふ何いづれも五十ごじふの坂さかを四よつ五いつつ越こえたる年輩ねんばいなり。ブ
ランジらんじーはクロンバクロンバーと共に今いまは黃龍わうりゆう姫ひめの宰相さいしやう役やくとなり、遠近えんきんに其名そのなを轟とどろかして
居ゐた。クロンバクロンバーは或時あるとき黃龍わうりゆう姫ひめに拜謁はいえつを乞こひ奥おくの間ま近く進すすみ入り、

「黄龍姫様に折入つてお願いが御座います。妾の夫ブランジ―は貴女様のお見出しに預り、宰相として恩寵を辱なうし、此島に於ては飛ぶ鳥も落す勢となりました。クロンバー身にとり有難く御禮の申し上げ様も御座いませぬ。御存じの通り大男の不束者で御座いますれば、何卒御見捨てなく末永く使つてやつて下さいませ。妾は實は此島の生れではなく、聖地エルサレムに仕へて居りました者で御座います。大切なる玉の紛失せし爲め其所在を探ねむと、龍宮の乙姫様の生宮として今年で殆ど満二年、残る隈なく探せども今に所在は分らず、何卒々々貴女のお眼力を以て御示し下さらば有り難う御座います」

黄龍姫は嚴然として、

「是は珍らしき汝の願ひ、其玉と申すは如何なる玉なるぞ」

「ハイ、左様で御座います。金剛不壞の如意寶珠に黄金の玉、紫の玉の三つの御寶で御座います。今迄は自轉倒島の三五教の東本山に納めありし處、何者にか盗み取られ今に行方が分りませぬ。黄金の玉は妾が保管致して居りました所、何者にか盗み出され、又残り二つの玉は噂に聞けば是亦行方不明との事、何卒貴女の

御神力を以て、此島の何れの地點にあるやお示し下さらば有り難う存じます」

黄龍姫はさも鷹揚さうに微笑み乍ら、

「其寶玉は此龍宮島には隠しては無い。自轉倒島の或地點に隠しあり、容易に發掘すべからず、最早汝は玉に對する執着心を離れ、ブランジーと共に誠心を盡して國務に奉仕したが宜からう」

と言ひ捨て逃ぐるが如く奥殿に姿を隠して仕舞つた。後にクロンバーは獨言、
「アア、仕方がない。黄金の玉を紛失し、高姫様に叱り飛ばされ、守護神の囁きに依つて龍宮の一つ島に隠しあると聞き、此處まで探ねて來たものの、此廣き島に三年や五年國人を使うて探して見た處で雲を掴む様な咄し、黄龍姫様のお言葉に依れば三つの寶は此島には無いとの事、如何したら宜からうか。彼の玉無き時は如何しても聖地に歸り高姫様に會はず顔がない。此黒姫は夫高山彦と共にブランジー、クロンバーと外國様に名を變へて此島に居るものの、もう斯うなつては何程結構な役を仰せ付けられても聖地に比ぶれば物の數でも無い。ア、早く歸り度いものだナア」

と語る折しもブランジ―は此場に現はれ、

「ヤア黒姫、早く館へ歸らうぢやないか。黄龍姫様の御機嫌を損ねてはならないぞ」

「高山さま、何を仰有る、もう妾は此島が嫌になりました。何程探したとて此廣い島に手掛りの出来る筈がありません。此上は破れかぶれ、一旦聖地へ立ち歸り、三五教を根本より立直し、言依別の教主を追つ放り出さねば蟲が得心致しませぬ。我々夫婦が波濤萬里の此島へ来て苦勞するものも、皆言依別のためではありませんか。か、エ、残念や、口惜や、妾はもう破れかぶれ、是から狂亂になりますから其積りで居て下さい」

「ハ、ハ、ハ、ハ、又何時もの瘡癩病が突發したのか。マアママ宅へ歸つて、酒でもゆつくり飲んで其上の事にしようかい」

と背を三つ四つ打ち、クロンバーの手を引いて己が館へ歸り行く。

(大正一一・六・一四 舊五・一九 北村隆光録)

第二篇 南洋探島

第五章 蘇鐵の森〔七三五〕

生命の綱と頼みてし 三つの神寶の所在をば

執念深く何處までも 探さにや置かぬと高姫が

夜叉の如くに狂ひ立ち 積る思ひの明石瀉

浪の淡路の島影に 船打ち當てて沈没し

九死一生の大難を 玉能の姫に助けられ

感謝するかと思ひきや 心の奥に潜むなる

自尊の悪魔に遮られ 生命の親をさまざまに

罵り嘲り東助が 操る船に身を任せ

玉たまの所在ありかは家島えしまぞと 心こころを焦いらちて到着たつちやくし

イロイロ雑多ざつたと身みを盡つくし 心こころ碎くだきし其揚句そのあげく

絶望ぜつぼうの淵ふちに身みを沈しづめ 如何いかにはせむと とつおいつ

思案しあんに暮くる折柄をりからに 濱邊はまへに繋つなげる新調しんてうの

小舟こぶねに身みをば任せまかせつつ 貴州くわんしゅう從したがへ玉たまの緒をの

生命いのちの瀬戸せとの海面かいめんを 力ちから限かぎりに漕こぎ出いだし

小豆せうどケ島がしまへ漂へうちやく着やくし 又またもや玉たまの所在ありかをば

探さぐらんものと國城くにしろの 山やまを目め蒐がけて驅かけ登のぼり

岩窟いはやの中なかにてバラモンの 神かみの司つかさの蜈蚣むかで姫ひめ

館やかたに思おもはず迷まよひ込こみ 早速さそくの頓智とんち高たか姫ひめは

蜈蚣むかでの姫ひめが心こころ汲ひくみ 表面うはつらばかり親善しんぜんの

姿装すがなそほひ漸やうやうに 敵てきの毒手どくしゆを逃のがれつつ

蜈蚣むかでの姫ひめを利り用ようして 玉たまの所在ありかを探さぐらむと

再ふたび船ふねに身みを任まかせ 一いつ行かう數すう人にん波なみの上うへ

馬關海峡打過ぎり

西へ南へ進み行く

蜈蚣の姫は第一に

玉の所在を索めつつ

戀しき娘の所在をば

探らむ爲の二つ玉

愛と欲とに搦まれて

スマートボール其外の

供を従へ高姫が

船に棹さし進み行く

心そぐはぬ敵味方

さしもに廣き海原の

波は凪げども村肝の

心の海に立つ波は

穩かならぬ風情なり。

焦つく様な暑い日光を浴びた一行は、汗を瀧の如くに搾り出し、

需めむと、やうやうにして海中に泛べる大島の磯端に船を横たへ、

水を求めつつ草木を別けて互に「オーイオイ」と聲を掛け、

内深く進み入った。渴き切つたる喉よりは最早皸唄れ聲も出なくなり

高姫は漸くにして蘇鐵の森に着きぬ。一丈許りの蘇鐵の幹は大蛇の突立つて

傘を擴げた如く、所狹き迄立竝ぶ。蘇鐵のマラを眺めて矢庭に貫州に命じ、「むしり」取らしめてしがみ始めたるに、何とも知れぬ甘露の如き甘き汁、嚙むに従つて滲み出で、漸く蘇生の思ひをなせり。……… 蜈蚣姫一行も漸くにして此場に現はれ、高姫が「むしり」取つたるマラに目を注ぎ渴を醫する爲に、餓鬼の如く喰ひ付かんとする一刹那、マラの實は忽ち延長し一丈許りの大蜈蚣となつてノ口と這ひ出し、其儘蘇鐵の幹にのぼり、次から次へと條蟲の如く延長して蘇鐵の幹を残らず巻き、一指をも添へざらしめむとせり。蜈蚣は長さ太さを時々刻々に増し、一時程の間に此大島全體を巻き盡したりける。

高姫、蜈蚣姫其他の一行は、樹木と共に蜈蚣に包まれ、息も絶え絶えに天津祝詞を奏上し、バラモン教の經文を唱へ、只管身の安全を祈る事のみ之餘念なかりけり。

マラの變化より成出でたる蜈蚣は、大島を十重二十重に巻き、四面暗澹として暗く、得も言はれぬ不快の空氣に、呼吸器の働きも停止せむ許りとなりき。九死一生の破目に陥りたる高姫は、最早是までなりと總ての執着心に離れ、運命を惟

神に任せ、觀念の眼を閉ぢ死を待ちつつありける。

忽ち頭上より熱湯を浴びせかけた如き焦頭爛額の苦みを感じずると共に、紫磨黄

金の肌を露はしたる巨大の神人、忽然として此場に現はれ來り、

「汝日の出神の生宮と稱する高姫、今茲に悔い改めずば汝は永遠に今の苦みを味

はひ、根底の國の消えぬ火に焼るべし」

と云つた儘姿は消へたり。一方蜈蚣姫は、頭上より氷の刃を以て突き刺されし如

き大苦痛を感じ、七轉八倒身を蹴く折しも、墨の如き黒き巨顔を現はし、眼球は

紅の如く輝きたる異様の怪物、首から上許りを暗黒の中にも殊更黒き輪廓を現は

し乍ら、長き舌を出して蜈蚣姫の頭部面部を舐めた其恐ろしさ、流石氣丈の蜈蚣

姫も其厭らしさに身の毛もよだち、何の應答も泣く許り、怪物の舌の先よりは無

数の小さき蜈蚣、雨の如くに現はれ來り、蜈蚣姫の身體を空地もなく包み、所構

はず無數の鋭き舌劍を以て咬みつける其苦しき「キヤツ」と叫んで其場に倒れ、

右に左に轉げ廻る。此時高姫は漸く正氣に復し四邊を見れば、酷熱の太陽は晃々

と輝き亘り、數多の樹木青々として、吹き來る海風に無心の舞踏をなし居たり。

高姫は、

「ア、夢であつたかイナア。それにしても此怪しき蘇鐵、斯かる怪異の續出する島に長居は恐れ、一時も早く此島を離れ、寶の所在を探らむ。貫州來れツ」
と四邊を見れば、貫州はドツカと坐し、瞑目した儘腕を組み、石像の如くに固まり居る。高姫は一生懸命に祝詞を奏上し、頬を抓り、鼻を摘み、イロイロ介抱をする。半時ばかりを費したり。されど貫州は血の氣の通はざる石像の様に、何處を撫でても少しの温か味も無くなり居る。高姫は何となく寂しさに襲はれ、泣き聲まぜりになつて、

「コレ貫州、今お前に斯んな所で死なれて、どうなるものか、……チツト確かりしてお呉れ」

と泣き口説く。貫州は漸くにして左の目をパツチり開けた。されど黒球はどこへか隠れ、白眼計り剥き出し、木の根の様な筋に赤き血を漲らし、赤き珊瑚樹の枝の様に顔面が見えて居る。

高姫は一生懸命に祈願を凝らす。此時今迄大地に打つ倒れて居た蜈蚣姫は無言

の儘ムクムクと立上り、高姫の前に又ツと現はれ、怒りの形相凄じく、拳を固め、平家蟹の様な面をさらして睨付け出した。又もやスマートボールむくむくと立上り、白玉計りの兩眼を剥き出し、口を尖らせ、蟪蛄の様な手付をし乍ら、鶴嘴を以て土方が大地を掘る様に、高姫の頭上目蒐けてコツンコツンと機械的に打ち始めた。其手は鐵の如く固くなつて居る。高姫は此銳鋌を避くる爲、身をかはさむと焦れども、土中より生えたる木の如く、一寸も身動きならず、止むを得ず同じ箇所を幾回となく、拳の鶴嘴につつかれて居るより仕方なかりけり。

此時天上の雲を押し開き、天馬に跨り此方に向つて下り來る勇壯なる神人あり。數百人の騎馬の從卒を伴ひ、鈴の音シヤンシヤンと一歩々々空中を下り來り大音聲にて、

「汝は高姫ならずや。日の出神と自稱する汝が守護神は、常世の國のロツキー山に發生したる銀毛八尾の惡狐なるぞ。只今汝が靈縛を解かむ。今日限り悔い改め、假りにも日の出神などと名乗る可らず。我こそは眞正の日の出神なり。一先づ此場は神直日大直日に見直し開き直し、汝が罪を赦すべし。是れより汝は蜈蚣姫の

一行と共に南洋に渡り、龍宮の一つ島に到りて、黒姫を救へ。ゆめゆめ疑ふな」
と云ひ棄てて馬首を轉じ、數多の從神と共に、轡を竝べて天上高く昇らせ玉ひぬ。
此時何處ともなく空中より大なる光玉現はれ來り、高姫が面前に轟然たる響と共に
に落下し、火は四邊に爆發飛散し、高姫一行の身は粉碎せしかと思ふ途端に目を
醒せば、大蘇鐵の下にマラをしがみながら倒れて居た。蜈蚣姫其他一同は、炎天
の草の上に頭の巨大なる蛇蠅などに、或は刺され、或は舐められ乍ら、息も絶え
絶えに倒れ居たり。貫州はと見れば、そこらに影もない。高姫は力限りに、

「オイ、オーイ、貫州々々」

と叫び始めたるに、あたりの森林の雜草を踏み分けて、大なる瓢箪に水を盛り、
ニコニコとして此處に現はれ來る男の姿を見れば、擬ふ方なき貫州なり。

「高姫様、お氣が付きましたか。サア此水をおあがり下さいませ」
と自ら手に掬うて高姫に啣ませた。高姫は初めて心神爽快を覚え、

「ア、持つべき者は家來なりけり、お前がなかつたら妾は如何なつたか分らない。
就ては幸ひ蜈蚣姫其他の連中は此通り昏倒つて居れば、今の間に前と二人、あ

の船に乗つて龍宮島へ渡り、玉の所在を探さうぢやないか』
と云ひ乍ら稍首を傾げ笑みを湛へて貫州の顔を覗き込み、貫州の返辭を「もどかし」げに待ちわび居る。貫州は高姫にむかい、

「それだから貴女は不可ないのです。假令敵でも味方でも助くるのが神の道、此島へ斯の如く弱り切つた人々を残し、我々兩人が船を操り逃げ歸るなどと、左様な残酷な事がどうして出来ませうか。貴女はまだ改心が出来て居ないのですなア」

「大功は細瑾を顧みず、天下國家の爲には少々の犠牲を拂はなければならぬぢやないか。お前はそれだから困るのだよ。まるで女の腐つた様な氣の弱い男だから……サア貫州、妾に従いておいで、是れから二人が出世の仕放題、こんな奴を連

れて行かうものなら足手纏ひになるばかりか、大變な邪魔者だ。サア行かう』
と元氣恢復したのを幸ひに、夢の裡の日の出神の訓戒を忘れ、功名心に驅られスタスタと先に立ちて磯邊に進まうとする。貫州は高姫の顔を心無げに見遣り乍ら、耳に入らざるものの如く装ひ、瓢箪の清水を蜈蚣姫の口に啣ませた。蜈蚣姫は初めて生來る心地し乍ら起きあがり、兩手を合せて貫州に感謝の意を表す。貫州

は是れに力を得てスマートボールを初め、其他一同に水を與へたり。高姫は此態を見て目を釣り上げ、面をふくらせ眺めて居る。蜈蚣姫は立あがり、
「高姫様の御指圖に依つて、貫州様は厭々乍ら、主人の命だと思ひ、私達に結構な水をドツサリ與へて元氣を恢復させて下さいました。お陰で私の身内の者も皆助かりました。主人の心下僕知らずとやら、仁慈無限の高姫様の大御心に反抗する貫州さまは、餘程可愛い人です。貴女等主従の御爭論を、妾は一伍一什聞かして頂きました。……高姫様、御親切有難う御座います。此御恩はキットお返し申します。オホ、々、々、」
と肩を揺り、厭らしさうに笑ふ。スマートボールは立あがり、
「コリヤ貫州、……貴様は餘程腹の悪い奴ぢや……無いワイ。よう俺を助けて呉れやがった。キット御禮を申すから、さう思つて居れ。……モシ高姫さま、貴女は三五教に反旗を掲げて、ウラナイ教を創立なさつた様な日の出神の偽宮だから、流石は仁慈に富み、申分の無い善人ぢや……無い。よう我々を助けてやらうと思ひくさらなんだ。アツクアツク御禮申しますぞ」

「オツホ、、、、皆さまの態のよい當てこすりワイの。こりや決して高姫の精神から言つたのぢやない。蜈蚣姫様やお前達の守護神が高姫の體內を藉つて言つたのだ。高姫の守護神は臨時貫州に憑つたのだよ。それだから昔の根本の身魂の因縁が分らぬと、善が悪に見えたり、悪が善に見えたり致しますぞや。神様のイロイロとして心をお引き遊ばす引つかけ戻しのお仕組だから、人が悪に見えたら、自分の心を省みて改心なされ。人の悪いのは皆我が悪いのだ。此高姫は水晶玉の世界の鑑、皆の心の姿が映るのだから、キット取違ひをしては可けませんぞや。アア蜈蚣姫様も餘程身魂の研けたお方ぢやと思つたが、日の出神の生宮の前に出て來ると、まだまだ完全な所へは往けませぬワイ」

蜈蚣姫は吹き出し、

「オホ、、、」

一同は、

「アハ、、、、」

と共笑する。貫州は、

「ア、何が何だか、サツパリ見當が取れなくなつて來たワイ」

高姫は腮をシヤクリ、

「きまつた事だよ。見當の取れぬお仕組と、變性男子が仰有つたぢやないか。此事分りて居る者は世界に一人よりない……とお筆に現はされて居るだらう。お前達に誠の仕組が分りたら、途中に邪魔が這入りて、物事成就致さぬぞよ。オホ、ホ、ホ、ホ、」

と大きい肩を揺つて雄叫びする。蜈蚣姫は眉毛にそつと唾をつけて素知らぬ顔……

……

「モシ高姫さま、貴女は自在天様の御眷族の生宮だと仰有るかと思へば、日の出神の生宮とも仰有る様だし、實際の事は何方の守護神がお懸りなのですか」

「變幻出沒千變萬化、自由自在の活動を遊ばす自在天様の御守護神だから、時あつて日の出神と現はれ、又大國別命の眷族……實際の所は大黒主命の御守護が主なるものです」

「日の出と大【クロ】と……大變な懸隔ですなア。蜈蚣姫には、善惡の區別が

まったく裏表の様に思へますワ」

「お前さまにも似合はぬ愚問を發する方ですなア。顯幽一致、善惡不二、裏があれば表があり、表があれば裏がある。表裏反覆常なき微妙の大活動を遊ばすのが眞の神様ぢや。馬車馬的の行動を取る神は、畢竟人を指揮する資格の無いもの、妾等は大黒主命の生宮たる以上は、すべての神人を、大自在天様に代つて、指揮命令する特權を惟神に具備して居る。所謂日の出神の岩戸開きの生宮で御座る。

神はイロイロとして心を曳くから引掛戻しに懸らぬ様に御用心をなされませ」

「何時の間にやら、貴女も顯恩城の信者に化け込んで居られた時とは、口車が餘程運轉する様になりましたなア。蜈蚣姫も感心致しましたよ」

「化け込んだとはソラ何を仰有る。誠正直生粹の日本魂で大自在天様を信仰して居りました。ウラナイ教と謂つても、三五教と言つてもバラモンでもジアンナイ教でも、元は一株、天地根本の大神様に變りはない。併し乍ら今日の所ではお前さまの奉ずるバラモン教の行方が一番峻酷で、不言實行で、荒行をなさるのが御神慮に叶ふと思つたから、國城山でお目に掛つてより、層一層バラモンが好にな

つたのですよ。サアサア斯うなれば姉妹も同様、一時も早く所在を探しに参りませう」

「私は最早玉なんか執着心はありませぬ。それよりも心の玉を研くのが肝腎だと気がつきました」

「ホ、ホ、ホ、重寶なお口なこと。天にも地にも唯一人の小糸姫様の所在が分りかけたものだから、玉所の騒ぎではない。一刻も早く小糸姫さんに遇ひたいと云ふのが貴女の一念らしい。それは無理もありませぬ。何と云つても目の中へ這入つても痛くない一人娘の事だから、國家興亡よりも自分の娘が大切なのは、そりや人情ですワ」

と嘲る様に云ふ。蜈蚣姫は高姫の言葉にムツとしたが、何を云つても唯一艘の船、高姫の機嫌を取らねば目的地へ達する事が出来ないと思つて、ワザと機嫌よげに、
「ホ、ホ、ホ、これはこれは高姫さまの御教訓、感じ入りました。つい吾子の愛に溺れ、大事を誤りました私の不覺、【はした】ない女とお笑ひ下さいませぬ。そんなら此れより神第一、吾子第二と致しませう」

高姫 第三に玉ですか、あなたのお説の通り、そこまで研けた以上は、有形的の玉よりも、貴女は小糸姫様に會ひさへすれば結構なのでせう。モウ玉なんかに執着心を持たぬ様になされませ。其代りに妾は其玉を發見次第御預り致し、妾の手より大自在天様に御渡し申しませう。宜しいか。一旦貴女のお口から出たこと、吐いた唾液を呑み込む譯にもいきますまい」と目を据ゑて蜈蚣姫の顔を一寸見る。蜈蚣姫はワザとに顔を背け、何喰はぬ顔にて、

「何事も貴女に任せませう」

「モシモシ蜈蚣姫様、そりや目的が違ひませう。貴女も魔谷ヶ嶽に永らく御苦勞なさつたのも、玉の所在を探さむ爲でせう。何と云ふ氣の弱い事を仰有るのだ。假令高姫さまが何と仰有つても、スマートフォンが承知しませぬぞ」

「何事も私の胸に有るのだから黙つて居なさい」

「胸に有るとは、蜈蚣姫さま、何があるのですか。餘程陰險な事を仰有るぢやありませんか。さうすると今妾に仰有つた事は詐りでせう」

假にも神様に仕へる妾、鬼熊別の女房、どうして嘘偽りを言ひませう。あまり軽蔑なされると、此蜈蚣姫だつて此儘には置きませぬぞ」と肩を怒らし口をへの字に結んで齒ぎりし乍ら、形相凄じく高姫の顔を睨みつけたり。

「ホ、ホ、ホ、平家蟹が陀羅助を喰つた様なお顔をなされますな。貴女もヤツパリ腹が立ちますか。忍耐と云ふ寶を如何なさいました」

「それは貴女のお見違ひ、妾は腹が俄に痛くなつて苦しみ悶えた結果、顔付が怖くなつたのです。ア、お陰様で大分に緩んで來ました。サアサア皆さま、仲よう

して一つの船でこの荒波を渡りませう。十分お水の用意をして……」

と各自に器の有り丈を引抱へ、檳榔樹の生え茂る林の中を潛り、貫州に導かれて、谷間の水溜りを求め、辛うじて水を充たせ、漸く船に積み込み、月明の夜を幸ひ、折からの順風に帆を上げ西南に舵を取り、海上に起伏する小島を縫うて進み行く。

(大正一一・七・二 舊閏五・八 松村眞澄録)

第六章 アンボイナ島（七三六）

高姫、蜈蚣姫を乗せたる船は、波のまにまに大小無数の島嶼を右に左に潜りつ
つ進み行く。俄に包む濃霧に咫尺を辨ぜず、此儘航海を続けむか、何時船を岩石
に衝き當て破壊沈没の厄に會ふも知れざる破目になつて來た。流石の兩婆アも船
中の一同も「はた」と當惑し、何となく寂寥の氣に充たされ、臍の邊りより喉元
さして舞ひ上る熱き凝固は、螺旋状を爲して體內を掻き亂すが如く、頭部は警鐘
亂打の聲聞え、天變地妖身の置き處も知らぬ思ひに惱まされた。何ともなく嫌ら
しき物音、鬼哭啾々として肌に粟を生じ心膽絲の如く細り、此上少しの風にも、
玉の緒の絲の斷絶せむ許りになり來たり。何處ともなく嫌らしき聲、頭上に響き
渡りぬ。

「ア、飽迄我を立て徹す高姫、蜈蚣姫の兩人、天の八衢彦命の言葉を耳を浚へ
てよつく聞け。汝は悪がまだ足らぬ。悪ならば悪でよいから徹底的の大悪になれ。
大悪は即ち大善だ。汝の如き善惡混淆、反覆表裏常なき改慢心の大化物、是こそ

眞しんの惡あくであるぞよ。惡あくと云いふ事ことは萬事ばんじ萬端ばんたん、神界しんかいの爲ためめに埒らちが【あく】働はたらきを言いふのだ。

イ、嫌いやらしい聲こゑを聞きかされて慄ふるひ上あり、意氣い銷沈せうちんの意氣地い無なし。今いま此處こゝで慣用くわんよう手段しゆだんの日の出神でのかみを何故なぜ現あらはさぬか。大黒主命おほくろぬしのみことは如何どうしたのだ。因循いんじゆん姑息こそく、惡魔あくまの我わが言げんに唯々「あ」あだくだく諾々「あ」あだくだくとして畏服「あ」ふくいた致いたす【イ】カサマ宣傳使せんでんし。ても【い】げち無ない可憐いらしげい者ものだなア」

高姫たかひめは直ただちに、

「何いづれの神様かみさまか存ぞんじませぬが、

ア、惡あくをやるなら大惡だいくをせいとはチツトと聞きえませぬ。善ぜん一筋ひとすぢの日本魂やまとだましひの生粹きつすゐを立たて貫ぬく此高姫このたかひめ。

イ、【い】つかないつかない、變性へんじやう女子うに的よして貴女あなたの言葉ことばには贊成さんせい出來でませぬ。なア
蜈蚣むかで姫ひめさま、お前まへさまもチツト、アフィンとして【い】ぢけて居をらずに、ア、イ、
【アイ】共ともに力ちからを協あはせ、相槌あいづちを打うつたら如何どうだい。斯こんな時ときこそ誠まことの神かみの
御神力ごしんりきを現あらはさいで何時いつ現あらはすのだ、ア、イ、意氣地いのくない人ひとだなア」

空中より怪しき聲、

「ウ、、、煩さい代物だ。何處までも粘着性の強い高姫の執着、有無轉變の世の中、今に逆「とんぼり」を打たねばならぬぞよ。言依別の教主に反抗致した酬い、眼は眩み波にとられた沖の船、何處にとりつく島もなく、九死一生の此場合に立ち到つて、まだ改心が出来ぬか。」

「エ、、、偉相に我程の者なき様に申して世界中を股にかけ法螺を吹き捲り、誠の間を迷はず曲津神の張本人、鼻ばかりの高姫が今日は斷末魔、切ても切ても可憐想な者だ。浮世に望みはないと口癖の様に申し乍ら、其實、浮世に執着心最も深く、偉相に肩臂怒らし大聲で嚇す夏の雷鳴婆ア……。」

「お、、、鬼とも蛇とも悪魔とも知れぬ性來に成りきりて居りても未だ氣がつかぬか。恐ろしい執着心の鬼が角を生やして其方の後を追つ掛け來り、今此處で往生させる大神の御經綸、尾を捲いて改心するのは今であらう。返答は如何だ」

高姫は負けず、又もや、

「ウ、、、煩さい事を仰有るな。」

エ、、えたいの知れぬ聲を出して、

オ、、嚇さうと思つても日の出神の生宮はいつかな、いつかな、ソナチヨツコ

イ事に往生は致しませぬぞ。一つ島の女王と聞えたる黄龍姫を、【お】産み遊ば

した蜈蚣姫の姉妹分とも言はれたる此高姫、何れの神か曲津か知らねども、チツ

トは物の分別を辨へたが宜からうぞ」

空中より、

「カ、、重ねて言ふな、聞く耳持たぬ。蛙の行列向ふ見ず、此先には山嶽の如き

巨大な蛙が現はれて、奸智に長けたる汝が身も魂も、只一口に噛み碎き亡ぼして

呉れる仕組がしてあるぞ。叶はん時の神頼みと言つても、モウ斯うなつては駄目

だ。神は聞きは致さぬから左様心得たが宜からう。

キ、、危機一髪、機略縦横の高姫も最早手の下し様もあるまい。氣違ひじみた氣

焰を吐いた其酬い、氣の毒なものだ。聞かねば聞く様にして聞かすと申すのは此

事であるぞよ。

ク、、黒姫と腹を合せ、變性男子の系統を眞向に振り翳し、神界の經綸を無茶苦

茶ちやに致いたした曲く者せもの、苦く勞らうの凝かたまりの花はなが咲さくと何時いつも申まをして居をるが、神かみの道みちを碎くだく苦く勞らうの凝かたまりの花はなは今いま愈よ咲よきかけたぞよ。

ケ、見けん當たうのとれぬ仕し組ぐみだと申まをして遁とんじ辭じを設まうけ、誤ご魔まく化わして來きた其その酬むくい。

コ、堪こらへ袋ぶくろの緒をがきれかけたぞよ。聖せい地ちの神かみ々がみを困こまらしぬいた狡か猾うくわつし至ごく極くの汝なんぢ高たか

姫ひめ、我われと我わが心こころに問とうて見みよ。心こころ一いつつの持もち様やうで善ぜんにも惡あくにもなるぞよ。

サ、探さぐ女めし醜こめ女にんの兩りやう人にん、よくも揃そろうたものだ。【サ】ア是これからは蜈むか蚣で姫ひめの番ばんだ。

逆さか様さま事ことばかりふれ廻まはり天てん下か萬ばん民みんを苦くるしめた蜈むか蚣で姫ひめの一いつ派ぱ。

シ、思し案あんをして見みよ。神かみの申まをす言こと葉はに少すこしの無む理りもないぞよ。皺し苦く茶ちや婆ばアにな

つてから、娑し婆ばに執し着ちやく心しんを發はつ揮きし、死し後ごの安あん住ちう所しよを忘わすれ、獅し子し奮ふん迅じんの勢いきほひを以もつて種しゆ々じゆ

雜ざつ多たの惡あく計けいを廻めぐらし乍ながら、至し善ぜん至し美び至し眞しんの行かう動どうと誤ご解かいする癡たわけ者もの。

ス、少すこしは胸むねに手てを當あてて見みよ。素す盞さん鳴の大おほ神かみの御ご精せい神しんを諒りやう解かいせぬ間うちは、何なに程ほど汝なんぢ

が焦あ慮せるとも九く分ぶ九く厘りんで物もの事ごと成じやう就じゆは致いたさぬぞよ。

セ、背せ中なかに腹はらが代かへられぬ様やうな此この場ばの仕し儀ぎ、それでも未まだ改かい心しんが出で來きぬか。雪せ

隱つちん蟲むしの高たか上あがり、世せ間けん知しらずの大おほ馬ま鹿か者もの。

ソ、其方達二人が改心致さぬと、總ての者が總損ひになつて、まだまだ大騒動
が起るぞよ。早々改心の實を示せ。【そ】うでなければ今此處で【ソ】グリ立
てやらうか」

「ソ、【そ】れは、マア一寸待つて下さい。【そ】れ程妾の考へが違つて居ま
すか。此蜈蚣姫は明けても暮れても、神様の爲め、世界の爲め、人民を助ける爲
めに、苦勞艱難を致して居る善の鑑と堅く信じて居ります。【そ】れが妾の生命
だ。何れの神か悪魔か知らねども、我々の心が分らぬとは實に残念至極だ。粗忽
しい、觀察をせず、もうチツト眞面目に妾の腹の底を調べて下さい」

空中より、

「タ、叩くな叩くな、腹の中をタ、断ち割つて調べてやらうか。高姫も同様
だぞ、汝の腹の中は千里奥山古狸の棲處となつて居る。日の出神と名乗る奴は銀
毛八尾の古狐の眷族だ。大黒主と名乗る奴は三千年の劫を経たる白毛の古狸だ。
又蜈蚣姫の腹中に潜む魔神はアダム、エバの悪靈の裔なる大蛇の守護神だ。
チ、違ふと思ふなら、今此處で正體を現はさうか。地の高天原を蹂躪せむと、

汝等兩人の體內を借つて仕組んで居るのだ。汝はそれも知らずに誠一つと思ひつめ、自分の身魂に自惚し、最善と感じつつ最悪の行動を敢へてする、天下の曲津神となつて居るのに氣がつかぬか。

ツ、〔つ〕まらぬ妨げを致すより、月の大神の心になり、心の底より悔悟して。テ、天地の神にお詫を致せ。

ト、〔ト〕ンボ返りを打たぬうち、トツクリと思案を致し、〔ト〕コトン身魂の洗濯を勵むが肝腎だぞよ。

ナ、何と申しても其方等は曲津の容器。彌勒神政の太柱は地の高天原に、神世の昔より定められた身魂が儼然として現はれ給ふ。何程其の方が焦慮つても、もう駄目だ。

ニ、二階から目薬をさす様な頼りのない法螺を吹き廻るより、生れ赤子の心になつて言依別の教主の仰せを守れ。

又、〔又〕ーボー式の言依別だど何時も悪口を申すが、其方こそは言依別の神徳を横奪せむとする、〔又〕ースー式の張本人だ。

ネ、熱心な信者を誤魔化し、蛇が蛙を狙ふ様に熱烈なる破壊運動を致す佞人輩。
ノ、野天狗、野狐、野狸の様な野太い代物。喉から血を吐きもつて、折角作り上げた誠の魂を攪亂致す野太い代物。下らぬ望みを起すよりも良い加減に往生致したら如何だ」

高姫は、

「もうもう十分です。」

ハ、ハ、ハ、ハ、ラハラします。腹が立つて歯がガチガチしだした。早くしようも無い事は、もうきりあげて下さい。

ヒ、日の出神の生宮が堪忍袋の緒を切らしたら、何程偉い神でも堪りませぬぞ。フ、不都合千萬な、此方の行動を非難するとは何れの神だ。

へ、屁でもない理屈を並べて閉口さそうと思つても……【ン】……此高姫さまは一寸お手には合ひませぬワイ。

ホ、【ほ】んに譯の分らぬ廻しものだ。斯んな海の中へ我々を引張り出し、一寸先も見えぬ様な濃霧に包んで置いて、暗がりに鶏の頸を捻ぢる様な卑怯な計略、

其手は喰はぬぞ。

マ、曲津の張本。

ミ、身の程知らずの盲目神。

ム、蜈蚣姫と高姫が。

メ、各自に神力のあらむ限りを發揮して。

モ、耄碌神の其方を脆くも退治して見せよう。

ヤ、八岐大蛇だの、狐だの、狸だのとは何たる暴言ぞ。

イ、意地氣根の悪い。

ユ、油斷のならぬ胡散な癡呆もの。

エ、【え】一邪魔臭い。

ヨ、【よ】くも、【ヨ】タリスクを竝べよつたな、【よ】うも悪魔の變化奴。

ラ、亂臣賊子、サア正體を現はせ、勇氣凜々たる日の出神の生宮、大自在天の

太柱、グツグツ吐すと貴様の素首を引き抜いて【ラ】リルレロとトンボり返しを

打たしてやらうか』

空中くうちゆうより一層いっそう大きな聲こゑで、

「ワ、笑わはせやがるワイ。我身わがみ知らずの馬鹿者ばかもの共、手てのつけ様やうのない困こまつた代物しろだ。

「何程い言うても合點がてんの往ゆかぬ歪いみ根性こんじやうの高姫たかひめ、蜈蚣むかで姫ひめ。

「煩うるさくなつて來きたワイ。良よしの金神國こんじんくにはる治立尊ちだいのみことの御前おんまへに我われは是これより奏上そうじやうせむ。

「襟えりを正ただして謹聽きんちやうして待つて居をらう。やがて御沙汰ごさたが下くだるであらう。

「臆病風おくびやうかせに誘さそはれて【ヲ】ドロドロし乍ながら、まだ。

「我がの強つよい。

「ぎ」りぎりになる迄まで。

「愚圖ぐぐ々々致いたして居をると。

「現界げんかいは愚おろか。

「後生ごしやうの爲ために成ならないぞ。

「態たいさらされて。

「ジ」タバタするよりも。

ズ、圖々しい態度を改め。

ゼ、前非を悔い改心致して。

ゾ、造次にも顛沛にもお詫を致せ。

ダ、騙し歩いた。

チ、自身の罪を。

ツ、津々浦々まで白状致して廻り、玉に對する執着心を只今限り綺麗薩張此海に流して仕舞へ。さうして仕舞へば又神の道に使うてやるまいものでもない。

デ、【デ】ンデン蟲の角突き合ひの様な小さな喧譁を致し。

ド、如何してそんな事で神界の御用が勤まると思ふか。

バ、婆の癖に馬鹿な眞似を致すと終には糞垂れるぞよ。

ビ、貧乏搖ぎもならぬ様になりてから。

ブ、【ブ】ツブツと水の中に屁を放いた様な小言を申しても。

ベ、辨舌を何程巧に致しても。

ボ、木瓜の花だ、誰も相手になる者はないぞよ。

パ、、【パ】チクリと目を白黒致して。

ピ、、【ピ】ンピン跳ねても、キリキリ舞ひを致しても。

プ、、【プ】ンと放いた屁ほどの效力も無いぞよ。

ペ、、【ペ】ンペン跳ねても。

ポ、、【ポ】ンポン言つても、もう日の出神も通用致さぬから覺悟をしたが宜か

らう。汝果たして日の出神ならば、此濃霧を霽らし、天日の光を自ら浴びて船の

方向を定め、アンボイナの聖地に渡れ。其時又結構な教訓を授けてやらう」

高姫、蜈蚣姫は返す言葉も無く、船の中に兩手を合せ、負けぬ氣の鬼に妨げら

れて謝罪り言葉も出さず、俯向いて謝罪と片意地との中間的態度を執つて居た。

何時しか濃霧は霽れた。よくよく見れば船は何時の間にやら南洋一の聖地、龍宮

島と聞えたるアンボイナの港に横着けになり居たりける。

（大正一一・七・二 舊閏五・八 北村隆光録）

第七章 メラの瀧〔七三七〕

瀬戸の海、小豆ヶ島を船出してより、大島、琉球島、臺灣、ヒリツピン群島をいつしか越えて、南洋一の龍宮島と聞えたる、アンボイナ島の一角に高姫の一行は漸く到着したり。

總て此方面には濁水漲り飲料水は唯天水を受けて使用するのみである。然るに此島計りは龍宮島と稱するだけありて、島の到る所に清泉湧き出で、且つ島は二つに分かれ雄島、雌島と稱へられて居る。雌島の方には釣岩の瀧、一名雄瀧、及びメラの瀧、一名雌瀧の二つの龍琴が懸つて居る。さうして雄瀧の方は岩と岩との間より鬮々として流れ落ち、雌瀧の方は大木の根本より湧き出づる稍細き水を、人工をもつて笕を作り瀧として居るのである。此島は世界の所在草木繁茂し、數多の屹然たる岩島の中に樹木蒼然として特に目だつた寶島である。酷熱の夏の日も此瀧の邊に往けば樹葉天を封じ、瀑は涼々として清く落下し、萬斛の涼味を湛へたる實に南洋第一の天國淨土とも稱すべき聖地なりける。

高姫、蜈蚣姫は第一に此島に目をつけ、玉能姫が匿し置いたる三個の寶玉は、
テツキリ此島に納まりあるならむと、既に既に寶玉を手に入れた如く喜び勇み、
先を争うて上陸し、雄瀧の方に向つて歩を進めた。餘りの嬉しさに船を磯端に繋
ぐ事を忘れた。折柄の稍強き風に、船は一瀉千里の勢で沖の彼方に流れ去つて仕
舞つた。されど一行は船の流れたる事を夢にも悟らず、意氣揚々として釣岩の瀧
の麓に進み、汗染んだ着衣を脱ぎ捨て、我一に涼味を味はむと瀧壺に飛び込み、
一生懸命に蘇生した氣持で神言を奏上し始めたり。
三日三夜一同は水垢離をとり元氣も恢復し、四邊の新鮮なる木の實を食ひ勢頓
に加はり、彌全島残らず玉の搜索に係る事となつた。高姫は雌島を、蜈蚣姫は雄
島と部署を定めて、些しにても怪しき石と見れば引き剥り、山の芋を掘るやうに、
【こぐち】から掻き廻し、此島に毛氈の如く敷き詰めたる麗しき青苔を残らず引
繰返したるに、苔の下よりは怪しき形したる蛇、蜈蚣、守宮、蜥蜴の類間斷なく
現はれ來り、高姫其他一同の體を目蒐けて飛びつき喰ひつく嫌らしさ、されど玉
の行方に魂を抜かれた一行は何の頓着もなく「惟神靈幸倍坐世」を口々に唱へな

がら、時間を構はず疲れては休息し、喉が渴けば水を掬ひ、腹が空けば隨所の果物を「むしり」喰ひながら、向上蟲が梅の大木を一葉も残らず食ひ盡すやうな勢で、島山の頂きまで残らず土を引繰返し、苔を剥り搜索し終りたり。其間殆ど三ヶ月を要したりける。

高姫、蜈蚣姫は執念深くも今度は磯邊に下り、大石小石を「こぐち」より一つも残さず引繰り返し調べ見たれど船蟲や蟹計りで、玉らしきものは一つも見當らざりけり。流石の高姫、蜈蚣姫も根氣盡き、又もや雄灌の麓に集まり來り、胴を据ゑて水垢離にかかるとなりぬ。磯邊を各自調べながら玉に心を取られて、乗り來りし船の影だに無き事に氣の付く者は一人もなかりけり。

七日七夜ばかり瀧壺を中心に水垢離を取つて居たスマートボールは、一人海邊に出でよくよく見れば船の姿なきに打ち驚き、島の廻りを何回となく廻つて調べ見たるが、一向見當らず、驚いて瀧壺の前に現れ來り、

高姫様、蜈蚣姫様、大變で御座います
と顔色を變へて云ふ。蜈蚣姫は口を尖らして、

「大變とは何だ工、玉の所在が分つたのか」

「ソナ氣樂な事ですかいな。船が薩張逃げて仕舞ひましたよ」

「何、船が逃げた……なぜ追つかけて引張つて來ぬのだい」

「逃げたか沈みたか、皆目行方が分らないのですもの」

「そりや大變だ、高姫さま、何うしませう」

「さてもさても氣の利かぬ者計りだな。……これ貫州さま、お前は船の責任者だ。一體何うして置いたのだい」

「何うも斯うもありませぬワ。日の出神様が私に憑つて船をかやせと仰有つた。

それ故高姫さまの本守護神の御命令によつて、何處なりと勝手に往けと放り出しました。あの船は龍宮の一つ島に着くのが目的だから、遊ばして置くのも勿體ないと思つて、獨り活動さして置きましたよ。やがて目的を達するでせう」

「お前は何と云ふ馬鹿なのだ、船計り行つた處で、我々の肉體が往かねば何にもならぬぢやないか。船が無ければ、何時迄も此島に蟄居して居らねばならぬぢやないかい」

「それでも貴女は人間の肉の宮は神の容器と仰有つたでせう。日の出神様も、大黒主命も、蜈蚣姫様の本守護神も、今頃はあの船に乗つて、目的地に安着して居るでせう。此島に上つてから百日以上になりますから、何程遠くても最早一つ島に到着し、そろそろ歸つて来る時期ですから、さう【やきもき】云はずに待つて居なさるが宜しからう」
と態と平氣な顔をして見せる。

「何と間の抜けた男だなア。……高姫さま、流石は貴女の御家來ぢや。抜け目のない理屈計りはよく捏ねますね。一體何うして下さる」

「此處は南洋の龍宮島、澆季末法の世の中には諸善龍宮に入り給ふと云ふからは、妾等は善一筋の誠の神だから、この龍宮島を永遠の住家として、天壽を樂しまうぢやありませんか」

「ようも……負惜しみの強い事が云へますぢやい。……三つの寶玉は何うなさる積りだ」

「それは飽迄も探さねばなりません。まア見とりなさい、おつつけ神様が妾等の

神徳しんとくに感じかん、船ふねを持つて迎むかひに來きて下くださるのは鏡かがみにかけかけて見みるやうなものだ。刹せつ

那心なしんを樂たのしむで、取越とりこし苦勞くろうをせせないやうにして下ください。』

何なんだか船ふねが無ないと來きては、何程なにほど結構けつこうな龍宮島りゅうぐうじまでも氣樂きらくに暮くらす氣きにはなれぬぢや

ありませぬか。……ア、俄にはかに綺麗きれいな山やまも嫌いやな色いろになつて來きたワイ。美うつくしい瀧たきの景けし

色きも地獄ぢごくのやうな氣分きぶんがししだした。ア、此この結構けつこうな島しまが船ふねのやうに動うごいて、俺達おれたちを

何處どこかの大陸たいりくへ送おくつては呉くれまいかなア。スマートも心配しんぱいぢやワイ。』

「まあ愚圖ぐづ々々ぐづい云いはずに待まつて居あなさい。海賊船かいぞくせんでも來きたら、それでも占領せんりやうして

乗のつて行ゆけばよいぢやないか。何事なにこともなるやうにしか成ならぬ世よの中なかだ。』

と稍捨鉢ややすてばち氣分きぶんになり、青草あをくさの上うへへ身みを打ぶつ付つけるやうに、不行儀ふぎやうぎに高姫たかひめは寢轉ねころむ

で仕舞しまつた。

「エ、何處迄どこまでも徹底てつていした自我じがの強つよい婆ばアだなア。』

とスマートは小聲ここゑに呶つぶやきながら密林みつりんの中なかに姿すがたを匿かくしたり。蜈蚣むかで姫ひめ其他その一いち同どうは、思おも

ひ思おもひにこの島山しまやまを捨鉢すてばち氣分きぶんになつて驅廻かけまはり、適當てきたうな場所ばしよに身みを横よこたへて、因果腰いんぐわこし

を定きめる事こととなりぬ。雄瀧をだきの麓ふもとに高姫たかひめは唯獨ただひとり横よこたはつた儘まま遂ついに夢路ゆめぢに入りけり。

高姫は漸く目を醒し四邊を見れば、一人の人影も無きに驚き、

「サア大變、誰も彼も腹を合せ此高姫を置去にして、流れて來た船にでも乗つて逃げたに相違あるまい。ア、頼み難きは人心。……貫州の奴、此高姫に一言も答

へず、逃げ歸るとは不親切極まる。併し乍ら餘り口汚く叱りつけたものだから、根に持つて復讐をしようとしたのだらう。エ、仕方がない」

と四邊を見廻せば、蓑笠などが其處に残つて居る。

「ハア、矢張何處かへ行つたのだな。何處へ匿れても此島中には居るだらう。ま

アまア皆の者共が早く此處へ歸つて來るやう御祈念でも致しませう」

と獨言ちつつ雌瀧の傍に進み寄る。折柄の濃霧に包まれて、一尺の先も見えないやうになり來たりぬ。高姫は雌瀧の傍に蹲踞みながら、兩手を合せ祈願を始めた

り。

「第一番に力と頼む貫州の行方が分りますやう。蜈蚣姫其他の連中は神界の御都合に依つてお匿し遊ばすなら、たつてとは申しませぬ。兔も角も必要なは貫州一

人、何卒彼だけなりと私の傍に引き寄せて下さいませ。何分小さい島と申しても、十里も周つた此浮島、容易に探し當てる事は出来ずまい。何卒御神力をもつて、一時も早くお引き寄せを願ひ奉ります」

メラの瀧の上にチヨコナンとして、瀧水を弄つて居つた貫州は、高姫の此祈り聲を聞いて造り聲をしながら、

「此方は、誠の生粹の日本魂の日の出神であるぞよ。其方は日の出神と申せども、實は三千年の劫を経たる古狸の靈が宿つて居るのであるぞよ。よく胸に手を置いて思案を致せよ。汝の改心が出来たなら、いつ何時なりとも、其方の前に貫州一人現はして見せうぞ。何うぢや、もう今後は日の出神様呼ばはりは致さぬか」

「貴女は日の出神様と今仰有つたが、そりや違ひませう。眞の日の出神は此高姫の肉體にお憑り遊ばし、大黒主命と半分同志の靈魂が一つになつて高姫と現はれ、世界中の事を調べぬいて、神政成就の土臺となる結構な身魂でありますぞ。いづれの神が知らねど、よく審神をして下さい。眞の事を知つた神は、世界に一神よりの神か無いとお筆に出て居ますぞ。枝の神の分際として何が分つて堪らうぞい。改

心なされ足許から鳥が立ちますぞえ」

貫州は餘りの強情に愛想を盡かし、且つ可笑しさに吹き出さうとしたが、齒を喰ひしばり氣張り居る。齒は「キーキー」、喉許で笑ふ聲「キウキウ」と體中に波を打たせ蹲踞んで氣張り居る。高姫は瀧の下より、

「エ、油斷のならぬ。何程諸善神の集まる龍宮島でも、寸善尺魔とか云ふ惡神が高姫の氣を引きに來よつたな。併し乍ら高姫の辨舌、否言靈に、仕方なく四足の性來を現はし、……キーキー、キウキウ……と啼いてゐやがる。野良鼠か、栗鼠か、鼬か貂か、又も違つたら豆狸か、一時も早く此場を立ち去れ。日の出神の生宮の前も憚らず、四足の分際として高い所に上ると云ふ事は、天地顛倒も甚だしい。シイシイ」

と頻りに齒の脱けた口から唾を飛ばしながら叱つて居る。貫州は益々可笑しさに耐へ兼ね、脇の邊りで「キウキウ」と笑ひ出したり。此處へ濃霧の中を兩手を前に突き出し、盲が杖無くして歩くやうに、探り足にやつて來たのは蜈蚣姫なりき。貫州は皺噎れ聲を出し、

如何に高姫、汝の願ひ叶へてやらう。其方は蜈蚣姫を此島に一人残し置き、貫州を連れて逃げだした方が都合がよいとの意志を表示したであらう。表面は蜈蚣姫とバツを合せて居るが、其方の心の中は決してバラモン教では無い事はよく分つて居る。唯三個の玉さへ手に入れば、蜈蚣姫は何うでもよいのだ。何うだ、神の申す事に間違ひあるまい」

高姫は聊か迷惑顔しながら、

「モシモシ蜈蚣姫様、何處に居られましたの。私はどれだけ心配したか分りませぬワ。ようマア無事でゐて下さいました。此通り濃霧に包まれて一尺先は分らぬやうな事で御座いますから、種々の枉津が現はれて、今お聞きの通り貴女と私の仲を悪くし内輪喧嘩をさせ、内部から結束を破らせようとするのだから、用心なさいませや」

瀧の上から貫州は、

「蜈蚣姫とやら、高姫の口車に乗るなよ。眞の日の出神此處にあり」

「ハイ、有難う御座います。貴神のお言葉は寸分間違ひはありませんまい。私はこ

れから氣をつけます。……モシモシ高姫さま、神様は正直ですな。國城山の岩窟で貴女が俄に豹變的態度を取った時から、一癖ありと始終行動を監視して居りました。私に違はず、今眞の日の出神様が證明して下さいました。サア如何です。これ高姫さま、返答がありますか」

貫州は霧の中より、

「蜈蚣姫も蜈蚣姫だ。高姫を巧く利用して玉を探させ、其上にて巧くボツタクリ、高姫に蛸の揚げ壺を喰はす所存であらうがな。神は汝の申す如く正直一方、嘘は

チツトも申さぬぞよ」

高姫は「したり」顔、

「蜈蚣姫さま、それ御覽、貴方こそ腹が悪いぢやありませんか」

「悪と悪との寄り合ひだもの、云ふだけ野暮ですよ。オホ、、、」

と笑ひに紛らす。

此時この島の特産物たる五寸許りの熊蜂が、「ブーン」と「うなり」をたてて高姫の頭に礫の如く衝突し、勢あまつて蜈蚣姫の鼻柱に撥ね返され、蜂は一生懸

命に鼻にしがみつ鼻の孔を鋭利なる劍にてグサリと突き立てた。蜈蚣姫は「ア
イタ、と云つたきり、両手に鼻を抑へて其場に倒れた。蜈蚣姫は高姫が鐵拳
で鼻柱を目蒐けて喰はした事と思ひつめ、

「悪逆無道の高姫、不意打を喰はすとは卑怯千萬。やア、スマートボール其他の
者共、早く來つて高姫を縛り付けよ」

と唸鳴りある。見る見る顔は脹れ上り、鼻も目も口も腫れ塞がりけり。高姫は
驚いて、

「モシモシ蜈蚣姫さま、妾ぢやありません。熊蜂が噛むだのです。何卒悪く取つ
て下さいますな」

瀧の上の霧の中より、

「蜈蚣が蜂に刺されたぞよ。是を見て高姫改心を致されよ。雀ヶ原に鷹が降りた
やうな横柄振を今迄發揮して居たが、高姫の目を又熊蜂に刺さしてやらうか。此
方は熊蜂の精靈であるぞよ。其方は餘り慢心が強い故に、兩人互に他人の頭の上
に上らうと致して居るから、こんな戒めに遇うたのぢや。それ程偉い者になつて

人の頭に上りたくば、天井裏の鼠になつと成つたがよからう。人が除けて通るやうな御神徳が欲しいと申して、南洋三界まで玉を探しに参り、それ程偉くなり度くば肥擔ぎになれ。誰も彼も皆除けて通るぞよ。も一つよい事を教へてやらう。泥棒になれば人が恐れるぞよ。神徳を得て人を恐がらし度くば何の手閒暇は入らぬ。鐵道を嚙り砂利を喰ひ、鋼鐵艦を呑むやうな達者な齒になれ。さうすれば世界の奴は其方に對して齒節は立たぬぞよ。またも間違つたら癩病患者、疥癬患者になれ」

と「キウ キウ」と喉の中で笑うて居る。突然涼風吹き起り、四邊を籠めた濃霧は俄に晴れて遠望千里の光景となつて來た。貫州は驚いて高姫に顔を見られじと袖に面部を被ひ乍ら走り行く途端に踏み外し、高姫の足許にドスンと落ちて來た。高姫は「キヤツ」と云うて二歩三步後へ飛び退き、よくよく見れば貫州なりける。「ヤア、お前は貫州かイナア。何だか合點がゆかめと思つてゐたら何と云ふ惡戯をするのだイ。罰は靦面、これこの通り逆「とんぼり」を打つて苦しまねばならうまいがなア」

「ヤアもう誠に不都合千萬で御座いました。何分守護神が現はれたものですから」
「馬鹿を云ひなさるな。二つ目には守護神々々と口癖のやうに……其手は喰ひませぬぞ工。それよりも今の中に船に乗つてサアサア玉探しにゆきませう」
「蜈蚣様が蜂に刺されて此通り苦しみて御座るのに、何うするつもりですか。神様の道は敵でも助けるのが法ぢやありませんか。さうして船に乗らうと云つた處で船が無いぢやありませんか」

「ア、さうだつたなア。ほんとにほんとにお氣の毒な事になつたものだ。蜈蚣姫さま、何卒早く全快して下さい」

と蜈蚣姫の背中を撫で、次に胸を撫でて慰めてやらうとする。目も鼻も口も腫れて化物のやうになつた蜈蚣姫は、鷲のやうになつた爪を立てて、高姫の手が體に觸つたのを目當に力限り掻き「むしる」。高姫は顔を顰めながら血潮の滴る手を押へ、草をもつて血止めの用意とくるくる捲きつけゐる。

スマートボール、久助、お民其他の従者共は、濃霧の晴れたのを幸ひ此場に駆け來り、二人の態を見て驚き、口をポカンと開けた儘言をも云はず立ち居る。こ

の時磯端ときいそばたに當つてあた、涼しきすず三五教あななひけうの宣傳歌せんでんかが聞え來たりぬきこ。果して何人はたの聲こゑならむか。

(大正一一・七・二 舊閏五・八 加藤明子録)

第八章 島しまに訣別けつべつ〔七三八〕

神かみの經綸しぐみも白浪しらなみの 三みつの御玉みたまを探らむと
執着しふちやくしん心の何處どこまでも 深ふかき海原うなばらに浮うかびつつ
此世このよの瀬戸せとの海越うみこえて 家島えしま高島たかしま小戸島せうどしま
國城山くにしろやまの岩窟がんくつに 砦とりでを構かまへて瑞寶ずゐほうの
所在ありかを探さがす蜈蚣むかで姫ひめ 心こころも同おなじ高たか姫ひめが
やうやう妥協だけふを整ととのへて 再ふたび船ふねに棹さをさし

梅島竹島櫻島

馬關の海峽乗越えつ

神の恵も大島や

栗島岩島竹野島

尚も進んで琵琶の島

南洋一の靈場と

噂に高き龍宮島

玉の所在を探るべく

尋ね来るぞ果敢なけれ

吾は聖地に現れませる

言依別の神司

稜威の御言をかかぶりて

再度山の山麓に

尋ねて来る折柄に

玉能の姫の物語

三五教の高姫は

玉に心を奪はれて

荒き海路を渡りつつ

南洋さして出で行きし

話を聞くより矢も楯も

耐り兼ねたる玉治別の

天地に通ずる眞心は

玉能の姫を動かせて

新に堅き船造り

御後を慕ひ來りけり

馬關の瀬戸を過ぐるとき

波に漂ひ船を破り

岩に喰ひつき泣き叫ぶ

二三の人の影を見て
船を近寄せ眺むれば

バラモン教の宣傳使
友彦初め三五の

神の教の信徒と
仕へ奉りし鶴さまや

清さま武さま四人連
九死一生の有様を

救うて漸く此島に
來りて見れば海端に

落ちたる笠は高姫の
此處に居ませる印ぞと

心も勇み身も勇み
青葉茂れる木の間をば

潜りて此處に來て見れば
雄瀧雌瀧と相並び

天下に無比の絶景と
憧憬れ居たる折もあれ

忽ち包む深霧に
咫尺を辨ぜず一行は

雄瀧の前に佇みて
様子窺ひ居たりしが

雌瀧の方より聞え來る
怪しき女の叫び聲

何事ならむと氣を苛ち
助けむものと思へども

咫尺辨ぜぬ霧の中
手を下すべき由もなく

心をいらつ一刹那 忽ち吹き来る科戸邊の

神の伊吹に拂はれて 一望千里の晴れの空

小路を傳ひ来て見れば 高姫さまの一行が

愈此處に立籠り 袂の修業の最中と

覺りし時の嬉しさよ あゝ惟神々々

御靈幸ひましまして 高姫さまの胸の中

一日も早く晴らせかし 吾は玉治別の司

玉能の姫や初稚姫の 誠の御言に従ひて

汝が命を救はむと やうやう此處に來りたり

嗚呼高姫よ其外の 神の大道を歩む人

心平に安らかに 吾一行の眞心を

【うまら】に詳細に聞召せ

と歌ひつつ男女七人、高姫の前に立ち現はれ、歌に装ひて來意を述べ立てたり。

高姫は一行の姿を眺め、

「ヤアお前は玉能姫と初稚姫さま、それに玉治別の田吾作どの、何用あつて執念深く高姫の後を付け狙うてお出でたのだ。矢つ張り玉の所在を探されてはならな
いと思つて、夜も碌々寝られず、こんな所迄調べに來たのだらう。遙々と御遠方の處御苦勞様。よもや高姫が此島に居るとは思はなんだでせう。サアかうなる以上は玉を隠したのは、此龍宮島に間違ひない。百日餘りも探して見たが、何分大きな島だから充分に調べる譯にも行かず、サアよい處へ來た。今度は玉の所在を明瞭言ひなされ」

玉能姫は靜かに、

「高姫さま、何程お探し遊ばしても、三十萬年の未來でなければ、三つの神寶は現はれませぬ。妾は決して貴女方の玉探しを、氣に懸けて參つたものではありません。初稚姫様が教主言依別命様の命を奉じ、高姫さまは玉に心を奪はれ、いらぬ苦勞をなさるのが氣の毒だから、お迎ひ申して來いと御命令、船は流され嘸お困りだといふ事を、神様が先にお分りだから、二つの船を持つてお迎ひに來たの

です。どうぞ吾々の此處へ來た事を善意に解して下さい』

「これはこれは何から何まで抜け目のない言依別命。……初稚姫、玉能姫さま、

船を二艘も持つてようマア來られました。誠に御親切有難いと申したいが、さう

安々とお禮を申されぬ理由が……ヘン御座いますワイ。あれだけ此高姫に揚壺を

喰はし、喜んで居る言依別命に海洋萬里の此島迄私を助けに來る親切があれば、

玉隠しをしたりして我々を苦しめる道理がない。元をただせば此高姫がコンナ處

まで來て、あらゆる艱難苦勞するものも、みな言依別命、初稚姫、空助、玉能姫様

のお賢い悪智慧のお蔭ですワイ。ようマアこれ丈人に心配をかけて下さつた。何

程高姫の機嫌をとらうと思つても其手には乗りませぬぞえ』

玉治別は口を尖らせ、

「何とマア執念深き譯の分らぬ高姫だなア、命からがら小舟に乗つて、萬里の波

濤を渡り助けに來ながら、こんな小言を聞かうとは思はなかつた。……高姫さま、

お前さま、本當に没分曉漢だなア』

「コレ田吾作どの、何をツベコベと横槍を入れるのだイ。お前は宇都山村で、芋

の赤子さへ大切に育てて居れば性に合ふのだ。言依別の珍らしもの喰ひに拔擢されて宣傳使になり、玉治別の名を戴いたと思うて、變性男子の系統の生宮に、何をツベコベほざくのだ、スツコンで居なさい。あまり偉相に云ふと此島の熊蜂が遣つて来て……それ其處に居る蜈蚣姫の様な目に遭はされますよ」
と言葉尻をピンとはねて體を揺り、蜂を拂ふ様な態度にてパタパタと羽ばたきして見せる。玉治別は初めて其處に蜈蚣姫の倒れて居るに氣付き、一生懸命に神言を奏上し、言靈を唱へ鎮魂を施した。不思議や蜈蚣姫の腫は刻々に「ひすば」り、忽ち元の姿に復り、玉治別に向ひ兩手を合せ、涙を瀧の如く流し感謝の意を表して居る。

「コレハコレハ蜈蚣姫さま、お仕合せな事、妾が今救けて上げようと思つて、色々神様に願つて居つた所、半時ばかりの間に全快させてやらうと、日の出神が仰有つて恰度今半時許り経つた所だ。其處へ玉治別がやつて来て鳥の「おどし」の様な恰好して鎮魂をしてそれで癒つたと思ふと大きな間違ひ、恰度好い時刻に來よつて自分が癒した様に思つて、お前さまの感謝の言葉を手柄顔に偉相に、……蚯

蚓切りの蛙飛ばしの癖に、鎮魂に、神力があつてたまりますか。コンナ男に病氣が癒せる位なら、妾は既に神様の宣傳使はやめて居りますよ」

「ドチラのお蔭だか知りませぬが、有難う御座います。然し高姫さま、貴女の最前濃霧に包まれた時、……貫州だけ助けて下され、蜈蚣姫は御都合でドウなとして下さい……と祈つて居ましたねエ。随分水臭いお方ですワ」

高姫は無言。

「貴女が噂に聞きました蜈蚣姫様で御座いますか。これは珍らしい所でお目にかかりました。妾は生田森の玉能姫で御座います。此小さい女の方は聖地に於て有名な初稚姫様で御座います」

「さうかいナア。……お前がアノ梃でも棒でも動かぬ玉能姫だな。さうして頑固者の空助の娘と云ふのは此奴かいなア。ホン二一寸小賢しい悪氣の有りさうな、無ささうな顔をして居るワイ、オホ、。……ヤアお前は糞まぶれになつて逃げて来た友彦ぢやないか。大方妾の後を追ひ、娘に逢はうと思つて来たのだらう。エ、穢らはしい。友彦の糞彦、サア、トツトと歸らつしやれ」

「私は決して小糸姫に未練があつて參つたのではありません。淡路島の酋長東助様が、私の大罪を赦して下さいまして、其代り御一同をお助けする爲めに船を持つて行けと命ぜられ、清さま、武さま、鶴さまと一緒に後を追つて參つたのです。東助様に神様がお告げ遊ばしたには、お前さまは南洋のアンボイナ島で船をとられるに違ひないから、船を持つて迎ひに行つて来いと仰有られて、情深い東助様が、お前を助ける様私をお遣はしになつたのだ。東助さまにお禮を申さねばなりません。高姫さま、蜈蚣姫さま、どうです。これでも不足を云ふ處がありますまい。」

「友さま、イランお世話だ。誰が助けて呉れと頼みました。自分が勝手に口實を設けて、玉の所在を探さうと思ひよつて来たのだらう。ヘン阿呆らしい。誰がお禮を云ふ馬鹿があるものかい。いい加減に人を馬鹿にして置きなさい。餘人はイザ知らず、此高姫に限つて、ソナナ巧妙な嘘を喰ひませぬわいなア。オホ、ハ、ハ」と一言々々肩から胴體を揺つて嘲弄する。友彦は疝筋を立て、

「私は何程嘲笑されても不足を云はれてもかまはぬが、さういふ挨拶をされて東

助様に對して、ドウいふ返事をしてよいか分りませぬ。何とか其處は人情を辨へての御挨拶が有りさうなものですなア」

「ヘン、巧い事を仰有いますワイ。人を家島に放つたらかして、東助の野郎、清、武、鶴の三人を引捉へ、氣樂さうに追分を歌つて歸んだぢやないか。それ丈け親切があるなら、ナゼ私を家島へ放つて歸んで仕舞つた。ナント巧い事を云うても、事實が事實だから仕方がありますまい。オー恐や恐や、蟲も殺さぬ様な面をして居るチツペの初稚姫や玉能姫が、此年寄に素破拔きを喰はして、玉隠しをやると云ふ世の中だから、油斷も隙もあつたものぢやないワイなア。何程親切に見せて下さつても、心から親切でない以上は、有難いともナントモ思ひませぬ。却て其仕打が憎らしい。イヒ、、、」

と上下の齒を「けたり」と合はせ唇を四角にして、前に突出して見せる。

「高姫さま、あまりぢやありませんか。東助さまはア、見えても、親切な方ですよ」

「親切ぢやと云つて船頭位をして居る奴が何になるか。日の出神の天眼通でチヤ

ンと調べてある。船頭社會の「ヤンチャ」で家も何も無い奴だらう。偉さうに國城山に清、鶴、武を來させよつて、一廉酋長だとか金持だとか吐しよつて、態とに八百長で友彦を引縛つて歸り、其後を追かけて來たのだらう。船頭が賃錢なしに誰がお前達をよこすものか。又お前達も日頃の泥棒根性を發揮して、高姫が玉を發見したら、フンだくつて歸らうと思つて來たのに違ひない。三百兩フンだくつたり、人の女房を狙ひそこねて、雪隠を潜つて逃げ出したりする様な男が、何んな巧い言を云うても駄目だ。モット人格のある男が云ふのなら、一つや半分は承知をせまいものでもないが、お前の様な泥棒根性の男や、清、鶴、武の様な裏返り者の云ふ事が、ドウして、……ヘン信じられますか。初稚姫、玉能姫、田吾作だとして其通りだ。七人が腹を合せ、高姫や蜈蚣姫の手柄を横取りしようと思つてやつて來た其計略、假令千萬言を盡し辨解しても……ヘン、だアめですよ』

と兩手を前の方にニユウと突き出し、腰を曲め、尻を縦に振つて、蛙の如く二三間前にピヨンピヨン飛んでキヨクツて見せる。

蜈蚣姫は氣の毒がり、

高姫様が何と仰有ろうとも、どうぞお氣に障へて下さいませ。あの方は一寸變つて居ますから、妾は船を持つて来て下さったのが何より有難い。玉能姫様、初稚姫様有難う。此通りお禮を申します。と涙を流しながら両手を合して心の底より感謝する。

何これしきの事に、お禮を仰有つて下さつては、玉能姫一行、却て恥かしい様な氣が致します。世の中は相身互ひで御座います。天が下に他人だの敵だのと云ふ者が有らう道理が御座いませぬ。サア何時迄も斯様な所に居られなくても、玉は決して出ては参りませぬ。早く歸りませう。

ハイ有難う。ソナナラ船を持つて来て下さったのを幸ひ、妾は娘の小糸姫に逢ひたくてなりませぬから、龍宮の一つ島に渡りますから、どうぞ一艘の船をお貸し下さいませ。

二艘持つて参りましたから、一艘丈はどうぞ、御自由にお使ひ下さい。……サア高姫様、妾と一緒に聖地に歸りませう。お供致しますから。

ナント云つても此處は一寸も動きませぬぞへ、高姫は

たまはるわけ
玉治別は、

「ソナナラお前さまの御勝手になさいませ。……サア皆さま、歸りたい方は船に乗つて歸りませぬか。居りたい方は手を上げて下さい。一、二、三……ヤア何方も歸りたいと見えます。一人も居りたい人はないと見えます。一寸も動かないと仰有つた高姫さまでさへも手を上げなさらぬワイ」
「誰が田吾作の命令に服従して、この尊い手を安々と上げたり下げたりしますかいナア。ササ早う往つて丈夫な船に乗りませうかい」
とムクムクと起上り、濱邊を指して一目散に走つて行く。一同は高姫のあとに付き添ひ濱邊に向ふ。高姫は早くも一艘の船に飛び乗り大勢を残し、只一人海の中に遠く漕いで走り行く。

たまはるわけ
玉治別は舌をまきながら、

「ヤア高姫の奴、怪しからぬ事をしよる。大きい好い船に只一人乗りよつて此小船に是丈けの者が乗るのは大變に險難だ。波の静かな時は好いが、チツトでも波が立つたら遣り切れない。困つた事になつたものだ」

と磯端に地團駄踏んで口惜しがつて居る。一方高姫はメラの瀧の麓に肝腎要の印籠を忘れた事を思ひ出し、イヤイヤ乍ら再び船を漕いで此方へ歸り來る。

玉治別は手を拍つて、

「ヤア、さすがの高姫も沖まで出て恐くなつたと見え、後戻りして來をる。偉さうに云つても流石は女だ。これでは日の出神の生宮も好い加減なものだなア。アハ、ハ、ハ、ハ、」

「オホ、ハ、ハ、ハ、」

大勢一度にドツト笑ふ。此時長途の航海に馴れた手で、艫を操り矢を射る如く戻つて來た高姫は、

「皆さま、一寸漕いで見たが随分面白いものだ。是なら假令百里千里漕いだところで大丈夫だよ。妾はメラの瀧に落し物をしたから、五六丁の所だから往つて來るよつて待つて居て下さいよ。……コレコレ貫州、玉治別さま、妾に付いてお出で、若し船を出されちや大變だから……」

貫州、玉治別は口を揃へて、

滅相な、吾々兩人は揃ひも揃うて足の裏を竹の切り株に突き、一歩も歩けないのだよ。吾々一同は此海の景色を眺めて待つて居るから、貴女一人行つて来て下さい、決してお前さまのやうに意地の悪い事はせぬからなア

高姫は慌しくメラの瀧の方に向つて、青葉を縫うて姿を隠したり。其間に玉能姫、初稚姫、玉治別、清、鶴、武の六人は新しき船に乗り込みぬ。蜈蚣姫、友彦、久助、スマートボール、お民其他二人は、稍古き小船に身を寄せたり。さうして手早く纜を解き、十間ばかり陸をはなれて面白可笑しさに笑ひさざめき居る。そこに高姫は印籠を引掴み、スタスタと走り來り、

妾に應答もなしに………何故船を出したのだい。サア、早く船を漕いでこちらへ寄せなされよ

玉治別は新船を、友彦は古船を一生懸命に漕ぎ出す。一刻々々陸地を遠ざかる。高姫は聲を限りに、

オーイその船、此方へ寄せるのだ

ナンドか知らぬが、友彦が漕げば漕ぐほど船が先へ行くのだよ

と歌を謡ひながら、意地悪く沖に向つて漕ぎ始めける。高姫は赤裸になり、印籠を口に銜へ、着物を頭にくくりつけ、抜手を切つて蜈蚣姫の乗つた古船に向つて泳ぎ行く。友彦は相變らず急いで艀を漕ぐ。蜈蚣姫は、

「コレコレ友彦、ソナ意地の悪い事をするものでない。高姫さまの心にもなつて見たがよからう」

「餘り口が好いから改心の爲めに、友彦が一寸【いちや】つかしてやつたのです。ソナナラ待ちませうか」

と艀の手を休める。高姫は命カラガラ漸くにして船に喰ひつきぬ。スマートボール、貫州は高姫の兩手を持つて、やつとの事で船の中に引上げた。

玉治別は艀を操つりながら此場を見捨てて何處ともなく歸り行く。……高姫、蜈蚣姫一行を乗せた船は友彦に操られ、西南の縹渺たる大海原を指して進み行く。

(大正一一・七・二 舊閏五・八 谷村眞友録)

第三篇 危機一髪

第九章 神助の船〔七三九〕

神が表に現れて 善と悪とを立別ける

朝日は照るとも曇るとも 月は盈つとも虧くるとも

假令大地は沈むとも 高姫生命を棄つるとも

島の八十島八十の國 山の尾の上や川の末

海の底まで村肝の 心到らぬ隈もなく

探さにや措かぬと雄猛びし 矢竹心の矢も楯も

堪りかねたる玉詮議 左右の目玉を白黒と

忙しさうに轉廻し 善と悪との瀬戸の海

牛うしに曳ひかれて馬うまの關せき 狹せまき喉のど首くび乘のりり越こえて

數あまた多たの島しま々ま右みぎ左ひだり 眺ながめて越こゆる太たい平へいの

波なみをすべにつつて安あんボイナ 南なん洋やう諸しよ島たうの其その中なかで

珍うづの龍りう宮ぐうと聞きえたる 芽め出で度たき島しまに漕こぎつけて

玉たまの所あり在かを探さがす内うち 綾あやの天たかの聖せい地ちより

玉たま照てる彦ひこの神み言こともて 初はつ稚わか姫ひめや玉たま能の姫ひめ

玉たま治はる別わけの三さん人にんは 再ふた度たび山やまの山さん麓ろくに

生いく田たの森もりにて足あし揃ぞろひ 船ふねを準しつ備らへ高たか姫ひめが

危き難なんを救すくひ助たすけむと 潮しほの八や百ほ路ぢを打うち渡わたり

漕こぎ來くる折をりしも霧きりの中なか 灰ほかに聞きゆる叫さけび聲こゑ

唯ただ事ことならじと船ふねを寄よせ 友とも彦ひこ初はじめ清きよ鶴つるや

巴たけラモよン教けうの宣せん傳でん使し 生いの命ちの綱つなと岩がん壁べきに

武たけの四よ人にんが船ふねを破わり 救たすけを叫さけぶ聲こゑなりし

力ちから限かりにかぢりつき

玉治別は快く
四人の男を救ひ上げ

率み來りし伴舟に
友彦其他を救ひつつ

男波女波を打渡り
雄瀧雌瀧の懸りたる

雄島雌島の合せ島
アンボイナ島の龍宮へ

船を漕ぎつけをちこちと
青葉茂れる山路を

濃霧に包まれ千丈の
瀑布の音を知るべとし

近より見れば瀧津瀨の
漲り落つる音ばかり

一行七人瀧の前に
佇み此れの絶景を

驚異の眼をみはりつつ
其壯烈を歎賞し

涼味に浴する折柄に
濃霧を透して婆の聲

常事ならじと近寄りて
窺ひ見れば高姫の

腕は血潮に染りつつ
團栗眼を怒らして

面をふくらせ何事か
囁く側に蜈蚣姫

妖怪變化に擬ふなる
化物面を曝しつつ

瀧たきの麓ふもとに倒たふれ居ゐる

玉治別たまはるわけは驚おどろいて

手負ておひに向むかつて鎮魂ちんこんの

神法しんぱふしふ修しし一二三四

五六七八九十

百千萬ももちよろづと言靈ことたまの

靈歌れいくわを頭上づじやうに放射ほうしゃせば

幾許いくばくならず蜈蚣むかでひめ姫

元の姿もとすがたに全快ぜんくわいし

地獄ぢごくで佛ほとけに遭あひし如ごと

心の底こころそこより感謝かんしゃしつ

嬉うれし涙なみだに暮くれにけり

玉治別たまはるわけの一行いっかうは

探たづね來きたりし高姫たかひめの

所在ありかを知しつた嬉うれしさに眞心まごころこめていろいと

言依別ことよりわけの命令めいれいを完全うまらに委曲つばらに宣のりつれど

心こころねぢけし高姫たかひめは情なさけを仇あだに宣のり直なほし

相あいも變かはらず減へらず口ぐち叩たたいてそこらに八當やつあたり

憎々にくにくしげに罵ののれば流石さすが無邪氣むじやきの一行いっかうも

呆あきれて言葉ことばなかりけりヤツサモツサの押問答おしもんたふ

やうやう治をさまり一同いちどうは二隻にせきの船ふねに分乘ぶんじやうし

玉治別の操れる

船には初稚玉能姫

鶴武清の六人連

波を乗り切り龍宮を

後に眺めて離れ行く

残りの船は友彦が

艚を操りつ蜈蚣姫

高姫貫州久助や

スマートボールやお民等の一行を乗せてやうやうと

波の「のた」打つ和田の原 西南指して進み行く

前後左右に駆けまはる 海蛇の姿眺めつつ

轟く胸を押隠し 心にも無き空元氣

船歌うたひ友彦が 力限りに炎天の

大海原に搾る汗 ニュージランドの手前まで

進む折しも暴風に 吹きまくられて浪高く

危険刻々迫り来る 左手に立てる岩山の

影を目標に漕ぎ寄せて 難を避けむと進み寄る

鬼か獣か魔か人か 得體の知れぬ影二つ

猿ましろの如ごとく岩山いはやまを 驅かけめぐり居ゐる訝いぶかしさ

此世このよを造つくりし神直日かむなほひ 心こころも廣ひろき大直日おほなほひ

唯何事ただなにごとも人ひとの世よは 直日なほひに見直みなほし聞直ききなほし

身みの過あやまちは宣のり直なほす 神かみの救すくひの船ふねに乘のり

大海原おほうなばらに漂ただよへる 此岩島このいはしまを一同いちどうが

生命いのちの親おやと伏拜ふしをがみ ここに小船こふねを止とどめつつ

ア、惟かむながらかむながら神々々みたまさち 御靈幸みたまさちはひましませと

祈いのる言靈勇ことたまいさましく 雷らいの如ごとくに鳴なり渡わたる

此神言このかみごとを聞ききしより 二ふたつの影かげは嬉うれしげに

此方こなたに向むかつて下くだり來くる 神かみの仕組しくみぞ不ふ思議しぎなる。

友彦ともひこは怪あやしき二ふたつの影かげを見て、

「ヤア高姫たかひめさま、蜈蚣むかでひめ姫ひめさま、愈いよいよ願望ねんぼう成就じゆうじゆの時節じせつ到來たうらい、お喜よろこびなさいませ。貴女あなたのお探たづねになる代物しろものは漸やうやく此島このしまに在あると云いふ事ことが、的てきかく確かくに分わかつて來きましたよ。」

高姫吃驚した様な聲で、

「エ、何と仰有る。あの玉が此島に隠してあると云ふのかい」

「御覽の通り、眞黒黒助の、ア：「タマ」が二つ、如意寶珠の様にキラキラした

目の「タマ」が四つ、貴女方を歓迎し、上下左右に駆けめぐつて居るぢやありませんか。

せぬか。ありや屹度玉の妄念ですよ。黄金の隠してある所には何時も化物が出る

と云ふ事だ。彼奴はキット如意寶珠の精が現はれ、人に盗まれない様に保護をし

て居た所、焦れ焦れた……言はば……玉の親のお前さまがやつて来たものだから、

再び腹の中へ呑み込んで歸つて貰はうと思ひ、妄念が現はれて玉の所在を知らし

て居るのに違ひない。コンナ所に……さうでなければ黒ン坊が住居して居る筈は

ない。キットさうですよ。女の一心岩でも突き貫くとやら、あの通り岩を突き貫

いて玉の精が現はれたのでせうよ」

高姫は目をクルクルさせ乍ら、二つの影を凝視め、

「如何にも不思議な影だ。どう考へてもコンナ離れ島に船も無し、人の寄りつく

道理がない……サア蜈蚣姫さま、あなたはモウ玉に執着心は無いと仰有つたのだ

から、微塵も未練はありますまいな」

「妾はアンナ黒ン坊にチツトも執着心は有りませぬ」

「さうでせう。それ聞いたら大丈夫、サア是れから貫州と二人此岩山を駆け登り、玉の所在を探して来う……イヤヤ待て待て、腹の悪い連中、岩山の上へあがつて居る後の間に、蜈蚣姫さまに船でも盗られたら、それこそ大變だ。……サア貫州、お前は此船の纜をキユツと握つて放す事はならぬぞえ。……モシ蜈蚣姫さま、お付合に従いて来て下さいな」

「オホ、さう御心配なさいでも、滅多に船を持つて逃げる様な事はしませぬ……とは請合はれませぬワイ」

「サアそれだから險難だと云ふのだ。わしの天眼通は、お前さまの腹のドン底までチャーンと見抜いてある。それが分らぬ様な事で、どうして日の出神の生宮が勤まるものか……ア、仕方がない。貫州、お前御苦勞だが、玉の所在を、あの黒ン坊に従いて探して来て呉れ。わしは蜈蚣姫さまの監督をして居るから……アア油断も隙も有つたものぢやないワイ」

「オツホ、、、よう悪氣の廻るお方ですな。お前さまは寶を見ると直にそれだから面白い。恰度、犬コロが三つ四つ一所に集まり、顔を舐めたり、尾を嘗めたりして互に睦まじう平和に遊んで居る、其處へ腐つた肉の一片を投げて與ると、忽ち争鬪を始め、親の讎敵に出會うた様に喧嘩をするのと同じ事、お前さまは寶が……まだ本當に有るか無いか知れもせぬ前から、目の色まで變へて騒ぐのだから、本當に見上げた御精神だ。いつかな悪黨な蜈蚣姫も腹の底から感服致しました。……スマートボール、お前は貫州さまと一緒に黒ン坊の側へ行つて、萬々一玉が有ると云ふ事が分つたら、外の二つの玉は如何でも良いから、金剛不壞の如意寶珠を、邪が非でもひつたくつて來るのだよ。此蜈蚣姫ぢやとて、性來から善人でもないのだから寶の山へ入り乍ら手振りで歸る様な馬鹿ぢやない。今迄の苦勞を水の泡にはしともないから、わしも犬コロになつて、力一杯争うて見ませうかい。オツホ、、、」

「一旦お前さまは小絲姫にさへ會へばよい、玉なぞに執着心は無いと、立派に仰有つたぢやないか。それに何ぞや、今となつて子と玉の變換をなさるのかイ」

「變説改論の持離される世の中だから當然さ。……コレ、スマートボール、高姫さまが何程鯨になつても、味方と云へば貫州さま唯一人、あとは残らず蜈蚣姫の幕下計りだ。寡を以て衆に敵する事は到底不可能だ。何程多數黨が横暴だと國民が叫んでも、何程少數黨が正義だと云つても、矢張多數黨が勝利を得る世の中だもの、泰然自若、チツトも騒ぐに及びませぬ。他人の苦勞で徳とると云ふ事は恰度此事だ。高姫さま、御苦勞乍ら貴女、玉の所在を査べて來て下さいな。同じ大自在天に獻上するのだもの、誰が取つても同じ事、それに貴女は私に玉を取らそまいとする其心の底が分らぬ。大自在天様を看板に、ヤツパリ三五教の大神に獻上する考へだらう。何程布留那の辨の高姫さまでも、心の中の曲者を隠す事は出來ますまい……あのマア迷惑相なお顔付、オツホ、ハ、ハ」

とワザと肩を揺り、高姫流の嘲笑振りをして見せる。斯かる所へ二人の黒ン坊、斷崖絶壁に手をかけ足をかけ、大勢の前に下り來り、

「わしはチャンキー、も一人はモンキーと云ふシロの島の住人だが、三年前に鬼熊別の御娘小絲姫様を御送り申して、龍宮の一つ島へ渡る途中暴風に出會ひ、船

を打割り、辛うじて此島に駆けあがり、生命を助かり、蟹やら貝などを漁つてみじめな生活を續けて来た者ですがどうぞお前さま、吾々二人を船に乗せて連れて歸つて下さいませ」

と手を合して頼み入る。毛は生え放題、髭は延び次第、手も足も垢だらけ、目のみ光らせて居る。二人の姿を間近く眺めた一同は、此言葉を半信半疑の念にかられ乍ら聞いて居る。蜈蚣姫は胸を躍らせ、

「ナニ、お前は小絲姫を送つて来て難船したと云ふのか。さうして小絲姫は何處に居りますか」

「サア何處に居られますかな。私たちは男の事でもあり、漸く此島にかぢりついたので、あまりの驚きで如何なつた事やらトツクリとは覺えて居りませぬ。大方龍宮へでも旅立たれたのでせう」

「龍宮と云ふのはオーストラリヤの一つ島の事かい」

「サア其一つ島へ行く途中に難破したのだから、龍宮違に、乙米姫様の鎮まり玉ふ海底の龍宮へお出でになつたのでせう。本當に綺麗な女王の様な方で、今思ひ

出してても自然に目が細くなり、涎が流れますワイ。ア、惜しい事をしたものだ」
と憮然として語る。蜈蚣姫は今迄張詰めた心もガツタリと、其場に倒れ身震ひし
乍ら船底にかぶりつき、忍び泣きに泣き居る。高姫は蜈蚣姫の此悲歎に頓着なく、
チヤンキー、モンキー二人の胸倉をグツと取り、
「これ、チヤン、モンとやら、お前は誰に頼まれて玉を隠したのだ。玉能姫か、
言依別か、但は此處に居る連中の誰かに頼まれて隠したのだらう。よう考へたも
のだ。コンナ遠い岩山に埋没して置けば如何にも知れぬ筈ぢや。私も今迄立派な
立派なアンボイナ島や、大島や、小豆島を探さうとしたのが感違ひ、ア、時節は
待たねばならぬものだ。サアもう斯うなつた以上は、お前が何と云つて辨解して
も白状させねば置かぬ。何程隠しても、斯んな小つぽけな島、小口から岩を叩き
割つても、発見するのは容易の業だ。隠しても知れる、隠さいでも知れるのだか
ら、エライ目に遇はされぬうちにトツトと白状したがお前の得だよ」
チヤンキー、モンキーの二人は寢耳に水の此詰問に、何が何やら合點ゆかず頭
を搔き乍ら、

「今貴女は玉を隠したとか、どうか仰有いますが、一體何の玉で御座いますか」
「オホ、よく、よう白ばくれたものだなア。それ、お前が玉能姫に頼まれた如意寶珠の玉だよ。それを何處に隠したか、キツパリと白状しなさい」

「ソナ事は一切存じませぬ」

「玉ナンテ名も聞いたこたアありませぬワイ」

「ヨシヨシ強太い者だ。腹を斷ち割つても、今度こそは白状させねば置かぬ。ア、

面倒臭い事だ。妾が自ら查べに行けば後が案じられる。蜈蚣姫さまは……ヘン……

吃驚したよな顔をして船底にかざりつき油斷をさせて、此高姫が山へ往つたな

らば矢庭に船を出し、此島に放つとく積りだらうし、ア、體が二つ三つ欲しくな

つて來たワイ」

蜈蚣姫は漸くにして顔を上げ、

「わしも今迄戀しい一人の娘に會ふのを樂みに、心の合はぬ高姫と表面だけは調子を合して來たが、天にも地にも唯一人の娘が此世に居らぬと聞けば、モウ破れかぶれた。……サア友彦、お前も憎い奴なれど、假令一年でも私の娘の夫となつ

た以上は、切つても切れぬ親子の仲、キット私に加勢をして呉れるだらうな」

「ハイお母さま、よう仰有つて下さいました。貴女の命令なら、高姫の生首を引抜くと仰有つても、引抜いてお目にかけます」

「ヤア頼もしや頼もしや、親なればこそ、子なればこそ。何處にドンナ味方が拵へてあるか分つたものぢやない。「ほのぼのと出て行けど、心淋しく思ふなよ。

力になる人用意がしてあるぞよ」……と三五教の神様が仰有つたと云ふ事だ。……

（聲に力入れ）サア高姫、モウ斯うなる以上は化の皮を引剥いて婆と婆との力比べだ、尋常に勝負をなされ」

「ヘン、蜈蚣姫さまの、あの噪やぎ様……イヤ狂ひやう。誰だつて一人の娘が死

んだと聞けば、自暴自棄も起るであらう。気が狂ふまいものでもない。併し乍ら

其處をビクとも致さぬのが神心だ……女丈夫の大精神だ。小絲姫様が海へ沈んで

龍宮行をしたと聞いて腰を抜かし、其愁歎振は何ですか。見つともない。此高姫

は元來氣丈の性質、流石は生宮丈あつて、小絲姫が海の底へ旅立をしたと聞いて、落膽どころか却て愉快な氣分に充されました。ナント身魂の研けた者と、研けぬ

者との心の持様は違つたものだナ。オホ、
と自暴自棄になつて減らず口を叩く。

「人情知らずの悪垂婆の高姫。……サア友彦、親の言ひ付けだ。權を持つて来て頭から擲りつけて下さい。一人よりない大事な娘が死んだのを、却て愉快だと言ひよつた。……サア早くスマートボール、久助、高姫を打ちのめし、海の龍宮へやつて下され。チャンキー、モンキーさま、お前さまも無理難題をかけられて、嘸腹が立たうのう。一寸の蟲にも五分の魂だ。チツトは敵討ちをしなさらぬかいな。敵は貫州と唯二人、モウ斯うなれば蜈蚣姫のしたい儘だ。……サア高姫、返答はどうだ」

と追々言葉尻が荒くなる。貫州は両手を擴げ、

「蜈蚣姫さま、御一同さま、マア待つて下さい」

「此期に及んで卑怯未練な、待つて呉れも有るものか。お前も讎敵の片割れ、覺悟をしたが宜からう」

「わしだつてコンナ没分曉漢の高姫に殉死するのは眞平御免だ。お前さまの方に、

貫州も一層の事應援するから、……どうだ、聞き届けて呉れるかな

「お前はメラの瀧でチラリと喋った言葉に考へ合はすと、あまり高姫を信用しとりさうにもないから、赦してやらう。サアどうぞや高姫、舌噛み切つて死ぬるか、此場で海へ身を投げるか、それが厭なら皆の者が寄つて懸つてふん縛り、海へ放り込まうか。最早是までと諦めて、宣傳歌の一つも此世の名残に唱へたがよからうぞ。オツホ、」

高姫は悪胴を据ゑ、腕を組み、涙をボロリボロリと零して俯向き沈む。

「オホ、、、高姫さま、嘘ですよ。あまりお前さまが我が強いから、一つ我を折つて上げようと思つて狂言をしたのだから、安心なされませ。天が下に敵もなければ他人もない。私も今迄の蜈蚣姫とは違ひます。玉能姫さまや初稚姫さまを、あれ丈ボ口糞に言つてもチツトも怒らず、親切計りで立て通しなさつた其心に感じ、善一つの眞心に立歸つた此蜈蚣姫、どうしてお前さまを苦しめませう、安心して下さい。其代りお前さまも、玉能姫さまや初稚姫其他の方々を鵲の毛の露程でも恨む様な事があつては冥加に盡きますぞ」

「ヤアそれで高姫もヤツと安心を致しました。併し乍ら初稚姫や玉能姫の悪人計りは、如何しても思ひ切る事が出来ませぬワイ。人我れに辛ければ我れ又人に辛しとやら言つて、年をとつて是れだけ苦勞艱難をするのも、みんな初稚姫や玉能姫のなす業、如何に天下の大馬鹿者、無神經者と云つても、此残念が如何して忘れられませうか」

「玉能姫様や初稚姫様は、神様の命令を受けて御用遊ばした丈ぢやありませぬか。元からお前さまを困らさうなどと、ソナナ悪い心はなかつたのでせう」

「ソナナ小理屈は言うて下さいませぬ。例へば主人が下僕に對し藪の竹を一本伐つて来いと命令したと見なさい。竹を伐る時の竹の露は誰にかかりますか。ヤツパリ下僕にかかるぢやありませんか。竹伐つた奴は玉能姫、初稚姫の兩阿魔女だ。怨みが懸らいで何としようぞいの。ア、口惜しい、残念や、オーン オーン オーン」

と前後を忘れ狼泣きに泣き始めける。

折しも海鳴の音、俄に萬雷の一時に轟く如く聞え來り、波は刻々に高まる。一

同はチャンキー、モンキーの後に従ひ、最も高き岩上に避難した。船は纜を千切られ、何處ともなく、浪のまにまに流れて了つた。水量は追々まさり、最早足許まで浸して来る。山嶽の様な浪は遠慮會釋もなく、頭の上を掠めて通る。殆ど水中に没したと思へば又現はれ、息も絶え絶えになり、各自覺悟の臍を極めて神言を奏上し、心の隔てはスツカリ除れて、唯生命を如何にして保たむやと是れのみに焦慮し、宣傳歌を泣聲まぜりに聲を嚙らして唱へ居る。

斯かる所へ波に漂ひつつ艫を操り、甲斐々々しく進み来る一隻の稍大なる船ありき。日は漸く暮れ果て、誰彼の顔も碌に見えなくなり來たり。一隻の船には三人の神人が乗り居たり。船の中より、
「ノアの方舟現はれたり、サア早く乗らせ給へ」
と呼ばはり乍ら足許へ漕ぎ寄せ來る。一同は天にも昇る心地し乍ら、一人も残らず此船目蒐けて、天の祐けと飛び込めば、船は波を押分け悠々として西南指して進み行く。

斯く俄に鳴動し、水量まさり來りしは、南洋のテンカオ島と云ふ巨大なる島が、

地^ぢ迂^すりの爲^{ため}に海^{かい}中^{ちゆう}に沈^{ちん}没^{ぼつ}した爲^{ため}、一時^{いちじ}の現象^{げんしやう}として斯^{かく}の如^{ごと}くなりしなりき。水^{みづ}量^{かさ}は追^{おひ}々^{おひ}常^{じやう}態^{たい}に復^{ふく}しぬ。船^{ふね}は月^{つき}に照^{てら}され乍^{なが}ら海^{かい}上^{じやう}静^{じゆう}かに走^{はし}り居^ゐる。船^{ふね}の中^{なか}の神^{しん}人^{じん}の爽^{すわ}かな聲^{こゑ}、

「妾^{わたし}は玉^{たま}能^の姫^{ひめ}で御^ご座^ざいます。高^{たか}姫^{ひめ}様^{さま}、蜈^{むか}蚣^か姫^{ひめ}様^{さま}、其^{その}他^た御^ご一^{いち}同^{どう}様^{さま}、危^{あぶ}ない所^{ところ}で御^ご座^ざいましたが、神^{かみ}様^{さま}のお蔭^{かげ}で先^まづ先^まづ御^ご無^ぶ事^じで、コナ御^お芽^め出^でたい事^{こと}は御^ご座^ざいませぬ。妾^{わたし}達^{たち}は神^{かみ}様^{さま}の御^ご命^{めい}令^{れい}に依^よつて、貴^{あなた}女^が方^がが海^{かい}神^{しん}島^{とう}にお着^つき遊^{あそ}ばす迄^{まで}御^ご保^ほ護^ご申^{まう}せとの言^{こと}依^{より}別^{わけ}命^{めい}の御^ご命^{めい}令^{れい}で、見^みえつ隠^{かく}れつお後^{あと}を慕^{した}つて参^{まゐ}りました。ア、有^{あり}難^{がた}い、これで妾^{わたし}の使^し命^{めい}も完^{くわん}全^{ぜん}に勤^{つと}まつたと申^{まを}すもの、マアよう無^ぶ事^じで居^ゐて下^{くだ}さいました。玉^{たま}治^{はる}別^{わけ}も居^をられます。初^{はつ}稚^{わか}姫^{ひめ}様^{さま}もここの乗^のつて居^をられます」

「是^これと云^いふのも全^まく日^ひの出^で神^{かみ}様^{さま}の御^ご神^{しん}德^{とく}ぢや。お前^{まへ}さまも其^{その}お蔭^{かげ}で言^{こと}依^{より}別^{わけ}命^{めい}に對^{たい}して言^いひ譯^{わけ}も立^たち、完^{くわん}全^{ぜん}に御^ご用^{よう}も勤^{つと}まつたと云^いふもの、コナ事^{こと}がなければお前^{まへ}さまが遙^{はる}々^{はる}此^こ處^こまで出^でて來^きたのも無^む意^い義^ぎに終^をるとこだつた。ア、神^{かみ}様^{さま}は誰^{たれ}も「つつば」に致^{いた}さぬと仰^{おつ}有^{しや}るが偉^{えら}いものだなア。大^{おほ}神^{かみ}様^{さま}は平^{びやう}等^{どう}愛^{あい}を以^{もつ}て心^{こころ}となし給^{たま}ふ。お前^{まへ}さまもこれ^こでチツトは我^がが折^をれただらう。手^て柄^{がら}を横^{よこ}取^{どり}して自^じ分^{ぶん}一^{ひとり}人が

猫糞をきめこみ、結構な神寶を隠して素知らぬ顔をして御座つたが、是れで神様の
大御心が分つたでせう。サア玉の所在を綺麗サツパリと皆の前にさらけ出し、
功名手柄を独占しようなぞと云ふ執着心を、此際放かしなざるのが御身の得だぞ
へ、オホ、へ、へ、

玉能姫、初稚姫は呆れて何の言葉もなく、默然として俯むき居たり。玉治別は
一生懸命に艀を操り乍ら高姫の言葉を聞いて少しくむかついたが、神直日大直日
の宣傳歌を思ひ出し、吾と吾心を戒め、さあらぬ態に船唄を唄ひ、汗をタラタラ
流し乍ら船を操り居たり。

高姫「コレお節さま、お初さま、お前さまもいい加減にハンナリとしたらどうだ
い。助けに来るのも、助けられるのも皆神様に使はれて居るのだよ。必ず必ず高
姫其他を助けてやつたと慢神心を出してはなりません。ハヤそれが大變な取違だ。
九分九厘になつたれば神が助けるぞよと、チヤンと仰有つてる。家島で船を取ら
れた時も、神がお節さまを御用に使ひ、船を持つて來さしました。アンボイナ島
でも其通り、今又日の出神のおはからひで結構な御用を指して貰ひなさつた。此

處で結構な御用をさして貰ひなされたのも、ヤツパリ高姫があつたればこそ……
一遍々々お前さまは手柄が重なつて結構だが、ウツカリ慢神すると谷底へ落され
ますぞや。大分に鼻が高うなり出した。チツト捻ぢて上げようか」
と二人の鼻を掴みかからうとする。貫州は其手をグツと握り、
「コレ高姫さま、我が強いと云つても餘りぢやないか。側に聞いて居る私でさへ
も憎らしうて、お前さまを殴りつけたうなつて来た。ようもようも慢神したもの
だなア、チツト胸に手を當てて考へて見なさい。生命を助けて貰ひ乍ら、又して
も又しても減らず口を叩いて、よう口が腫れぬ事だナア」
「貫州、神界の事はお前達の容喙すべき事ぢやない。どんなお仕組がしてあるか
分りもせぬのに、出しやばつて囀るものぢやありませんぞ。バラモン教の蜈蚣姫
さまでさへも高姫の言葉に感心して、何とも仰有らぬのに、没分曉漢のお前が何
を吐くのだい。お前も大分に鼻が高くなつた。一つ捻つてやらうか」
と稍高い鼻を掴みかかるのを、貫州は力をこめて撥ね飛ばした途端に、高姫はザ
ンブと計り海中に落込みぬ。玉治別は驚いて、矢庭に棹を突き出す。高姫は一生

懸命になつて棹に喰ひつき、漸くにして救ひ上げられけり。

「コレ貫州、何と云ふ亂暴な事を致すのだい」

「是れも神界の御都合でせう。肱出神様が肱で【はぢ】かはりましたら、貴女が曲藝を演じてカイツムリとなり、皆の者一同に観覧さして下さいました。本當に抜目のない愛想のよい仁慈無限の高姫さまだと、云はず語らず、皆の者が舌を出して喜び居りましたワイな」

蜈蚣姫「高姫さま、お怪我は御座いませなんだか。お前さまも餘りお口がよろしいからナア」

「放つといて下され、口がよからうが惡からうが、妾の口は妾が自由に使用するのだ。お前さま等の改心が足らぬから、此高姫が千座の置戸を負うて此海へ飛び込み鹹い鹽水を呑んで罪を贖ひ、助けて上げたのだ。何故一言の御禮を申しなさらぬ。……コレコレ、ムカデにお節、お初殿、分りましたかなア」

玉能姫「ハイ、どうもお元氣な事には心の底から感心致しました。その勢なれば強いものです。大丈夫ですワ」

「さうだらう。お前も大分に高姫の心の底が見えかけたよ、大分に身魂が研けたやうだ。モ一つ打解けて玉の所在さへ白状すれば、それこそ立派な者だ。高姫の片腕になれるべき素質は充分にある。モウそろそろ言はねばなるまい。言はねば云ふ様にして言はずよと大神様が仰有つた事を覚えて居ますか。誰が何と云つても良の金神、坤の金神、金勝要神、一番地になるのが日の出神、四魂揃うて、誠の花が咲くお仕組、何程言依別が瑞の御霊でも、玉照姫が木花咲耶姫の分霊でも、玉照彦が三葉彦の再来でも、到底四魂の神には肩を並べる事は出来ません。お前さま達は今迄何でも彼んでも、言依別や其他の枝の神の申す事を聞いて居つたから、思ふ様にチツトも行きやせまいがな。四魂の中でも根本の土臺の地になる日の出神をさし措いて、何結構な御用が出来るものか、此れを機会に改心が一等で御座るぞや」

と口角泡を飛ばし、誰も返辭もせないのに、獨り噪やいで居る。

船中の人々は高姫を氣違扱ひして相手にならず、言ひたい儘に放任し置きたりける。

蜈蚣姫は丁寧な言葉にて、

「玉能姫様、初稚姫様、玉治別様、アンボイナ島では大變な失禮な事を申し上げます。したが、どうぞ御赦し下さいませ。就きましては妾の娘小絲姫は魔島の麓で船を破り可哀や溺死を遂げました。夫は今波斯の國に居りますなり。年老つた妾、夫婦別れ別れになり、一人の娘には先立たれ、最早此世に何の望みも御座いませぬ。どうぞ今迄の御無禮を海へ流して、どうぞ妾を貴方のお供になりと御使ひ下さいませ。實に立派な御心掛け、如何な惡に強い妾も感心致しました。」

「如何致しまして、老練な蜈蚣姫様、どうぞ宜しく、足らはぬ妾の御指導を願ひ致します。今承はれば小絲姫様は海の藻屑となつたと仰せられましたが、それは御心配なされますな。屹度オーストラリアの一つ島に立派な女王となつて、羽振りを利用かして居られます。妾は素盞鳴尊様の御娘、五十子姫様より小絲姫様の消息を聞きました。今は三五教の教を樹て黄龍姫と名乗つて立派に暮して居られます。やがて芽出たく親子の對面が出来ませう。どうぞ御心配をなさらぬ様、勇

んで下さいませ」

「ア、有難い、左様で御座いましたか。是れと云ふのも皆大神様の御神徳……」
と手を合せ、直に天津祝詞を奏上し、感謝の辭に時を移しけり。高姫は投げ出し
たやうな言葉付きで、

「蜈蚣姫さま、どうでお節の云ふ事、當にやなりますまいが、假令話にせよ、娘
さまに會へると云ふ事をお聞きになつたら嘸嬉しいでせう。妾も虚實は兔も角、
言靈の幸はふ國、刹那心でも芽出たいと思はぬこたアありません。併しまア物は
當つてみねば分りませぬ。どうも日の出神の觀察では怪しいものだが、折角そこ
までお前さまが喜びて居るのだから、妾も一緒に付合に喜びて置ませう」

玉治別は立ち上り、

「サア方向に見えるのがニュージールランドの沓島だ。皆さま少々波が荒くなるか
ら、其覺悟して下さい」

(大正一一・七・三 舊閏五・九 松村眞澄録)

此日午前六時二代様三代様も白山、月山に御登山の途に就かるとの電來たる。

第一〇章 土人の歓迎〔七四〇〕

南洋一の龍宮島 アンボイナをば後に見て

救ひの船に身を任せ 進み來れる高姫や

蜈蚣の姫の一行は 夜を日に繼いでオセアニヤ

一つ島根に渡らむと 心勇みて漕ぎ來る

時しもあれや海中に すつくと立てる岩島を

左手に眺めて進み行く 俄に海風吹き荒び

浪高まりて船體を 操る術も無きままに

浪を避けむと岩島の 蔭に漕ぎつけ眺むれば

怪しき影の唯二つ 何者ならむと立ち寄つて

素性を聞けば錫蘭島の チヤンキー モンキー
兩人が

顯恩城の小絲姫 龍宮城へ送る折

俄にはかの時しけ化けに船ふねを破わり
茲ここに非難ひなんし居あたりしを

漸やつやく悟さとり高姫たかひめは
日頃ひごろ探たづぬる神寶しんぱうの

匿かくせし場所ばしよは此島このしまと
疑惑ぎわくの眼光まなこひからせつ

二人ふたりの男をとこを引ひつ捉とらへ
【ためつ】賺すかしつ尋たづぬれど

元もとより譯わけは白浪しらなみの
中なかに漂ただよふ二人ふたり連づれ

取とりつく島しまも泣なき寢ね入り
蜈蚣むかでの姫ひめは兩人りやうにんが

話はなしを聞きいて仰天ぎやうてんし
小絲こいとの姫ひめは世よの中なかに

もはや命いのちは無なきものと
悲歎ひたんの涙なみだに暮くれながら

船底ふねそこ深ふかくかぢりつく
ころしもあれや南洋なんやうに

其名そのなも高たかき一巨島いちきよたう
テンカ才島たうは海中かいちうに

大音響だいおんきやうと諸共もろともに
苦くもなく沈しづみし勢いきほひに

海水かいすゐ俄にはかに立たち騒さわぎ
水量みづかさまさりて魔まの島しまを

早はや一吞ひとのみに吞のまむとす
高姫たかひめ其他そのたの一いち同どうは

九死きうし一生いつしやうの苦くるしみに
生いきたる心地ここちも荒浪あらなみの

肝を潰せる折柄に

黄昏時の海原を

聲を目當に進み来る

救ひの船に助けられ

やつと安心胸を撫で

進む折しも玉能姫

初稚姫や田吾作の

助けの船と悟りてゆ

高姫持病は再發し

竹籠返しの減らず口

頤を叩くぞ憎らしき

あゝ惟神々々

神の恵は何處までも

悪の身魂も懇に

誠の教に導きて

救ひ給ふぞ有難き

玉治別の漕ぐ船は

夜に日を重ねてやうやうに

ニュージールランドの沓島の

磯端近く着きにけり

浪打ち際に近づけば

思ひもよらぬ高潮の

寄せては返す物凄さ

船の操縦に悩みつつ

スマートボールや貫州や

チヤンキー モンキー 諸共に

汗を流して櫂を漕ぎ

漸く上陸したりける

あゝ惟神々々
神の恵ぞ畏けれ。

御靈の幸ぞ尊けれ

物珍しげに島の土人は小山の如く現はれ來り、口々に手を打ち「ウツポー、クツター クツター」と叫びゐたり。これは「珍しき尊き神人來り給へり」と云ふ意味なり。一同は「ウツポー、クツター クツター」の諸聲に送られ、禿計りの島に似合はず、樹木鬱蒼たる大森林の樹下に導かれ、珍しき果物を響應され、神の如くに尊敬されたりける。

友彦は得意満面に溢れ、言語の通ぜざるを幸ひ、猿の如く大樹の枝にかけ登り、懷より麻を取り出し左右左に打ち振りながら、

「ウツポツポー ウツポツポー、テンツルトウ テンツルトウ、チンプクリンノ
チンプクリン、プクプクリンノプクプクリン、ペンコ ペンコ、チャツク チャ
ツク、ジャンコ ジャンコ、テンツルテンノテンツルトウ、トコトンポーリー
トコトンポーリー、カンカラカンノケンケラケン、高姫さまのガンガラガンノコ

ンコロコン、蜈蚣姫のパーパーサン、コンコンチキチン、コンチキチン、小絲の姫の婿様は、トントコトンの友彦が、ウツパツパー　ウツパツパー、シヤンツクテンテンツクテンテン、キンプクリンノフクリンリン」
と囀り初めたり。數多の土人は一行中の最も貴き神と早合點し、隨喜の涙を零し合掌しゐたり。スマートボールは又もや驅け登り、矢庭に木の枝を手折り、左右に打ち振り、

「ウツポツポー　ウツポツポー、キンライライノクタクタライ、キンプクリンノキンライライ、ウツポツポー　ウツポツポー」

と囀り出したり。スマートボールは自分の云うた事を自分ながら些とも解して居ない。されど土人の胸には、先に上つた友彦よりも最上位の神たる事を悟りたり。友彦は又もや、

「ウツポツポー、ペンペコペン、ウツポツポ、パーパーサン、エツポツポー、エツポツポー」

と囀り出したり。是は土人の言葉に對照すると、

□ 二人の女は眞の平和の女神だ。さうして若い方の婆アは悪黨だ。色の黒い婆アは一つ島の女王の母上だ。

と云ふ意味になる。數多の土人は蜈蚣姫の前に跪き、手を拍ち嬉し涙に暮れながら恭敬の意を表し、踊り狂ひ、其次に玉能姫、初稚姫を胴上げにし、「エイヤ イヤ」と聲を揃へて森の木蔭を昇ぎ廻り、踊り狂ふ可笑しさ。玉能姫、初稚姫は様子分らねど、兔も角も自分等を尊敬せしものたる事は、其態度に依つて悟る事を得たりける。

森林の最も高き所に七八丈許りの方形の岩が、地の底から湧き出たやうに現はれ居たり。其上に玉能姫、蜈蚣姫、初稚姫の三人を昇ぎ往き、種々の果物を各手に持ち來り、所狭き迄竝べ立て、此岩を中心に踊り狂ひ廻つた。残りの一隊は大樹の下に移り行き、何事か一生懸命に祈願し初めたり。

玉治別は一向構つて呉れないのに稍稍氣氣味となり、又もや樹上に駆け登り木の枝を手折つて、前後左右に無精に打ち振り、

□ ウツパツパーウツパツパー、キンライライノクタクタライ、ラーテンドウ ラー

と云ふ、それはそれは恐ろしい、人を騙して金を奪り、娼盗人をやつた悪い悪い男だよ。そして後から上つた細長い猿の様な男はスマートボールと云ふ、最前行つた蜈蚣姫の乾兒の中でも一番意地くねの悪い代物だ。三番目に登つた奴は神でも何でも無い。自轉倒島の宇都山の里に、蚯蚓切りの蛙飛ばしを商賣にする、田吾作と云ふ男だ。如何に盲千人の世の中だと云うても、取違ひするにも程がある。此中で一番尊い御方は日の出神の生宮たる此高姫だよ、取り違ひをするな」と癩癩聲を張り上げながら、自分の鼻先をチヨンと押へて見せたれど土人には何の事が一つも通ぜず、齒脱け婆が氣を焦つて、尻をかまされた腹立紛れに怒鳴つて居るのだ位に解され居たり。一同の土人は高姫に向ひ、兩手の食指を突き出し、左右の指を交る交る鼻の前に突出し、しゃくつて見せたり。高姫も何事か譯が分らず、同じやうに今度は指を外向けにして、水田の中を熊手で掘るやうに空中を掻いて見せる。其スタイルは蠅螂の怒つた時の様子に似たりける。數十人の土人は何故か一度に頭を大地につけたり。高姫は調子に乗つて幾回となく空中を掻く。樹上の友彦は又もや、

「エツポツポー エツポツポー、パーパーチクリン、パーチクリン、ポコポコペンノポコポコペン、ペンポコペンポコ、チンタイタイ」

と叫ばば、一同はムクムクと頭を上げ、日に焦けた眞黒な腕を二ウと前に出し、一齊に高姫に向つて突きかかり来る。此時玉治別は樹上より、

「エイムツエイムツ、ツウツウター」

と叫ぶ。一同は俄に腕をすくめ、力無げに又元の座に平伏し、樹上の三人に向つて合掌し、何事か聲低に祈り居る。

暫くありて玉能姫は、蜈蚣姫と共に初稚姫を中に置き、後前を警固しながら數多の土人に送られて、大樹の下に引き返し來りぬ。玉治別は調子に乗つて口から出任せに、

「ダールダール、ネースネース、ツツーテクテレリントン、ニウジイランドテテーポーポー、ツツーポーポ、タターポーポー、エーポーポー、エーツクエーツク、エーポーポー、エーツクエーツク、エーポーポー、エーツクエーツク、エーテイテイ」

と叫ぶや否や、土人の大多數は蜘蛛の子を散らすが如く此場を立ち去りにける。

玉能姫は樹上を見上げながら、

「玉治別さま、スマートボールさま、早く下りて下さい、玉能姫は一つ島に往かねばなりますまい。サア早く早く」

と手招きするにぞ、三人は此聲に應じて、ずるずると樹下に苦もなく下り來たりぬ。暫くありて土人は滿艦飾を施したる立派な船を一艘と、其他に堅固なる船十數艘を率ゐ來り、中には至つて見苦しき泥船一艘を交せて居た。最も麗しき船に玉能姫、初稚姫、蜈蚣姫を丁寧に寄つて集つて昇ぎながら、恭しく乗せた。玉治別は我乗り來りし船に、スマートボール、友彦と三人分乗した。久助、お民は土人と共に麗しき船に乗せられた。チャンキー、モンキー及び高姫は泥船に無理に捻込まれ、艫を漕ぎながら、數百人の土人は大船に滿乗して、一つ島目蒐けて送つて行く。高姫は不平で堪らず、種々と言葉を盡して……日の出神の生宮を最も立派な船に乗せるのが至當だ、玉能姫ナンカは普通の船でよい……と身を蹴いて喋り立てたが、土人には一向言葉も通じないと見えて、

「エツポツポー エツポツポー、パーパーチツク、パーチツク」

と云ひながら、一つ島目蒐けて進み行く。玉治別は船中にて宣傳歌を歌ひ初めたり。

□ コーツコーツオーリンス セイセイオウオウオウセンス
チーサーオーサーツウツクリン コモトヨコモト、カンツクリン
ターツーターツーターリンス ノウミス ノウミス ヨーリンス
メースヤーツノーブクリン[□]

と歌ひ出しぬ。土人は此聲に隨喜の涙を洩し、手を拍つて合掌したり。この意味は、

□ 神が表に現はれて、善と惡とを立て別ける、此世を造りし神直日、心も廣き大直日、唯何事も人の世は、直日に見直せ聞き直せ、身の過ちは宣り直せ[□]
と云ふ宣傳歌の直譯なり。玉治別は此島の神靈に感じ、俄に南洋の語を感得したるなりき。其他の一同も、残らず此島に上陸して神靈に感じ用語を悟りぬ。され

ど我慢にして猜疑心深き高姫には、一語も神より言葉を與へ給はざりしなり。船中では残らず南洋語で持ち切り、恰も燕の巢の如く「チーチーパーパー、キウキウ」の聲に満たされ、漸くにして一つ島のタカ（テーク）の港に無事上陸したりける。土人の中にも最も羽振の利いた酋長のカーチヤンは、二三人の供人と共に辛うじて港に上陸するや否や、黄龍姫の鎮まる王城の都を指して、蜈蚣姫一行の到着を報告すべく、一目散に島内深く姿を隠しけり。

初稚姫、玉能姫、蜈蚣姫は土人の手車に乗せられて、之を昇ぐやうな體裁で、「エツサアサア エツサアサア」と云ひながら都をさして送られて行く。玉治別は驢馬に跨がり、友彦其他を従へ悠々として土人の一隊に守られ進み行く。高姫は非常の侮辱と虐待を受けながら意氣銷沈の體にて、恨めしげにとぼとぼと、どん後から隨從て往く。往く事數十丁、前方より麗しき輿を昇ぎ、騎馬の兵士數十人、前後につき添ひ、威風堂々として來る眞先に立てる勝れて背の高い男、馬上より、

「我こそは黄龍姫の宰相、ブランジーと申すもの、今日は女王の御母上蜈蚣姫様

御來臨と承はり、これ迄お迎ひのため罷り越したり。……サア蜈蚣姫様、この輿にお乗り下さいませ」

とすすむるにぞ、蜈蚣姫は意外の待遇に嬉しさ餘つて言葉も得出さず差俯むき居る。群衆は何の容赦もなく手車の儘輿の傍に近づき、御輿の戸を開けて、蜈蚣姫を乗らしめたり。初稚姫、玉能姫は土人の手車に乗りしまま輿の後に従ひ行く。行く事數十丁、忽ち黄龍姫の城内に一同迎へ入れられ、御輿は玄關の前に据ゑられける。此時黄龍姫はクロンバーを従へ玄關に立ち現はれ、輿より出づる蜈蚣姫の手を取り、嬉し涙を湛へながら奥深く姿を匿しけり。クロンバーは玄關に佇み、一行の姿を見やりながら、

「ヤアお前はお節ぢやないか。お初、何ぢや偉さうに手車に乗つて……慢神するにも程がある。ヤア田吾作、スマートボールに鼻の先の赤い男、ヤア何とした今日は怪態な日だらう。高山さまも高山さままだ、なぜコンナ代物を迎へ入れたのだらう……それに付けても高姫さま、酷い事を仰有つて私を追ひ出さなかつたが、嗚や今頃は心細く思うて居なさるだらう、ア、お哀憫しい。コンナ連中に遭ふの

も嫌だが、高姫さまに何うかして一目遭ひたいものだ」

と獨り呟き居る。玉能姫、初稚姫はクロンバーに向ひ、

「ヤア貴女は三五教の黒姫さまでは御座いませぬか、妾は初稚でムいます」

「ハイ、左様で御座います。世間は廣いもの、自轉倒島に居つて、皆さまに笑は

れ譏られ、邪魔計りしられて居りましては眞實の神力が出ませぬが、此廣い島に

渡つて来て自由自在に神力を發揮し、今では此通り立派な一國の宰相の北の方と

なりました。お前さまは矢張言依別命について自轉倒島を宣傳に廻り、失敗の結

果、又ボロイ事があらうかと思つて、南洋三界迄彷徨うて來なさつたのだな。ウ

ンよしよし、世界に鬼は無い。改心さへ出來れば黒姫が助けて上げよう。窮鳥懷

に入れば獵師も之を取らずと云ふ事がある。もうかうなつては今迄のやうに我を

張らずに、お節……ハイ、……お初……ハイ……と云うて黒姫に絶対服従をなさ

るのが身の爲めぢやぞエ。……お前は田吾作ぢやないか。矢張周章者は周章者ぢ

や。自轉倒島ではもう相手が無くなつたかや。オホ、……氣の毒な事いのう」

玉治別は餘りの侮辱にむツとしたが、堪忍袋を押へて素知らぬ顔にて笑ひ居る。

ブランジীর高山彦は馬に跨がり乍ら、

「ヤアヤア數多の人々、遙々御苦勞なりしよ。城の馬場に澤山の酒肴の用意もしてあらば、自由自在に飲み食ひしてお歸り下さい」

群衆はウローウローと云ひながら、雪崩を打つて城門を驅出し、廣き馬場に列べられたる酒肴に舌鼓をうち、酔が廻るに連れて唄ひ舞ひ、踊り狂ひ、歡喜の聲は天地も揺ぐ許りなり。

高姫は悄悄として、漸く玄關に現れ來り、黒姫の姿を見るより、矢庭に飛び込み獅噛みつき、

「ア、貴女は黒姫様、お久しう御座います」
また黒姫は、

「ア、貴女は高姫様、會ひたかつた、懐かしや」
と他所の見る目も憚らず、互に抱きつき嬉し涙に掻き曇る。

高山彦は馬を乗り捨て其場に現はれ、
高姫さまですか、私は高山彦ですよ。ようまア來て下さいました」

と涙含み乍ら、二人の手を取り奥深く進み入る。玉治別、初稚姫、玉能姫其他の一同は裏門より密に逃れ出で、裏山の森林に姿を隠し息を休め居たりける。
(大正一一・七・三 舊閏五・九 加藤明子録)

第一章 夢の王者〔七四一〕

黄龍姫の奥殿には、蜈蚣姫と一つ島の女王なる小絲姫の二人端坐して、親娘再會の悲喜劇が演ぜられ居たりける。

母上様、久闊で御座いました。ツイ幼な心に前後の區別も辨へず、卑しき下僕の友彦に唆かされ、御兩親様を打ち捨てて家出を致しました、重々不孝の罪、お詫の申し様も御座いませぬ。何卒今迄の事は憎い奴ぢやと思召さず、お赦し下さいませ。

と下坐到直つて悔悟の意を表する。蜈蚣姫は嬉し涙に暮れ乍ら、

何の何の、叱りませう。一時は兩親共に大變な心配を致しまして、殆ど此世が厭になり、いつそ夫婦の者が淵川へでも身を投げて死なうかと迄も悲觀の淵に沈みました。然し大慈大悲の神様のお蔭で、淋しき悲しき心にも一道の光明が輝き始め再び夫婦は心を取直し、大自在天様の御教を波斯の國から印度の國、自轉倒島まで教線を張り、肺肝を碎き活動をして見ましたが、如何しても吾々夫婦の行動が大神様のお心に召さぬと見え、する事爲す事、鶡の嘴と喰ひ違ひ、夫の鬼熊別様は波斯と印度との國境、テルモン山の山麓に僅に教の園を開き給ひ、妾は自轉倒島を駆け廻り、風の便りに其方の所在を聞き知り、萬里の波濤を越えて漸う此島に着きました。鬼熊別が聞かれたなら、嘸お喜びなさる事であらう。まア立派に成つて下さつた。斯様な大きな島の女王となる迄には、随分苦勞をなさつたでせう」

「イエイエ、尠しも苦勞ナン力致しませぬ。何事も神様の大御心にまかせ、國祖國治立尊の御守護遊ばす三五の教を信じ、瑞の御魂の大御心を心とし、焦慮らず燥がず、人を憎まず妬まず、心からの慈愛を旨となし萬民に臨みました。その徳

によつて此國は無事泰平に治まり果實よく稔り、民は鼓腹擊壤、恰も顯恩郷の昔の様に御座います。何卒母上様、貴女御夫婦共今迄の心を立替立直し、國祖國治立大神様の御心を奉體し、誠一つになつて下さいませ。誠ほど強いものの結構なものには御座いませぬ。如何なる敵も赦すのが神様の御心で御座います」

「いかに立派なお心掛け、さうでなくては結構なお道は開けますまい。さうしてお前様の御用助けをする方は誰方で御座いますか」

「ハイ、實の所、顯恩郷のバラモンの本山に御座つた五十子姫様、梅子姫様、それに付き添う今子姫、宇豆姫の四人の方々が、廣大無邊の神力を現はし、其手柄を皆妾にお譲り下され、妾を此島の女王として下さつたのです」

「何、あの五十子姫、梅子姫がソナ立派な行ひを致しましたか。姉妹八人申を合せ、顯恩城に忍び入り、大棟梁様の裏をかいて、メチャメチャに叩き壊した悪神ではありませぬか」

「あの方々は神素盞鳴尊様の御娘子、神様の命令に依つて顯恩郷に下僕となつて、バラモン教の人々を誠の道に救はむ爲に、天降り遊ばしたので御座います。決し

て悪く思はれてはなりません。今日の處では、五十子姫様は今子姫と共に自轉倒島の聖地へ指してお歸りになり、只今は梅子姫様、宇豆姫と共に妾の日夜の神政を補助指導して下さる、結構な神様の様なお方で御座います。何卒母上様、一度丁寧にお禮を申し上げて下さいませ」

蜈蚣姫は此物語に驚き舌を捲き、「へーッ」と言つたきり暫時言葉も出でず、思案投げ首に時を移したりける。

少時あつて侍女が運びきたる豆茶に喉を潤し乍ら、蜈蚣姫は語を次で、

「お前様はそれ丈け善一筋の道を守り、結構な女王とまで成りなされた位だから、今迄の如何なる無禮を加へた者でも赦しませうなア」

「ハイ、赦すの、赦さぬのと……左様な大それた……人間として資格は持ちませぬ。何事も皆神様のお仕組ですから……」

「假令友彦の様な男でも、謝つて来たならば貴女は赦しますか」

「人間の性は善で御座います。悔い改めさへすれば元の大神様の分靈、罪も穢も御座いますまい。母上様は友彦をお怨みで御座いませうが、決して友彦が悪いの

では御座いませぬ。妾こそ友彦に對して、實に濟まない事を致しました。神様の御神徳を頂き、斯様な結構な身の上になつたにつけても、明暮思ふのは御兩親様の事、次には友彦の事で御座います。寢ても起きても……ア、實に濟まない事であつた……と思へば【うら】恥しくて立つても居ても居られない様です。何卒一度お目にかかつてお詫を致し度いもので御座います。それ故妾は貞節を守り、獨身生活を續けて居ります」

と涙を袖に拭ふ。蜈蚣姫はアフォンと許り呆れかへり、

「戀に上下の隔てなしとは、よくも言つたものだな。矢張りお前さまは友彦が戀しいのですか」

小絲姫は俯向いて無言の儘涙にかきくれる。

「萬々一其友彦が詐偽師、大泥棒、人の婢ア盗みをする悪黨であつたら、お前さまは如何しますか」

「チツトも構ひませぬ。友彦さまを悪人にしたのも皆妾の罪、それなれば尚々大切にして上げねばなりませんまい」

「へエ左様ですか」

と娘の顔を訝かしげに打ち看守る。

此時一人の侍女慌しく此場に現はれ來り、

「女王様に申し上げます。今玄關口に鼻の先の赤い、色の黒い、不細工な男が一人

立ち現はれ、……「俺は女王の夫だ、一遍小絲姫に會はせ」……と呶鳴つて居り

ますので、大勢の者どもが、コンナ氣違ひを寄せてはならないと種々と致します

れど、力強の鼻赤男、容易に治まりませぬ。小絲姫に告げと許り失禮な事申して

居りますが、如何致しませうか」

と聞くより小絲姫は顔色をサツと變じ、

「何、鼻の先の赤い男が、小絲姫に會ひたいと言つて居ますか。さア妾も参りま

せう。……母上様、暫時此處に待つて居て下さいませ」

と言ひ捨て、侍女の後に従ひ長廊下を傳ひ、表玄關指して進み行く。あとに蜈蚣

姫は舌を捲き、

「ナント強い惚氣様だなア。雀百まで雄鳥を忘れぬとやら、妾も如何やら鬼熊別

様が思ひ出されて、お懐しうなつて来たワ」

と四邊に人無きを幸ひ、思ひのままに泣き叫ぶ。玄關口に現はれた小絲姫は、前後左右に數多の下僕を手玉にとり荒れ狂ふ友彦の姿を見て、ニコニコし乍ら「友彦殿、友彦殿」と聲を掛けたり。此聲に友彦は振り返り、俄に襟を繕ひ身體の恰好を直し乍ら、

「やア小絲姫どの、久し振りでお目に掛りました。随分凄腕前でしたね」

「誠に申譯のない事で御座いました。さア何卒奥にお這入り下さいませ。妾がお手を執つてあげませう」

一同小絲姫の此行爲に呆れはて、ポカンとして打ち眺め居たり。友彦は小絲姫の握つた手を打ち拂ひ、

「滅相も無い、權謀術數至らざるなき恐ろしき貴女、迂闊手でも引かれ様なものなら電氣にかけられた様に、寂滅爲樂の運命に陥らねばなりません。エー、恐ろしや恐ろしや僅か十六か十七で、コンナ大きな島の女王に成る様な腕前、活殺自在の權能を持つて居る貴女、何卒生命ばかりは昔の交誼で助けて下さい。貴女

も随分私に泡を喰はせたから、もうあれで得心でせう。此上苛めるのは胴欲で御座います」

「戀しき友彦様、何御冗談を仰有いますナ。日日毎日、夢幻と貴下の事を思ひつめ、待つて居りました。さア安心して奥へ行つて下さい。母の蜈蚣姫も奥に休息して居られますから……」

友彦は稍安心の態にて、赤い鼻を右の手で隠す様にし乍ら、小糸姫の細き手に左の手を握られ従いて行く。

「友彦さま、アタ恰好の悪い、右のお手をソナ處へ當てたりして、何をなさいます」

「あまり鼻が赤くて見つとも無う御座いますから……」

「ホ、ホ、ホ、妾は其赤い鼻が好きなのですよ。世界中に鼻の先の赤い立派な男

が、さう澤山にありますものか、ホ、ホ、ホ、」

と笑ひ乍ら奥深く進み行く。友彦は嬉しさと嫌らしさと恥しさが一つになり、足もワナワナ奥殿目蒐けて進み入る。

奥の一室には蜈蚣姫只一人、夫の身の上を思ひやり眼を腫して居る。其處へ嫌な嫌な友彦の手を携へて、嬉しげに這入つて来た小絲姫の姿を見て打ち驚き、
「まア、小絲姫様、冗談ぢやと思つて居たら本當ですか。アンナ糞彦を奥殿へ引張り込み遊ばしては、貴女の御威徳に關はりませう。冗談も良い加減になさいませ。……これこれ友彦、身の上知らずも程がある。お前等の來る處ぢやない、さアトツトと下僕の部屋へでも下つて休息しなされ。何程小絲姫がお前に執着されても肝腎の此親が許しませぬぞや」

「妾は肉體こそ貴女の娘、今は一國の權利を握る女王で御座れば、如何に貴女のお言葉なりとて承はるわけには参りませぬ。……友彦様、今迄の御無禮はお許し下さいませ。……母上様、友彦様の今迄の罪は許してやつて下さい。今日より友彦様を更めて妾が夫と仰ぎ、龍頭王と御名を與へます。……いざ龍頭王殿、今日只今より妾は貴下の妻で御座いますれば、何卒宜しくお願い致しまする」
友彦は夢では無いかと頬を抓つて見たり、其處四邊を突いて見て茫然として居る。斯かる處へ梅子姫は美しき器に種々の珍味を盛り、徐々として入り來り、

「これはこれは蜈蚣姫様、ようこそ御入來下さいました。久し振りでお目に懸ります。先づ御壯健にて、何より大慶至極に存じます。妾は顯恩城に仕へて居りました神素盞鳴尊の娘梅子姫で御座います。これなる一人は宇豆姫と申し、元は鬼雲彦様の侍女、何卒御昵懇に願ひ奉りまする」

「何とまア年が寄つた事、如何にもお前さまは梅子姫様に間違ひは無い。意地の悪さうな顔をして居乍ら、ようまア、娘をここ迄助けて出世をさして下さいました。然し乍ら、餘り偉い出世で、此親もチツト位妬ましようなつた位で御座います。あまり出世をし過ぎて、母親の言ふ事も聞かぬ様になつて仕舞ひました。何卒貴女から一つ御意見遊ばして下さいませ。小絲姫が此様な我儘者になりますのも、温順な女になりますのも、指導者の感化力によりますのぢや。貴女から一つ淑やかになつて、親子夫婦の道をお悟り下さいまして、其上で娘に意見をして下さらば、偶會うた親の言ふ事を聞く従順な淑女になるでせう。それに何ぞや、人もあらうに、鼻赤の此様な不細工な性念の悪い男を、今日から龍頭王と仰ぎ奉るなぞと……ヘン……あまり呆れて物が言はれませぬワイなア」

と肩をプリンプリンと大きくシヤクツて、不平の持つて行き處を探し居たり。

「吾は今日より今迄の友彦に非ず。オーストラリヤの女王黄龍姫が夫、龍頭王で御座る。此國の權利は吾手に掌握致したれば、何事も此方の指圖に任せ、慎み敬ひ凡ての行動を執つたがよからう」

と初めて王者振りを發揮し、恥し相に鼻の先に手を當てて宣示したり。

「ヘン、友彦さま、措來なさいませ。何程龍宮島の權利を握つたと言つても、妾に對しては効力はありません。妾は黄龍姫の母ですよ。謂はばお前さまの義理の母ですよ。何程主權者になつたと言つても、親の言ふ事を背く譯には往きませぬ。まい。友彦さま、返答を聞きませうかい」

と嫉妬と輕侮とゴツチャ交ぜにして、鼻息荒く知らず識らずに立膝になり、友彦の面部を睨みつめて居る。一座白けきつた此場の「ま」を持たさむと、宇豆姫は蜈蚣姫の手を執り、

「さア、蜈蚣姫さま、此方に風景の佳い立派な居間が御座います。先づ悠りと御休息下さいませ。お供を致しませう」

「ハイハイ、有難う。若い御夫婦の側に皺苦茶婆アが何時迄も坐つて居るのは、お座が白けませう。御機嫌を損ねてもなりませぬから、それならば氣を利かして此處を一先づ立退きませう。これこれ友彦……オツト ドツコイ……龍頭王様、黄龍姫様、御夫婦仲よう天下の經綸を御相談遊ばせ。御邪魔になるといけませぬから、氣を利かして風景の佳い處で、お茶なつと一杯頂戴致しませう」
と言葉をシャクリ乍ら、疊觸り荒く身體をピンピンと左右に振りつつ、一間の内へ進み入る。

後に二人は、互に一別以來の經路を語り、身の失敗談を打明け、夕立雲の霽れたる如く再び舊の割なき仲となりにける。

折から吹き來る烈風に龍頭王の安坐せる高殿は吹き倒され、バチバチガタガタと木端微塵に打ち碎かれ、身は高處より材木の破片と共に岩の上に落ち込み、ハツト驚きの目を覺せば、……豈圖らむや、城外の木の茂みに、友彦は數多の下僕等に昇つぎ出され捨てられ乍ら疲れ果ててつい熟睡し、寢返り打つた途端に二三

閒下の岩の上へ墜落し、腰をしたたか打ち居たりける。

（大正一一・七・三 舊閨五・九 北村隆光録）

第一二章 暴風一過（七四二）

高姫は高山彦、黒姫に誘はれ、廣大なる宰相室に導かれ、懷舊談に時を移しける。

高姫様、ようまア、はるばると訪ねて来て下さいました。黄金の玉の所在は分りましたか。妾も此島に渡つて宰相の妻となつたのを幸ひに、國人を使役し、此廣大なる島の隅々まで探させましたなれど、玉らしいものは一つもありません。定めて貴女が是へお越し遊ばしたのは、妾に安心させてやらうと思召して、お出で下さつたらうと信じます」

誠まことに申まをし譯わけがありませぬ。あの玉たまの隠かくし人びとは、正まさしく言こと依より別わけ命のみことらしう御座ございま

す。黄金の玉ばかりか、妾の保管して居つた如意寶珠の玉を始め、紫の玉まです
つかり抜き取られ、妾はそれが爲め種々雑多の艱難苦勞を嘗め、玉の所在を探す
内、言依別の教主は我々を出し抜き、貴女の御存じの丹波村のお節や、空助の娘
のお初に、玉を何處かへ隠させて仕舞つたのですよ。それが爲めにお節、お初を
厳しく訊問すれども、三十萬年の未來でなければ申し上げぬと我を張り、大方此
島に隠して置いたのではあるまいかと、荒波を渡つて此處まで参りました。未だ
一つも玉の所在は妾は分らないのです」

黒姫は眉を逆立て、

「不届き至極の言依別にお節にお初、此恨みを晴らさいで措きませうや」
と拳を握り、思はず卓を三つ四つ叩いて雄健びをする。高山彦は傍より、
「何時までも玉々と云ふには及ばぬぢやないか。言依別命がどうなさらうと、神
界のお經綸に違ひあるまい。モウ玉の事は斷念して貰ひたい。黒姫の玉詮索には
私もモウウンザリしたよ。間がな隙がな寢言の端にまで、玉の事ばかり、【タマ】
つたものぢやない。それに又高姫さままでが、玉を盗られたとか、イヤもう、う

るさい事で【コリ】コリしますワイ」

「コレコレ高山さま、お前さまは何んと云ふ冷淡な事を仰有るのだい。三千世界の御寶、それを日の出神の生宮として、又龍宮の乙姫の生宮として手に入れずして、ドウして天下萬民が救へませうか。お前さま、時々利己主義を發揮するから困る。誰が何と云つても此玉の所在を白状させねば措くものか。……時に高姫さま、其お節にお初は今何處に居りますか」

「ハイ、たつた今……偉さうにニュージールランドの土人のお手車に乗せられ、此玄關先までやつて來ましたが、大方蜈蚣姫と一緒に奥殿に進み入り、黄龍姫様の前で自慢話でもやつて居りませうよ、本當に劫腹の立つ……ニュージールランドの玉の森で、大變な、妾に侮辱を加へました。元の小絲姫様を誘拐した友彦や、スマートフォンに田吾作の玉治別、それにお節にお初、いやモウサンザンの目に會はしよつた。如何に……神様の道ぢや、見直し聞直せ……と思つても、口惜し残念をこばりつめようと思つても、是がどうして耐らせませうかい。大勢の人の中に面を晒され、生れてからコンナ残念な目に會はされた事は御座いませぬワイな

ア
□

と耐へ耐へし溜涙、一度に堤防の崩れし如く聲を放つて泣き立てける。

「お節にお初、田吾作の奴、屹度當城内の何處かに居るに違ひない。サア是れから探し出して、締木に架けても白状させねば措くものか。……ヤア家來共、最前

参りし男女の一同召捕つて此場へ連れ來れよ」

との黒姫の下知に隣室に控へ居たる七八人の下男は、

「ハイ」

と答へて捻鉢巻、襷十字に綾取り、突棒、刺股、手槍なぞを提げて、城内隈なく搜索し始めたり。されど裏山の森林に手早く姿を隠したる玉能姫其他一同は山又山を越えて、遙か向ふの山頂に避難し時の移るを待ち居たりける。

かかる所へ侍女の一人出で來り、

「宰相様、其他の御客様に、女王様がお目にかかりたいと仰せられます。どうぞ直様お越し下されませ、御案内致しませう」

と先に立つ。ブランジー、クロンバーの後に従いて高姫は、首を頻りに振りなが

ら、半ば神憑の態にて奥深く進みつつ、やうやう黄龍姫の居間に通されける。

高山彦は黄龍姫に向ひ兩手をつき、

「今日は御母上に御對面遊ばされ、吾々も共に大慶至極に存じます。……蜈蚣姫様、ようこそ、御入來下さいました。私は當國の宰相を承はる高山彦と申す者、

ブランジとは假の名、又此クロンバーと申すは私の妻、本名は黒姫と申すもの、何卒御見知り置かれまして御引立の段、偏に願ひ奉りまする」

「コレハコレハ高山彦様、黒姫様とやら、豫て高姫さまより承はつて居りました、何分宜しう御願ひ致します。……コレ高姫さま、貴女も随分意地悪いお方で御座いましたなア、ニユージールの玉の森にては貴女も随分お困りでしたやうですワ」

「蜈蚣姫さま、お前さまの娘御が、此國の女王になつたと思つて俄に偉い御見識、何程偉い女王様でも、世界統一の太柱、三千世界の御寶、日の出神の生宮に比ぶれば、龍宮の一つ島位手に握つたとて、アンマリ立派なお手柄でも御座いますまい。三千世界に二人とない世の立替立直しの基礎の身魂は、……ヘン此高姫で御

座ざいますワイ。盲めくら千人せんの世よの中なか、誠まことの者ものは一ちよつと寸すんやそつとに分わかりますまい。此この黒くろ姫ひめさまだとして、黄わうりようひめ龍りゆう姫ひめの幕まく下かに神しんめう妙めうに仕つかへて御ご座ざるが、實じつの素すじやう性せうを申まをせば、驚おどろく勿なれ……龍りゆう宮ぐうの乙おとひめ姫ひめ様さまの生いき宮みやで御ご座ざるぞや。高たか山やま彦ひこは夫を顔つがをして偉えらさうにして御ご座ざるが、實じつ際さいの身み魂たまを云いへば、青せい雲うん山ざんに棲すまひを致いたす大だい天てん狗くの身み魂たま、何なんと云いつても高たか姫ひめ、黒くろ姫ひめの二ふた人たりが居をらねば、神しん國こく成じやう就じゆは……へん致いたしませぬワイ。人じん民みんに對たいして一ひとつ島しまの女ぢよ王わうさまでも、天てん地ち根こつ本ぼんの神かみの生いき宮みや、神しん界がいでは是これ位くら立り派つぱな權けん威ゐのある身み魂たまはありますまい。……黄わうりようひめ龍りゆう姫ひめ殿どの、暫しばらく日ひの出で神かみに席せきをお譲ゆづりめされ』

とツンツンし乍ながら、上じやう座ざにドんと坐すわり見みせたり。

何なんとマア我がの強つよい執しづと拗とい身み魂たまだらう。假たとへ令ひ日での出かみ神かみでも龍りゆう宮ぐうの乙おとひめ姫ひめでも、此この城じやう内ないは黄わうりようひめ龍りゆう姫ひめの權けん利り、上じやう座ざに坐すわるのが御お氣きに召めさねば、トツトと歸かへつて貰もらひませう』

別べつに妾わたしは女ぢよ王わうにならうと云いふのではない。女ぢよ王わうさまの坐すわつて御ご座ざる尻しりの下したが一いつ遍ぺん調しやうべて見みたいのだ』

「オホ、々々、疑うたがひの深ふかいお方かただ事こと、女ぢよ王わうさまの坐すわつて御ご座ざる床ゆか下したに、三みつつの玉たまでも隠かくしてある様やうに疑うたがうていらつしやるのだな』

「疑ふも疑はぬもありますかい。日の出神がチヤンと天眼通で調べてあるのだ、お前さまが意地張れば意地張るほど、此方は疑はざるを得ませぬ。黒姫さまも好い頓馬だなア。何の爲めに暫く宰相神に化けて御座つたのだな。サ、女王さま、一寸立つて下さい」

「苟くも一國の女王たるもの、假令日の出神の生宮の言葉と雖も、吾意に反して一分も動く事は出来ませぬぞ」

高姫は横手を拍ちニヤリと笑ひ、

「ソレソレ矢張隠し終ふせまますまいがな。此方が現さぬ内に素直に白状なされ。さうすれば永遠無窮に一つ島の女王として、驍名を天下に輝かす事が出来る。成る事なら此儘にして蓋を開けずに助けて遣りたいのが、高姫の胸一杯だ。此大慈悲心を無にして、何處迄も隠すのなら隠してよからう。蜈蚣姫と親子心を合せ、聖地の寶を隠さうと思つても、隠し終ふせるものでは御座いませぬぞや」

黄龍姫は稍不機嫌の態にて無言の儘此場をツツと立ち、風景よき次の間に蜈蚣姫を伴ひ進み入りけり。

「オホ、トウトウ尻こそばゆなつて座を立つて、お脱け遊ばしたワイ。…高山彦さま、黒姫さま、高姫の御威勢には敵ひますまい。サアサ尻の下の板をめぐつて調べて御覽、お前さまの目では實物を見なければ分るまい。妾はチャンと天眼通で床板を透して知つて居るのだ。…ヤレヤレ愈大願成就の時到れりだ。アーア惟神靈幸倍坐世惟神靈幸倍坐世」
と雙手を合せ、まだ見ぬ先から手に入つたやうな心持に、感謝の祝詞を頻りに奏上する。

「高姫さま、此床下には決してソナ物はありませぬよ。此蓋を開けるが最後、蜿蜒たる黄龍が潜んで居りますから、毒氣に當てられては大變な目に逢はねばなりませんまい。開けるのなら、お前さま手づから開けて下さい」
高姫は…「甘い事を云ふ、高山彦さまもお人がよいから、黄龍姫に誤魔化されて居るワイ」…と云ふ様な顔付をし乍ら、床板を一枚グツとめくり、床下の深い穴を覗き込み「アツ」と云つたきり、蟹の様な泡を吹き目をまはし打ち倒れけり。

黒姫、高山彦の兩人は高姫の身體を引抱へ、吾居間に擔ぎ込み水よ薬よと介抱し、一生懸命に祝詞を奏上したるに、漸くにして高姫は息を吹き返し、
「アア、日の出神も全く疑ひが晴れました。かうなる以上は黄龍姫に對し恥かしくて、半時の間も居られはしない。高山彦御夫婦の御所存は如何に、妾と一緒にお節の所在を探し、今度は千騎一騎に調べて見ようぢやないか」

高山彦は氣のりのせぬ風にて、

「アマリ急ぐに及びませぬワイ」

「コレ高山彦さま、何といふ冷淡な事を仰有る。天下國家の爲にどうしても彼の玉を手に入れねばなりませんまい」

「黒姫さま、一つ覺悟を遊ばさねばなりませんぞ。日の出神が今申し付ける」

「龍宮の乙姫の生宮、確に承知仕りました」

かかる所へ七八人の男ドヤドヤと入り來り、

「宰相様に申し上げます。城内隈なく探しましたが、宣傳使らしき者は一人も居りませぬから、屹度裏門から逃げ去つたに相違ありませんまい。一足なりと逃げ延

びぬ内に、サア皆さま搜索に参りませう」

と促す。三人はツト此の城を立出で、傍の山より峰傳ひに、玉能姫、初稚姫、玉治別一行の搜索に立向ひける。

高山彦も終に顯要の地位を棄てて高姫、黒姫と共に「タカ」の港に現はれ、一隻の船に身を委せ、浪のまにまに玉能姫一行の後を追はむと漕ぎ出したり。

玉能姫、初稚姫、玉治別其他の一行は、遙かの山上より靈眼を以て三人が此島を後に歸り行くのを眺め、ヤツト胸撫で下ろし、再び城内に悠々として歸り來たりぬ。初稚姫一行は、蜈蚣姫のアンボイナ島に於ける危難を救ふ可く船を與へたる其好意を黄龍姫より感謝され、山海の珍味を響應され、愈茲に三五教を確立し、黄龍姫を女王兼全島の教主と定め、各自に手分けをなし、梅子姫、宇豆姫諸共に、全島隈なくあらゆる生靈に三五の大道を宣傳し、自轉倒島の聖地向つて凱旋する事となりける。

(大正一一・七・三 舊閏五・九 谷村眞友録)

第四篇 蠻地宣傳

第一三章 治安内教〔七四三〕

大海原に漂へる

黄金花咲く龍宮の

一つの島に上陸し

嚴の都の城門を

潜りて高姫蜈蚣姫

黄龍姫に面會し

梅子の姫や宇豆姫の

高き功績に舌を巻き

天狗の鼻の高姫は

高山彦や黒姫と

謀し合せて玉能姫

初稚姫や玉治の

別命は海原を

遠く渡りて自轉倒の

島に歸りしものとなし

俄に船を操りつ

東を指して出でて行く
玉治別や玉能姫

初稚姫の一行は
巖の都の城門を

後に眺めて龍王山
峰を傳うてシトシトと

谷を飛び越え岩間をくぐり
ネルソン山の山頂に

汗をタラタラ流しつつ
炎暑と戦ひやうやうに

息繼ぎあへず登り行く
折柄吹き来る涼風に

拂ひ落した玉の汗
巖の都を顧みて

山又山に連なりし
雄大無限の絶景を

心行くまでも觀賞し
各祝詞を奏上し

天津御神や國津神
國魂神の大前に

拍手の聲も勇ましく
龍宮島の宣傳を

無事に濟ませ玉へよと
祈る折しも山腹より

俄に湧き来る濃雲に
一行十人忽ちに

暗に包まれ足許も
碌々見えなりにける

斯^かかる所^{ところ}へ黒雲^{くろくも}を
押し分け^{おしわけ}来る^{きた}大蛇^{をろち}の群^{むれ}

焰^{ほのほ}の舌^{した}を吐^はき乍^{なが}ら
一行^{いっかう}目蒐^{めが}けて攻^せめ来る^{きた}

スマートボールは驚^{おどろ}いて
闇^{やみ}の中^{なか}をば驅^{かけ}めぐり

ネルソン山の頂上^{ちやうじやう}より
足踏^{あしふ}みはづし萬丈^{ばんぢやう}の

谷間^{たにま}に忽^{たちま}ち顛落^{てんらく}し
續^{つづ}いて貫州武公^{くわんしうたけこう}や

久助^{きうすけ}お民^{たみ}も各自^{めいめい}に
行方^{ゆくへ}も知^しれずなりにけり

玉治^{たまはる}別^{わけ}や玉能^{たまのひめ}姫^{ひめ}
初稚^{はつわかひめ}姫^{ひめ}は手^てをつなぎ

暗祈^{あんき}黙^{もく}禱^{たう}の折柄^{をりから}に
忽^{たちま}ち吹^ふき來^くる大嵐^{おほあらし}

本島^{ほんたう}一の高山^{かうざん}の
尾^をの上^へを渡^{わた}る荒風^{あらかぜ}は

ひとしほつよ三人^{さんにん}は
木^この葉^はの如^{ごと}く中空^{ちうくう}に

卷^まきあげられて悲^{かな}しくも
各^{おのおの}行方^{ゆくへ}は白雲^{しらくも}の

包^{つつ}む谷間^{たにま}に落^おちにけり
神^{かみ}が表^{おもて}に現^{あら}はれて

善^{ぜん}と惡^{あく}とを立別^{たてわ}ける
此^{この}世^よを造^{つく}りし神直日^{かむなほひ}

心^{こころ}も廣^{ひろ}き大直日^{おほなほひ}
唯^{ただ}何事^{なにごと}も人^{ひと}の世^よは

直日に見直し聞直し
世の過ちを宣り直す

三五教の皇神の
教に任せし一行は

唯何事も惟神
御靈幸はひましませと

心の中に祈りつつ
底ひも知れぬ谷底に

生命からがら墜落し
谷の木靈を響かせつ

天津祝詞をスラスラと
奏上するこそ健氣なれ。

巖の城より昇出され
谷間の岩上に墜落し

腰を打ちたる友彦も
神の守りの著く

ハツと心を取直し
あたりを見れば人影の

無きを幸ひ森林の
草を分けつつやうやうに

木の實を喰ひ谷水に
喉を潤しネルソンの

山の尾の上に着きにける 又もや吹き來る烈風に
友彦の身は煽られて 高山數多飛び越えつ
ジャンナの谷間に墜落し 前後不覺になりける
あゝ惟神々々 御靈幸はひましますか
九死一生の友彦も ジャンナイ教の信徒に
擔ぎこまれて照姫の 教の館に着きにける。

此島はネルソン山の山脈を以て東西に區劃され、東は黃龍姫が三五教を宣布し、其勢力範圍となつて居た。されどネルソン山以西は住民も少く、猛獸、毒蛇、大蛇の群無數に棲息して、東半部の人民は此山脈を西に越えた者はなかつた。然るにネルソン山以西にも相當に人類棲息して秘密郷の如くなつて居た。極めて獍猛勇敢なる人種にして、男子は身の丈八九尺、女子と雖も七八尺を下る者はない、巨人の棲息地である。男子も女子も残らず顔面に文身をなし、一見して男女の區別判じ難き位である。木の葉を編みて腰の周圍を蔽ひ、其他全部赤裸にして、赤

銅どうの如ごとき皮膚ひふを有いうし居をれり。

色いろの黒くろい顔かほに青あをい文身いれずみをなし居ある事こととて、實じつに何なんとも云いへぬ恐おそろしき容貌ようぼう計ばかりなりき。猛獸まうじう、大蛇だいじやの怖おそれて近寄ちかよらざる様やうとの注意ちゆういより、斯かくの如ごとく文身いれずみをなしあるなり。故ゆゑに此地このちに美男子びだんしと云いへば最もつとも犼だうまう猛醜しうあくなる面貌めんぼうの持主もちぬしにして、酋長しうぢやうたるべき者ものは一見いつけんして鬼おにの如ごとくなり。頭部とうぶには諸獸しよじうの角つのを付着ふちやくし、手てには石造いしづくりの槍やりを携たづねへ、旅行りよかうする時ときは少すくなくとも五ご六ろく人の同つれ伴なが無なければ、一歩いつぽも外そとへ出でないと云いふ風習ふうしゆである。住宅ぢゆうたくは主おもに山腹さんぶくに穴あなを穿うがち、芭蕉ばせうの如ごとき大だいなる木この葉はを敷しき詰つめて褥しとねとなし、食物しよくもつは木この實み、山やまの芋いも、松まつの實み等を以もつて常食じやうしよくとなしあるなり。山間さんかんの地ちは魚類ぎよるゐは實じつに珍味ちんみにして、一生いっしやうの間に一いち二に回わい口くちにするを得えば、實じつに豪奢がうしゃの生活せいかわつと言いはるる位くらゐなり。谷川たにがはに上のほり來きたるミースと云いふ五ご寸すん許ばかりの魚さかな、時ときあつて捕獲ほくわくするのみにして、魚類ぎよるゐの姿すがたを見る事ことは甚はなはだ稀まれなり。兔うさぎ、山犬やまいぬ、山猫やまねこなどを捕ほく獲わくし、之これを最上さいじやうの珍味ちんみとし居あるなり。

されどジャンナイ教けうの教理けうりは、動物どうぶつの肉にくを食くふ事ことを嚴禁げんきんしあるを以もつて、若もし此この禁きんを破やぶる者ものは、焦熱地獄せうねつぢごくに陷おちるとの信仰しんかうを抱いだき、容易よういに食くらふ事ことを忌いみ居をれり。一いち

度肉食を犯せし者は、其群より放逐され、谷川の畔に追ひやらるる事となれり。
此肉食を犯し追ひ退はれたる者は、ネルソン山の西麓の廣き谷間に集まり來り、
神に罪を謝する爲に酋長の娘照姫を教主と仰ぎ、ジャンナイ教を樹て、醜穢の罪
人計りに對し、謝罪の道を教へ居たりける。肉食せざる者は何れも山の中腹以上
に住居を構へ、豊富なる木の實を常食となし、安樂なる月日を送りゐたり。谷底
には猛獸、大蛇、毒蛇多く集まり、實に危険極まる濕地なりけり。
此谷底に照姫を教主とせるジャンナイ教の本山は建てられ、數多の信徒は朝夕
に祈願を凝らしつつあつた。ジャンナイ教の信條は……我等はアールの神の禁
を犯せし罪人なれば、死後は必ず根底の國の苦みを受くる者なれば、神に祈りて
罪を謝し、來世の苦を逃るべきもの……と固く信じてゐたるなり。さうして……
頓て鼻頭の赤き神、此地に降臨する事あらむ。是れ我等の救世主にして、天より
我等の信仰を憐れみ天降し玉ふものなり……と、照姫の教を固く信じ、時の來る
を待ちつつありける。さうして鼻赤き生神はオーストラリア全島を支配し、靈肉
共に、我等を救ふ者との信念を保持して、救世主の降るを早天の雲霓を望むが如

く待ち居たりしなり。

斯かる所へネルソン山上のレコード破りの強風に吹きまくられ、高山の頂きを數多越えて今此ジャンナの廣き谷間に墜落したれば、怪しき人物の降り來れるものかなと、折から來合せたる十數人の男女は、友彦の人事不省となれる肉體を藤蔓を以て編みたる寢臺に載せ、ジャンナイ教の本山に擔ぎ込みぬ。數多の信徒は物珍しげに集り來り、水を飲ませ、撫でさすり、手を曲げ、足を動かさしなどして、やうやうに蘇生せしめたり。

友彦は此時は既に失心し、血液循環も殆ど休止し、全身蒼白色に變り居たり。照姫の一の弟子と聞えたるチーチャールは、勝れて大の男にして、口は頬の半まで引裂け、鼻は大きく、白目勝の大なる眼の所有者なりき。教主照姫は少しの文身もなさず、比較的色彩白く、稍赤味を帯びたる美人なりき。ジャンナイ教の教主たる者は、天然自然の肉體を染めざるを以て教の本旨となし、數多の信者より特別の待遇を受け、尊敬の的とせられ居たるなり。

友彦は漸くにして正氣づき、四邊を見れば、何とも知れぬ恐ろしき、男女區別

も分らぬ人種の、十重二十重に我周囲を取巻きみるに驚き、如何はせむと首を傾げ思案に暮れ居たり。顔色は漸く元に復し、身體一面に血色よくなると共に、鼻の先はいやが上にも赤くなり來たりぬ。

チーチャーボールは大勢に向ひ、

「オーレンス、サーチャライズ」

と云ひける。此意味は「吾々の救世主なり」と云ふ意味なり。一同は腰を屈め、両手を合せ、友彦に向つてしきりに何事か口々に叫び乍ら、落涙しめる。チーチャーボールは、

「オーレンス、サーチャライズ」

と繰返し繰返し言ふ。友彦は合點往かねども、此土人等は決して吾を虐待するものにあらず、珍らしげに吾を天降人種と誤信し、感涙に咽ぶものならむと思ひ、日頃の山師氣を發揮し、右の手を握り人差指を立て、天を指して、

「ウツポツポー、ウツポツポー」

と二聲叫びてみたり。チーチャーボールを初め一同は其聲に應じて、

「ウツポツポー、ウツポツポー、オーレンス、サーチライス」

と聲を揃へて叫び出しぬ。其聲は谷の木靈に響き、向ふ側の谷にも山彦が同じ様に言葉を應酬する。土人は又もや聲する方に向つて前の言葉を繰返しける。

友彦は稍安心したるが、此ジャンナの郷の言語が通じないに聊か當惑を感じたり。されど頓智のよい友彦は……何、却て天降人種は地上の言葉に通ぜざるが一層尊貴の觀念を與ふるならむと決心し、

「アオウエイ、カコクケキ、サソスセシ、……」

と五十音を繰返し繰返し唱へ出したり。老若男女一同は友彦の言葉に従いて「アオウエイ」と異口同音に唱へ出す。友彦は漸く空腹を感じ、

「我れに食を與へよ」

と云ふ。されど郷人の耳には一人として了解するものなく、呆然として友彦の顔を心配げに打眺めてあたり。友彦は自分の口を右の手で押へてみるに、一同は同じく自分の手で各自の口を抑へる。友彦は、

「何か食ふ物があれば持つて来いッ」

と云ふ。又一同は、

「何か食ふ物があれば持つて来いッ」

と妙な訛で叫ぶ。

此時大勢の聲の尋常ならぬに不審を起し、二三の侍女を伴ひ現はれ来りしは、ジャンナイ教主テールス姫（照姫）なりき。友彦の顔を見るより忽ち堪へ切れぬ様な笑を含み、友彦の手を握りぬ。友彦は鬼の様な人間の群の中にも、斯かる麗はしき女性のあるかと驚き乍ら、彼女がなす儘に任せ居たり。テールス姫は侍女に何事か命令したるに、三人の侍女は左右の手を執り、一人は腰を押し、テールス姫は先に立ち、穴居民族に似ず、蔦葛を以て縛りつけたる木造の廣き家に導きける。友彦は意氣揚々として、天下の色男氣取りになりて、奥の間深く導かれ行く。

奥の間には立派な齋殿が設けられてあり、名も知れぬ麗はしき果物、小山の如く積み重ね供へられありぬ。テールス姫は其中の紅色の果物を一つ取出し、侍女に命じ、石の包丁を以て二つに割らしめ、さうして一つは自分が食ひ、一つは友

彦ひこに食くへと、仕方しかたをして見みせたり。友彦ともひこは喜よろこび空腹すきばらの事こととて、かぶり付つく様やうに瞬またたく間うちに平たひらげにける。これはコーズと云いふ果物くだものの實みで、此郷このさとに唯ただ一本いっほんより無なき大切たいせつなる樹きの果物くだものなりき。二年目にねんめ或あるは三年目さんねんめに僅わづかに一ひとつ二ふたつ實みのの位くらゐのものにして、此このコーズの實みの稔みのりたる年としは必かならず此郷このさとに芽出度めでたき事ことありと傳つたへられ居ゐたり。そしてテールス姫ひめが二ふたつに割わつて友彦ともひこに食くはしたるは、要えうするに結けつ婚こんの儀ぎ式しきなりけり。數多あまたの男だんぢよ女よは雪崩なだれの如ごとく追々おひおひ此家このやに集あつまり來きたり「ウローウロー」と嬉うれしさうに叫さけび、手てを拍うち躍をどり狂くるひゐる。是これは救世主きうせいしゆの降臨かうりんを祝しゆくしテールス姫ひめの結けつ婚こんを喜よろこぶ聲こゑなりけり。

テールス姫ひめは救世主きうせいしゆの降臨かうりんと夫婦結ふうふけつ婚こんの盛せい典てんを祝しゆくする爲ために立たつて歌うたひ初はじめたり。その歌うた、

☐ オーレンス、サーチライス ウツポツポ

テールスナイス、テーナイス テーリスネース、テーネース

ウツパツパ、ウツパツパ パークパーク、ホースホース、エーリンス

カーチライト、トーマース　タリヤタラーリヤ、トータラリ
タラリータラリー、リートリートリー、ユーカ　シンジャン、ジャンジャ、
ベース

ヘース、ヘースク、ツーターリンス　イーリクイーリク、イーエンス
ジャイロパリスト　ポーポー、パリスク
ターウーインス、エーリツクチャーリンスク、パーパー」

と唄ひける。友彦は何の事だか合點行かず、されど決して悪い事ではない、祝の
言葉だと心に思ひぬ。此意味を總括して言へば、

☐ 天來の救世主現はれ玉ひ、人間としても實に立派な英雄豪傑なり。吾れは此郷
の信仰の中心人物、さうして實に女として恥かしからぬ准救世主である。汝が降
り來るを首を長くして神に祈り待つて居りました。最早此谷間の郷は如何なる大
蛇が來ても猛獸が來ても、如何なる惡魔でも、決して恐るるに足りない。私は立
派な夫を持ち此上の喜びはない。暗夜に燈火を點じたやうな心持になつて來た。

今日の老若男女は誰彼も貴方の御降臨を見て、手の舞ひ足の踏む所を知らず喜んでゐます。どうぞ千年も万年も此郷に御鎮まり下さいまして、末永く夫婦の契を結び、此郷の救ひ主となつて人民を守つて下さい。ア、有難い、嬉しい。天の岩戸が開けた様な……否全く岩戸が開けました。我々一同は是より安心して月日を送ります。お前の鼻の頭の赤いのが日の神の國から御降りなされた證據だ。どうぞ末永く妾を初め一同の者を可愛がつて下さい」

と云ふ意味の感謝の辭なりけり。友彦は返答せずには居られないと、負けぬ氣腰になりて……天降人種氣取りで分らぬ事を言つてやる方が却て有難がるだらう、土人の言語も知らずに、愁ひに眞似をして却て輕蔑さるるも不利益だ……と心に思ひ定め、さも應揚な態度で、

□ …… アーメンス、ヨーリンス フーララリンス、サーチライス
スーツクスーツク、ダーインコーウンス カーブーランス、ネーギーネーブー
カー

ナーハーネース、エンモース

水菜に嫁菜に蒲公英セーリンス

ナツナ、ヤーマンス、ノンインモー

ドンジョー、ウナーギー、フーナモロ

コ、

コーイ、ナマヅ、タコドービンヒツサゲタ、

ナイス、ネース、ローマンス、

ホートーホートー、ローレンス

ピーツク、ピーツク、ヒーバーリース

と唄ひ濟まし込み居たり。一同は何の事だか譯が分らぬ。されど天より降りし救

世主の言葉と有難がり、隨喜の涙を零し居たりける。

此時又もや十數人の土人に擔がれて、此場へ來たりしは玉治別なりき。玉治別

は友彦が言葉を半分ばかり聞いて可笑しさに吹き出し「プーツプーツ」と唾を飛

ばしける。一同は同じく「プーツプーツ」と言つて友彦目蒐けて唾液を吹つ掛

る。友彦は唾液の夕立に會うた様になつて、

誰かと思へば玉治別さま、あまりぢやないか、馬鹿にしなさるな

オイ友彦さま、随分好遇なものだなア。コンナ ナイスを女房に持ち、無鳥郷

の蝙蝠で暮して居れば、マア無事だらうよ」

「玉治別さま、チツト氣を利かして下さいな。折角この大將が此赤い鼻に惚れて、コンナ面白い夢を見て居るのに、しようもない事を言うて下さると、サツパリ化けが現はれるぢやないか」

「ナア二、言語の通じない所だ。何を言つたつて構ふものか。わしも一つ言靈をやつて見ようかな」

「やるのも宜しいが、なまかぢりに此郷の言葉を使つちや可くませぬよ」

「ソナナこたア玉さま百も承知だ。笑つちや可くないよ」

「ナニ笑ふものかい、やつて見玉へ。わしは最早此郷の御大將だから、あまり心安さうに言つて呉れては困るよ。第一お前の態度から直して、わしの家來の様な風をして見せて呉れよ」

玉治別は、

「ヨシ面白い」

と言ひ乍ら言語の通ぜざるを幸ひ、

「ジャンナの郷人よ、玉治別が今申す事をよつく聞けよ。此友彦と云ふ男はメソポタミヤの顯恩郷に於て、バラモン教の副棟梁鬼熊別が娘小絲姫（十五才）を巧言を以てチヨロまかし……」

「コレコレ玉さま、あまりぢやないか」

「何でも好いぢやないか。分らぬ事だから、マア黙つて聞かうよ……それから錫蘭の島へ隨德寺をきめ込み、一年ばかり暮して居たが、赤鼻の出齒の鰐口に、流石の小絲姫も愛想をつかし、黒ン坊のチャンキー、モンキーを雇ひ、船に乗つて一つ島まで逃げて來た。……話が元へ戻つて友彦と云ふ奴、浪速の里に於て三百兩の詐欺を致し、次に淡路の洲本の酋長東助が不在を窺ひ、女房の前に偽神憑を致し、陰謀忽ち露見して雪隠の穴より逃げ出し……」

「コラコラ好い加減に止めて呉れぬかい。あまりぢやないか」

「ナア二、構ふ事があるものか。あれを見よ。有難がつて涙を流して聞いているぢやないか。……マダマダ奥はありますけれど、先づ今晚は是れにて止めをき、

又明晩ゆるるとお聞きに達します。皆さま、啞辨の吾々が此物語、よくも

神妙にお聞き下さいました。併し乍ら用心なさらぬと、此友彦は險難ですよ。……
： テールス姫さま、此奴は女子惚けの後家盗人、グツグツしてると、そこらの侍
女を皆チヨロまかし、あなたに蛸の揚壺を喰はす事は火を睹るより明かですよ。

アツハ、ハ、ハ

と大口を開けて笑ひ轉ける。友彦は仕方がなしに自分もワザと笑ひゐる。チーチ
ヤーポールは此場にヌツと現はれ……「神様が大幅な御機嫌だ。併し今お出で
になつた神は餘程立派な方だが、併し家來に違ない。其證據には鼻の先がチツト
も赤くない。さうして餘り口が小さすぎる……と稍下目に見下し、友彦と同じ
座に着いて居る玉治別の手を取つて、一段下の席に導き、

「ウツポツポ　ウツポツポ、サーチライス、シーリス　シーリス」
と合掌する。他の者も一同に、

「シーリス　シーリス」

と云ふ。これは「救世主のお脇立……御家來」と云ふ意味なり。玉治別は其意を
悟り、

「オイ友、馬鹿にしよるな。俺を眷屬だと言ひよつて、貴様それで大將面して居つて気分が良いのか」

「何だか奥歯に物がこまつた様な氣もするし、尻に糞を挟んどる様な心持もするのだ、マアここはお前も辛抱して家來になつて呉れ」

玉治別は嘲弄半分に、

「オイ友、其方は俺の一段下につけ。貴様は天來の救世主と、鼻の赤いお蔭で信ぜられてるのだから、俺が上へ上つた處で貴様が下だとは思ひはせまい。さうしたら、貴様の位は落ちず、俺はモ一つ上の神様と信じられて、面白い芝居が出来るから、一遍俺の方を向いて拜みて見よ」

「さうだと云つて、まさかテールス姫の前で、ソナ不態の事が出来るものか。そこはチツト忍耐して呉れぬと困るよ」

「それならそれでよし、俺には考へがある。貴様の舊惡を此郷の言葉で素破抜いてやらうか」

「ヘン、偉さうに言ふない。此郷の言葉がさう急に分るものか。何なと言へ、分

りつこないワ」

「ヨシ、俺は今神様から言葉を習つたのだ……オーレンス、サーチライス、ウツポツポ、ウツポツポ、イーエス、イーエス、エツポツポ、エツポツポ、エツパツパ……」

友彦はあわてて、

「コラコラ、しようもない事を言うて呉れない。何時の間に覚えよつたのだらう。モウ此上は治安妨害だから、辨士中止を命じます」

「とうとう弱りよつたなア。サア俺に合掌するのだ。下座に坐れ」

友彦はモチモチし乍ら、尻に糞を挟んだ様な調子で、青い顔して佇み居る。テールス姫は何と思つたか、友彦の手を取り、柴で造つた押戸を開け、奥の間へ姿を隠しける。

「エー到頭養子になりよつたなア。淡路島で養子になり損つて面を曝されよつたが、熱心と云ふものは偉いものだナア。到頭鼻赤のお蔭でコンナ所へ來依つて、怪態の悪い、テールス姫と手に手を取つて濟ましこみて這入りよつた。併し乍ら

彼奴も可憐相だ。モウこれぎりで嘲弄ふ事は止めてやらう』

チーチャーボールは玉治別の前に来て、

『オーレンス、サーチャイス、シーリス、シーリス』

と云ひ乍ら、手を取つて次の間に導き、果物の酒を注いで玉治別に進めける。玉治別は右の手を高く差し上げ、

『アマアマ』

と云ひつつ太陽を指し示したり。ここは次の第三番目の間で、屋根は無く、唯石盤の様な石が奇麗に敷き詰めてある露天の座敷なり。鬱蒼たる樹木が天然の屋根をなし居たり。チーチャーボールは此樹上に登れと命じたと早合点し、猿の如く樹上に駆け登り、テールス姫が寵愛の取つときのコースの實の二つ計り残つて居るのを、一つむしり懐に捻こみたり。懐と云つても、粗い粗い蔓で編みし形ばかりの着物なり。コースは着物の目を抜けてバサリと落ちたる途端に、玉治別の面部にポカンと當りぬ。玉治別は「アツ」と叫んで俯向けに倒れ、鼻を健か打ち、涙をこぼし氣張り居る。チーチャーボールは驚いて樹上を下り来り、玉治別の前

に犬突這となりて無禮を拜謝するものの如く、

「ワーク ワーク、ユーリンス ユーリンス」

と泣聲になり合掌し居たり。暫くして玉治別は顔をあげたるに、鼻は少しく腫あがり、友彦以上の赤鼻と急變したり。チーチャーボールは驚いて飛びあがり、

「ウツポツポ ウツポツポ、オーレンス、サーチャイス、アーリンス アーリンス」

と叫び出しぬ。其意味は、

「今テールス姫の夫となつた救世主より一層立派な救世主だ。縁談を結ぶ時に用ふる果實が當つて、斯の如き立派な鼻になつたのは、全く神様の思召であらう」
と無理無體に玉治別の手を取つてテールス姫の居間へ迎へ入れたり。見れば友彦は立派なる冠を着せられ、蔓で編みたる衣服を着流し、木の葉の禪を締め、傲然と構へ居たり。側にテールス姫はジャンナイ教の神文を、

「タータータラリ、タータラリ、トータラリ、リートリートリートリートータラリ」と唱へ居る。神文が終るを待つて、チーチャーボールはテールス姫に向ひ、

「オーレンス、サーチャリス、アーリンス、アーリンス」と言葉をかけてたり。此聲にテールス姫は後振り向き、玉治別の赤い鼻を見て打驚き……「ア、今日は何たる立派なる神様がお出で遊ばす日だらう。それにしても後からお降りになった神様の方が餘程立派だワ。同じ夫に持つのなら立派な方を持たなくては、神様に申譯がない。少しく口は小さいなり、身長は低いけれど、何とはなしに蟲の好く御方だ……と穴のあく程、玉治別の顔に見惚れ、心の中にさげ比べをなし居たりけり。

「オイ友、どうだ、俺の鼻を見い、貴様は餘程此處へ來て鼻高になりよつたが、俺は真正銘の鼻赤だ。貴様の赤さは……實の所を云へば……安物の染料で染めた様に大變色が薄くなつて居るぞ。俺の鼻はまるで赤林檎の肌の様だ。サア鼻比べをしようかい。赤い「ハナ」には目が付くと云つて、子供でさへも喜ぶんだぞ。俺の鼻の色が百點とすれば、貴様の鼻はマア四十點スウスウだ。今にテールス姫さまが審神をして下さるから、マア楽しんで居たがよからう。キット團扇は俺の方へあがるこたア、請合の西瓜だ。中までマツカイケだ……たーかい、やーまかー

ら、谷底見ればなア、うーりやなあすびイイの、「ハナ」、あかいな、アラどん
どんどん、コラどんどんどん、…… どんどんでテールス姫の花婿さまは、玉治別
に九分九厘定つて居るワ。それだから、此鬼の様な立派な面をして、チーチャー
ポールさんとやらが貴様が結婚したにも拘はらず、俺を導いて此室へ連れて来て呉
れたのだ。エツヘン」
と鼻の先に握拳を二つ重ねて、キリキリツと二三遍廻つて見せたりける。
「洒落も良い加減にして置かぬかい。何程美しうても、塗つた鼻は直剥げて了ふ
ぞ。此暑い國に汗を一二度かいて見よ。忽ち化が現はれるワ。俺の鼻は生れつき、
地の底から生えぬきの赤鼻だ。ヘン、自轉倒島や其他では…… 鼻赤々々…… と馬
鹿にしられて、あちらの女にも此方の女にも鼻「あか」されて来たが、どんなも
のだい。貴様の鼻はたつた今化が露はれて、お拂ひ箱に會ふのだ」
「馬鹿言へ、ナンボ拭いても拭いても、落ちぬのだ。俺は俄に天の神様が御降臨
遊ばして御憑りなさつた、コノハナ赤や姫の御化身だぞ。貴様があまり詐欺や泥
棒して、行く所が無くなり、又斯様な所で温情しい土人をチヨ口まかさうと致す

から、天の大神様が、可憐相だから、本當のコノ「ハナ」赤や姫は玉治別だと云ふ事を證明する爲に、此通り赤くして下さつたのだ。嘘と思ふなら貴様來て一寸拭いて見よ。中まで眞赤けだ」

「ソナ眞赤な嘘を言ふものぢやない」

玉治別は又ツと腮を突出し、舌を出し、

「ア、さうでオ「マツカ」、【ハナ】ハナ以て赤恥をかし濟みませぬア」

テールス姫はツト立ち、玉治別の左の手を自分の右手でグツと握り、二三遍揺

つた上今度は手を離し左の手で玉治別の右の手を握り、右の頬を玉治別の右の頬

に擦りつけ、戀慕の情を十二分に示した。充分尊敬の極、愛慕の極に達した時は、

相手の左の手を自分の右の手に握るのが方式である。さうして頬をすりつけるの

は、最も氣に入つたと云ふ表證であつた。友彦は劫を煮やし、ツカツカと此場に

進み寄り、テールス姫の右の手を鷲掴みにグツと握り、二つ三つ横にしやくつた。

姫は顔をしかめて、腰を屈め、そこに平太らうとした。玉治別も友彦も、期せず

して握つた手を放した。友彦は自分の頬をテールス姫の頬に當てようと身に寄り

添うた。テールス姫は、

「イーエス」

と云ひ乍ら、力限りに友彦を突き飛ばした。友彦はヨロヨロとよるめき、ドスンと尻餅を搗き、マ一つひつくり覆つて、居室の柱に厭と云ふ程後頭部を打つけ、「キヤツ」と云つて其場にフン伸びて了つた。玉治別、テールス姫、チーチャーポールは驚いて、水を汲み来り、頭から何杯も何杯も誕生の釋迦の様に、目、鼻、口の區別もなく注ぎ掛けた。友彦は「ウン、ブー、ブルブル」と息を吹いた拍子に、鼻汁を垂らし、鼻から薄い毬の様な玉が三つ四つ、串團子の様に吹き出した。テールス姫は顔を背向けて俯ぶいて了つた。

そろそろ玉治別の赤い鼻は血がヨドンだと見え、紫色になり、終局には眞黒けになつて了つた。されど玉治別はヤツパリ鮮紅色の鼻の持主だと信じて居た。友彦は玉治別の鼻の色の變つたのにヤツと安心し、テールス姫の手をグツと握り、左の手で玉治別の鼻を指し示した。テールス姫は怪訝な顔して玉治別を眺めて居る。玉治別はモ一つ悪戯つてやらうと、ツカツカと前に進み、テールス姫の手を

グツと握り、頬を當てようとした。テールス姫は、

「イーエス イーエス」

と云ひつつ力に任せて、玉治別をドツと押した。玉治別は後の低い段々を押されて、友彦同様タチタチと逡巡ぎ乍ら、一の字に長くなつて倒れた。友彦は手を拍つて、

「アツハ、ハ、ハ」

チーチャーボール 「エツポツポ エツポツポ、エツパー エツパー、イーエス

イーエス」

と云ひ乍ら、玉治別を引起し、次の間に押出して行く。

（大正一一・七・五 舊閏五・一一 松村眞澄録）

第一四章 タールス教（七四四）

たまはるわけ 玉治別は合点ゆかず、次の間に押出され天然の岩の鏡に向つて吾鼻を調べて見
たるに、鼻は不細工に膨れ上り、熟した紫葡萄の様な色になり居たりける。

「ヤア、是で讀めた。眞黒ケの此鼻では、テールス姫さまも……エツパエツパ……
と仰有つた筈だ。イーエス イーエス……と仰有るのも尤もだ。エ、残念な……
……どうぞして此鼻が元の通りになれば、も一つ擲揃つて友彦の慢心せぬ様に戒め
てやるのだが、神様も聞えませぬワイ。到頭残念乍ら大失敗かな。それは如何で
も宜いが、數多の士人が折角尊敬して呉れて居たのに如何して此面が向けられよ
う……ア、天教山に在します木花咲耶姫命様、何卒此花の黒いのを癒し下さい
ませ。惟神靈幸倍坐世惟神靈幸倍坐世。「はな」は櫻木、人は武士、名を後の世
に穢さぬ様に、木花咲耶姫さま何卒々々神直日大直日に見直し聞直し、何卒此玉
治別に暫時の間、赤い「はな」を持たせて下さいませ」
と一心に念じた。不思議や葡萄の様な鼻の色はサツと除れ、一層麗しき鮮紅色の
鼻となつて仕舞つた。

「神様、早速お聞き届け下さいまして有難う御座います。併し乍ら、もう友彦の

膏あぶらは取りませぬ。之これから私わたくしは此處ここを立去たちさつて西にしへ西にしへと進すすみ、次つぎの部ぶ落らくを宣傳せんでんし
ます」

と言いひ乍ながら、次つぎの間まへ悠々いういうと下くだつて來きた。チーチャーボールは又またもや此姿このすがたを見て
打驚うちおどろき、

「ボース ボース、チューチ チューチ、チーリスタン、ポーリンス、テーク
テーク、オツポツポ オツポツポ」

と言いひ乍ながら恐相こわさうに後退あとしぎりする。此意このい味みは、

「此人このひとは神かみか惡魔あくまか、譯わけの分わからぬ大化物おほばけものだ。迂闊うつかりして居をると如何どんな神罰しんばつが當あたるか
知しれぬ……皆みなの者もの、用心ようじんせい。さうして皆々みなみな、お詫わびをせい」

と言いふ事ことである。一同いちどうはチーチャーボールの言葉ことばに頭かしらを大地だいちにつけ、

「プースー プースー」

と聲こゑを揃そろへて謝あやまつて居ある。「プースー」と言いふ事ことは「お許ゆるし」と言いふ事ことである。
玉治別たまはるわけは口くちから出放題でほうだいに、

「トーリンボース トーリンボース」

と言つた。誰も彼も此聲に頭を下に足を上にノタノタと歩き出した。中心を失つて何れも是もバタバタと前後左右に倒れて仕舞つた。

「クス、リヤー、ポール、ストーン」

と出放題を言つて見た。此言葉は、

「皆さま許して上げますから御安心なさい」

と言ふ意味に惟神のになつて居たのである。一同は聲を揃へて「ウワーウワー」

と言ひ乍ら玉治別を胴上げし「エツサーエツサー」と聲を揃へて一里ばかり山道

を送り、谷一つ向ふへ風の神でも送る様にして送りつけ、一生懸命に関を作つて

逃げ歸り行く。玉治別は後見送つて、

「何だ、薩張り譯が分らぬ。まるで疱瘡神でも送る様にしやがった。餘程俺が恐

かつたと見えるワイ、アハ、ハ、ハ。……時に玉能姫様、初稚姫様は何方へお行き

なされたらう。洒落どころの話ぢやない。一時も早く御所在を探さねば申譯が無

い」

と思案に暮れて兩手を組み俯向いて居る。其處へガサガサと足音をさせ乍ら近寄

り来るものがある。見れば大なる白狐であつた。玉治別は白狐に向ひ、

「やア貴方は鬼武彦様の御眷屬月日明神様、ようこそ御いで下さいました。初稚姫様、玉能姫様の所在をお知らせ下さいませ」

白狐は無言のまま、打領き尾を二三遍左右に掉り、ノソノソと歩み出した。玉治別は白狐の後に従ひ、樹木茂れる山林の中を右に左に小柴を分け乍ら、大蛇の背を踏み越え或は跨げ、二三里ばかり西北指して随いて行く。谷の底に幽に聞ゆる天津祝詞の聲、耳を澄まして聞いて見れば確に初稚姫、玉能姫の聲の様であつた。念の爲めと再び目を塞いで聲の所在を確めた上、目を開けば白狐の姿は影も形もなくなり居たりけり。

玉治別は谷底の聲をしるべに草を掻き分け下つて行く。不思議や今迄聞えた聲はピタリと止まり、谷川の岩に打かかる水音のみ囁々と聞え、雪の如き飛沫を飛ばして居るのみで、人の影らしきもの少しも見當たらぬ。谷川の上流下流を聲を限り、

「玉能姫様、初稚姫様」

と呼ばはりつつ搜索すれども何の應答もなく、谷川の水音に加へて猛獸の唸り聲、刻々に烈しく聞えて来る。谷川の彼方を見れば蜿蜒たる大蛇、鎌首を立て三四尺もあらむと思はるる舌をペロペロと出し、玉治別を睨みつけて居る。

「ヤア、大變な太い奴だ。確に此處にお二人の聲がして居た筈だが、大方大蛇の奴、呑んで仕舞ひやがったのだらう。ア、残念な事をした。友彦等を面白半分擲掬つて居た天罰で遅くなつたか。も一步早かりせば、お二人をヤミヤミと蛇腹に葬るのではなかつたのに、三五教の御教には……油斷は大敵、一寸の間も油斷を致すな、改心の上にも改心を致して、一呼吸の間も神を忘れな、慢心は大怪我の基だ……と戒められてある。我々も日々口癖の様に世人に向つて……慢心をすな、改心をせよ……」と言つて宣傳に廻つたが、遂には無意識的に蓄音機の様に出る様になつて、言葉ばかり立派で魂が脱けて居つた。それだからコンナ失敗を演じたのだ。エ、憎き大蛇の奴、……否々決して大蛇が悪いのではない。彼奴は所在生物を呑むのが商賣だ、生物を呑んで天壽を保つ代物だから大蛇を怨めるのは我々の見當違ひ、玉能姫様、初稚姫様も矢張り注意が足らなかつたのだ。みすみす二

人を呑んだ大蛇を前に見ながら敵を討たずに歸らねばならぬのか。最早大蛇を殺して、無念を晴らして見た處が、お二人の生命が助かると言ふ譯でもなし、要らざる殺生をするよりも此實地教訓を玉治別が胸に疊み込み、之から粉骨碎身、生命を的に三人分の活動をして見よう。さうすればお二人の心を慰むる事が出来るであらう』

と獨語ちつつ谷の傍に立つて兩手を合せ天津祝詞を奏上し、大蛇に向つて鎮魂を施し、

『一時も早く………大本皇大神様、大蛇の罪を御宥し下さいまして、早く人間界へ生れさしてやつて下さいませ』

と涙と共に祈願を凝らす。大蛇は兩眼より涙をポロポロと流し、玉治別に向つて頭を下げ感謝の意を表し乍ら、悠悠として嶮しき岩山を上り、遂に其長大なる姿を隠しけり。

俄に後の方に當つて數多の足音が聞えて來た。玉治別は不圖振り返り見れば、猩々の群の數十匹、中には赤兒を抱き乳を含ませ乍ら、玉治別の前に向つて進み

来る。玉治別は一生懸命に天津祝詞を奏上した。猩々の群は各々跪き、兩手を合せ、「キヤア キヤア」と言ひ乍ら、感謝するものの如くであつた。猩々の中より最も勝れて大なるもの現はれ來り玉治別の前に手をつき乍ら頭を下げ、背に無理に負ひ乍ら、嶮しき道を矢を射る如くに登り行く。數多の猩々は玉治別の負はれたる後より従ひ來る。此時、山嶽も崩るるばかりの大音響聞え、周圍三四丈ばかり、長さ五六十間もあらむと思ふ太刀肌の大蛇、尻尾に鋭利なる劍を光らせ乍ら、玉治別が端坐し居たりし谷川を一瀉千里の勢にて囂々と音させ乍ら、ネルソン山の方に向つて進み行く。若し猩々の助けなかりせば、玉治別の生命は如何なりしか殆ど計り知れざる破目に陥つたであらう。

猩々は玉治別を背に負ひ、谷を幾つとなく飛び越え、或高山の山腹の稍平坦なる地點に導きドツカと下した。玉治別は猩々に向ひ、

「ア、何れの神様の化身か存じませぬが、危き處をよくもお助け下さいました。お禮には天津祝詞を奏上致しませう」

と猩々の群に向つて、宣傳歌を歌ひ祝詞を奏上し、指頭より靈光を發射した。さ

しも多數の狸々は忽ち靈光に照され、煙の如く消えて仕舞つた。一塊の白煙は其處より立昇るよと見る間に、美しき一人の女神、ニコニコし乍ら玉治別の前に近より來り、兩手をつかへ、

「妾は狸々の精で御座います。折角人間の姿に生れ乍ら斯様な淺間しき言葉も通ぜぬ獸と生れ、身の不幸を嘆いて居りました。然るに有難き尊き天津祝詞の聲を聞かして頂き、我々は之にて人間に生れ變り、天下國家の爲めに大活動を致します。さうして貴方の御探ね遊ばす初稚姫様、玉能姫様は御無事でいらつしやいます、御心配なさいますな。聽てお會ひになる時があるでせう。此先如何なる事がムいませうとも、必ず御心配下さいますな」

「と言ふかと見れば、姿は消えて白煙も次第々々に薄れゆき、遂には影も形も見えなくなつた。」

玉治別は一生懸命に祝詞を奏上して居た。後の方の森林より忽ち現はれ出でたる十四五人の文身した大の男、玉治別の姿を見るなり、

「ウツポツポ　ウツポツポ、ホーレンス、サーチライス」

と言ひ乍ら兩手を合せて拜み倒す。玉治別は心の中にて、

「……ハ、ア又……サーチライス……だ。俺の鼻が赤くなつたので、友彦の二代目にして呉れるのかな。然し如何な別嬪が居つても、俺には國依別の妹のお勝と言ふ立派な女房が國許に待つて居るのだから、そんな巫山戯た眞似は出来な
いし、有難迷惑だ。然し大將は女ばかりに限らない。ひよつとしたら此棟梁は男
かも知れない、さうすれば大變に都合が好いがな……」

「我こそは天教山に在します、神伊奘諾大神の珍の御子木花姫命であるぞ」
と赤い鼻を指で抑へて見せた。一同は「ウワーウワー」と言ひ乍ら、玉治別を手に乗せる様に大切にし乍ら、土も踏まらず丁寧に身體を持ち上げ、傍の岩の戸をパツと開いて蟻が蚯蚓を引込む様な調子で奥深く連れて行く。二三丁ばかり隧道を擔がれ、パツと俄に明るくなつたと思へば、大きな「あかり」採りが出来て居る。それより奥に擔がれ、又もや四五丁ばかり進んだと思つた處へ一同は聲を揃へて、

「ウツポツポ、ジャンジャヒエール、ウツパツパ」

と言ひ乍ら恭しく稍廣き場所に玉治別を下し、チルテルと言ふ其中での大將らしき男、玉治別の手を握り、傍の岩の戸を押し奥に連れ込んだ。思ひの外廣い岩窟であり、芭蕉の葉の七八倍もある様な大きな葉が、鱗形に厚く敷き詰めてあつた。木の葉の青く枯れた香りは何とも言へぬ氣分が漂うて居る。

斯かる處へ、髮の毛を漆の如く黒く塗つた三十恰好の大男、文身もせず男振りの良い比較的色彩の白い、何とはなしに高尚な風姿にて、ニコニコし乍ら玉治別の前に出で來り、丁寧に兩手をつき、

「ホーレンス、サーチライス、ウツタツタ ウツタツタ、カーリス カーリス」
と言ひ乍ら、忽ち玉治別の手を握り頻りに揺つた。玉治別はニコニコしながら、右の拳を握り、人差指をツンと立て、天井の方をチュウチュウと二三回指さして見せた。さうして、

「アーマ アーマ、タラリー タラリー、トータラリ トータラリ、リート リート、ジャンジャヒエール、オノコロジマ、玉治別、神司」

と言つた、其男はタールス教の教主であつて、名をタールスと言ふ。タールスは、
「ホーレンス、タールス、チツク、チツク、アツパツパ、テーリス、テーリス」
と挨拶する。此意味は、

「吾等の救世主、よくまア、お越し下さいました。只今より貴方を救世主と仰ぎ、
誠を捧げてお仕へ致します。何卒長らく此處にお鎮まり下さいませ」

といふ事であつた。玉治別は、

「テーリス、テーリス」

と半ば歪みなりの此處の語を使つた。その意味は、

「何事も惟神に任してお世話になります」

といふ事なり。タールスは尊敬至らざるなく、玉治別を最も奥深き最上等の室に
導き、珍らしき果物を出して饗應し、生神の降臨と心の底より感謝して居た。ネ
ルソン山以西の住民は昔より、救世主、天より降り給ひ、萬民を靈肉ともに救ひ
給ふと言ふ事を堅く信じて居た。こはジャンナの郷でも同様である。此處はアン
ナヒエールと言ふ里であつた。

此時玉能姫、初稚姫は宣傳歌を歌ひ乍ら、アンナヒエールの里に進んで来た。チルテル以下數十名の里人は、果樹の實を採らんとてアンナの大樹の下に集まつて居た。其處へ二人の美人現はれ來れるを見てチルテルは眞先に進み出で、二人の前に目禮し乍ら、

「アツタツタ、ネース　ネース」
と言ひ乍ら玉能姫の手を執らむとした。玉能姫は驚いて強く振り放した。チルテルは、

「エーパツパ、エーネース　エーネース」
と言ひ乍ら、顔面怒氣を含んで大勢に目配せするや、寄つて集つて二人を手籠めになしタールの岩窟内に運び込みぬ。

（是から分りやすき様に日本語にて物語る）

「汝は何處の女だ。此處を何と心得て居る。龍宮の一つ島でも最も獰猛な人種にして、他郷の者は一人として、恐れ戦き此地を踏んだものはない。然るに圖々しくも女の分際として、此里に斷りもなく進み來るこそ不届き至極の女ども、此チ

ルテルは斯う見えても血も涙もある男だ。何とかして助けてやり度いと思ひ親切に手を執れば素氣なくも振り放し敵意を表する横道者、さアもう斯うなる上は此方の自由自在だ。煮いて喰はうと焼いて喰はうと此方の儘だ」

と、鬼の様な顔に眞黒氣に文身した奴、前後左右より取圍む。

「ホ、ホ、ホ、ホ、僅かに二人の纖弱き女を、大きな男が數十人、寄つて集つて蟻が蟬の死骸でも穴へ引込む様に「エツサエツサ」と擔ぎ込み、御親切によ言つて下さいました。吾々は天教山に現はれ給ふ花赤神の一の眷屬、玉能姫、初稚姫と言ふ生神で御座るぞや。取違ひ致すと量見ならぬぞ」

と目をキリリツと釣り上げたり。

「花赤神の眷屬とは眞赤な偽りだらう。よし、そんな偽りを申すと今に化の皮を剥いてやるぞ。花赤の神様はタールス教の教主様と今奥にてお話の最中だ。一度お目に懸け様ものなら、忽ち汝の化が露顯れるだらう。左様な偽りを申すよりも、今日は目出度き神様の御降臨日だから赦して遣はす。よつて此方の申す事を素直に聞くが宜い。常の日ならば汝の生命は無い處である。さア我教主は未だ女房は

お持ち遊ばさず、何とかして文身のない女を女房に致したいと常々仰有つて御座るのだ。恰度よい處だ。ウンと言はつしやい。さすれば我々は今日只今より……
：御主人様、奥様と崇め奉つて、如何な御用でも御無理でも聞きます程に、萬々一不承諾とあれば本日は成敗を赦し、明日はお前等の生命を奪つて仕舞ふから、覺悟をきめて返答をなさい」

「モシ玉能姫さま、何と言つても、假令殺されても應ずる事はなりませぬぞや。貴女には立派な若彦様と云ふ夫がおりなさるのだから」

「お言葉までもなく、妾は決して生命を奪られても左様な難題には應じませぬから、安心して下さい」

「こりや、小女ツチヨ、何惡智慧をかうのだ。不届き千萬な……俺を何方と心得て居る、ジャンジャヒエールのチルテルさんとは、アンナヒエールの郷に於て誰知らぬ者もない、鬼をも取挫ぐチャーチャーだぞ。「チャー」チャー吐すと最早堪忍ならぬ。膺懲の爲めに此鐵拳を喰へ」

と言ひ乍ら、初稚姫を目蒐けて鬼の蕨を頭上より喰はさむとする。

初稚姫は、飛鳥の如く體を躲し「オホ、」と平氣で笑つて居る。白狐の姿は兩人の目に明かに映じて居る。チルテル初め一同は「タールス教主の女房になれ」と種々嚇しつ嫌しつ、遂には聲高となつて來た。チルテルは斯くては果てじと奥の間に走り入り、タールスの前に兩手をつき、

「只今麗しき女二人、此郷に迷ひ來り、玉能姫とか、初稚姫とか申して居りましが、實に綺麗な女で御座います。貴方の女房には持つて來いの適役、若い方は先でお妾と遊ばしたら宜しからうと存じ、岩窟の中へ連れ込みましたが、なかなかの剛情者で、少しも、我々の申す事を尻に聞かして、頤で返事を致す横道者、如何取計らひませうや」

之を聞いた玉治別はハツト胸を躍らせたが、さあらぬ態にて控へ居る。

「何、美しき女が二人迄も來たか、此場に引連れ來れ。因縁の有無を調べ見む、一時も早く」

と急ぎ立てる。「ハイ」と答へてチルテルは此場を立退き、

「サア玉能姫、初稚姫、今日は花赤神様の御降臨で、教主様の大變な御機嫌、其

處へ其方が参つたのも何かの因縁であらう。兔も角御面會の爲、チルテルの後に
従いて御座れ」

「ハイ、有難う。然らば参りませう。……初稚姫様、貴女も一緒に」

と初稚姫の手をとり、チルテルの後に従ひ教主の居間に導いた。玉治別は二人の
顔を見るなり、「アツ」と言はむとせしが自ら制止止めた。玉能姫、初稚姫は玉
治別の姿を見て、救世主に會ひし如く心の裡に喜んだ。然し、様子ある事と態と
素知らぬ顔して俯向いて居る。タールスは玉治別に向ひ、

「オーレンス、サーチャイス、アツタツタ、今日は遙々天上より御降臨下さいま
して、アンナヒエールの郷人は欣喜雀躍、天下泰平を祝福致し居ります處へ、又
もや當國に於ては類稀なる是なる美人、而も二人までこれへ参りましたのは、全
く神様の御引合せで御座いませう。私の女房に致しましたら如何で御座いませう」
「イーエス イーエス、エータルス エータルス、エツパツパ、パーツク パー
ツク、エツパツパ」
と言つた。タールスは頭をガシガシ掻き乍ら再び、

「左様で御座いませうが、何とかしてお許し頂く譯には参りますまいか。ならう事なら、私が宿の妻と致したう御座います。又若い方は我娘として大切に育て上げ、天晴タールス教の神司と仕上げる覺悟で御座いますから、何卒お許しを願ひます」

と頼み込んだ。

「是なる女は高天原より降り給へる天女にして、人民の左右すべきものに非ず。

萬々一過つて神慮に觸る様な事あらば、汝が生命は直に召取らるるであらうぞ」

と聲に力を入れて、きめつけた。タールスは其嚴しき言靈の威に打たれ、思はず

頭を下げ、

「今後は決して左様な事は申しませぬから、何卒お許し下さい」

と嘆願した。玉治別は心中に可笑しさを堪へ、ソツと見ぬ様な風して兩女の顔を

覗き込んだ。兩女の目は同時に玉治別の兩眼に注がれた。

是より玉治別は此里の言葉をスツカリ覺えた上、三五教の教理を説き諭し、ター

ルスを立て派なる神司に仕上げ、チルテルも同じく神司となり、アンナヒエールの

里人を一人も残らず大神の道に歸順せしめ、二三ヶ月滞在の上、三人は此里を立ち出で、西北さして山傳ひに宣傳歌を歌ひ乍ら進み行くのであつた。七八里の間はチルテルを初め一同見送りをなし、茲に涙と共に惜き別れを告げたりける。

(大正一一・七・五 舊閨五・一一 北村隆光録)

窓外和知川の氾濫を眺めつつ

(昭和一〇・三・八 於吉野丸船室 王仁校正)

第一五章 諏訪湖〔七四五〕

玉治別は初稚姫、玉能姫と共にアンナヒエールのタールス郷を三五教の靈場と定め、黒ン坊を殘らず歸順せしめ、チルテル以下數十人の者に送られて、イルナの郷の入口に袂を別ち「ウワーウワー」の聲と共に東西に姿を消したりける。三人は谷を幾つとなく越え、森林の中の廣き平岩の上に腰打ち掛け、休息し乍

ら回顧談に耽つた。玉治別は、ジャンナの谷底にジャンナイ教の教主テールス姫と面會せし事や、友彦との挑戲などを面白可笑しく物語り、次で此處を立ち出でアンナヒエールの里に到る折しも、兩女の祝詞の聲を聞きつけ、谷間に下りて其邊一面に二人の後を探ね廻る折しも大蛇に出會し、狸々の群に救はれて遂にアンナヒエールのタールス教の本山に擔ぎ込まれ、意外の待遇を受け居る際、初稚姫、玉能姫に面會せし奇遇談を、大略物語りけり。

玉能姫は靜に、

「妾は或谷間に御襖をなし祝詞を上げて居ました處、傍の岩穴より鬼武彦は白狐の月日、旭と共に現はれ給ひ、二人の袖を銜へて穴の底に引込んで下さいました。はて不思議と思ひながら曳かる儘に穴の中に身を没し、小聲に宣傳歌を唱へて居ますと、妾の潜んで居る穴の前の谷川の向岸に當つて蜿蜒たる大蛇が現はれ、三四尺もあらうと思ふ長い舌を出して穴を目蒐けて睨んで居たが、鬼武彦以下の御威徳に畏れ、近よりも得せず暫く睨むで居りました。其とき貴方の聲として妾共の名を呼んで下さいました。何うしたことが一言も聲が出ず、ええチレツタイ

事だと跪いて居りますうち、山嶽も崩るる許りの音を立てて、洞の周圍三四丈も
あらうかと思はるる長さ數十間の太刀膚の大蛇、尾の先に鋭利な劍を光らせ乍ら、
夫婦と見えて二體、谷川を一杯になつて通り過ぎた時の恐ろしさ、今思つても、
身の毛がよだつやうに御座います。白狐の姿は忽ち消えて四邊は森閑としたのを
幸ひ、貴方に遇はんと岩窟を這ひ出で其邊を探ねましたが、些ともお姿は見えず、
あゝ彼の大蛇に何うかされなさつたのだらうかと氣が氣でならず、もしや其邊に
身を潜めて居られるのではあるまいかと思ひ、態と宣傳歌を聲高く歌つて通る折
しも、タールス教のチルテル初め數多の人々、我々兩人を矢庭に擔いであの岩窟
に連れ参り、貴方に不思議の對面をなし、漸く危険を免がれ、其上神様のお道の
宣傳をなし、残らず歸順させる事の出來ましたのも、全く三五教の大神の御守護
と今更ながら有難涙に暮れまする……ア、惟神靈幸倍坐世[□]
と合掌すれば初稚姫も小さき手を合せ感謝の涙に暮れ居たり。
斯く話す折しもキヤツと息の切れるやうな悲鳴が聞えて來た。三人は此聲に思
はず腰を上げ耳を澄まして聞き居れば、谷底に當つて蜿蜒たる大蛇、二人の男女

をキリキリと捲きながら今や大口を開けて呑まんとする眞最中であつた。玉治別
是を見るより一目散に夏草の生茂る灌木の中を駆け潜り、近づき見れば此有様、
直に天津祝詞を口早に奏上し、天の數歌を謠ひあげ、ウンと一聲指頭を突き出し、
五色の靈光を發射して大蛇に放射した。大蛇は忽ちパラパラと解けて其場に材木
を倒したやうにフン伸びて仕舞つた。二人は最早正氣を失ひ、蟲の息にて胸の邊
りをペコペコと僅かに動悸を打たせて居つた。此間に玉能姫、初稚姫は後追ひ來
り、三人力を合せ谷水を汲み來りて面部に吹きかけ、口に啣ませ、いろいろと介
抱をなし、天の數歌を謠ひ上げて魂返しの神業を修するや、忽ち息吹き返し二人
は兩手を合せ、
「何れの方かは存じませぬが、危ふき所をよくも助けて下さいました。此御恩は
死んでも忘れは致しませぬ」
と涙と共に感謝しける。玉治別は、
「ヤア、貴方は……久助さま、お民さまぢや御座いませぬか、危い事で御座いま
した」

と頓狂な聲を出して呼びかけたり。夫婦はハツと顔を上げ、久助は、

「ヤア、貴方は玉治別様、玉能姫様、初稚姫様、よう来て下さいました。ネルソ

ン山の山頂より烈風に吹き散らされ、各自四方に散亂し、貴方は何うなつた事

かと、今の今まで心配致して居りました。此廣い龍宮島、假令三年や五年探して

も一旦別れたが最後、面會する事は到底出来ない筈なのに、折好くも斯んな所で

お目に懸るとは全く神様のお引合せ、ア、有難や勿體なや」

と又もや天津祝詞を五人一緒に聲も涼しく奏上した。二匹の大蛇も、そろそろ尾

の方よりビクリビクリと動き出し、次第々々に元氣を増し鎌首を上げ、五人に向

つて謝罪するものの如く、两眼より涙を流し居たり。玉治別は大蛇に向ひ、

「オイオイ大蛇先生、何の因果でソナナ姿に生れて來たのだ。可憐さうなものだ、

早く人間に生れ代るやうに神言を奏上してやらう」

大蛇の雌雄は首を揃へて幾度となく首を下げ、感謝の意を表した。五人は幾回

となく祝詞を奏上した。大蛇は忽ち白煙となり、大空目蒐けて細長く蜿蜒として

雲となり中空に消えて仕舞つた。これ全く誠心誠意、玉治別一行が天津祝詞を奏

上したる功德によつて、大蛇は天上に救はれたるなり。

一行五人はイルナの山中を宣傳歌を歌ひ乍ら、土人の住家を宣傳せむと崎嶇たる山道を足を痛めながら、草鞋を破り跣となつて進み往く。久助は初稚姫を勞り背に負ひ最後より隨ひ往く。

向ふの方より數十人の一群の荒くれ男、顔一面に嫌らしき文身をしながら此場に現れ來り、眼を怒らせ五人をバラバラと取卷いた。左は斷崖絶壁、千仞の谷間には青々とした激流泡を飛ばして流れ居たり。進退維谷まりし五人は如何はせむと案じ煩ふ折しも、久助の背に負はれたる初稚姫は、

「玉治別殿、先に立たれよ」

と云ふ。玉治別は先に立ち、荒男の前につかつかと進み寄る。荒男の名はタマルと云ふ。タマルは玉治別の赤き鼻を見て大いに驚き俄に態度を一變し、凶器を大地に抛げ捨て、兩手を合せ跪き、

「オーレンス、サーチライス、ウツポツポ　ウツポツポ、アツタツター　アツタツター」

と尊敬の意を表した。更たまつたる此態度に一同は柄物を投げ捨て大地に跪き、異口同音に「オーレンス、サーチャイス」と繰返し、尊敬の意を表したりけり。玉治別は、

「アーメーアーメー、自轉倒島に現はれ給ふ三五教の教主言依別の命を奉じ、此一つ島に神の福音を宣べ傳へむが爲めに、遙々渡り來れるものぞ。汝等今より我道を信じ、神の愛兒となり、靈肉共に永遠無窮に榮えよ。天國の門は開かれたり、神政成就の時は到れり、悔い改めよ」

と宣示したり。此言葉はタマル以下一同には言語の通ぜざるため何の意味かは分らざりしが、何分尊き救世主の御降臨と信じ切つたる彼等は嬉しげに後に隨ひ、險峻なる道を大男の背に五人を負ひながら、大地一面に金砂の散亂せる大原野に導きぬ。此處はアンデオと云ふ廣大なる原野にして、又人家らしきもの數多建ち並び、小都會を形成せり。土人の祀つて居る龍神の祠の前に五人を下し、手を拍つて喜び、何事か一同は祈願を籠めたりけり。

社の後には目も届かぬ許りの湖水が蓮の形に現はれ、紺碧の浪を湛へて居る。

水鳥は浮きつ沈みつ愉快氣に右往左往に游泳し、時々羽ばたきしながら、水面に立ち歩み駆け狂うて居る面白さ。一同は天津祝詞を奏上し終り、此湖水の景色に見惚れ、やや暫し息を休めて居た。玉治別は祠の前に停立し、

自轉倒島を立ち出でて

神の教を傳へむと

南洋諸島を駆け廻り

愈ここに龍宮の

一つの島へと到着し

巖の都の城下まで

進み來れる折柄に

蜈蚣の姫や黄龍の

姫の心を量り兼ね

神の經綸か白雲の

かかる山邊を十柱の

教の御子は攀登り

山の尾上を踏み越えて

ネルソン山の絶頂に

佇み四方を眺めつつ

雄渾の氣に打たれ居る

時しもあれや山腹より

昇り來れる黒雲に

一行十人包まれて

咫尺も辨ぜず當惑し

あまつのりと
天津祝詞を
聲限り

そつじやう
奏上なせる
折りもあれ

くうぜんぜつこ
空前絶後の
強風に

ふきま
吹き捲く
られて各自は

この葉の如く
中天に

まあ
捲き上げ
られて名も知らぬ

ふか
深き谷間に
墜落し

いき
息も絶え
むとしたりしに

あななひけつ
三五教の
大神の

めぐみ
恵の露に
霑ひて

やうや
漸く息を
吹き返し

かなたこなた
彼方此方に
蟠まる

をろち
大蛇の群を
悉く

あまつのり
天津祝詞の
太祝詞

あま
天の數歌
謠ひつつ

ことむ
言向け和
せ漸うに

あまた
數多の人に
送られて

はじめ
初めて此
處に來て見れば

ひとみ
瞳も届か
ぬ諏訪の湖

ちひろ
千尋の底
の彌深き

かみ
神の恵の
現はれて

ぎよりん
魚鱗の波
は金銀の

はなさ
花咲く如
き眺めなり

あゝ
あゝ惟神
々々

みたま
御靈の幸
を蒙ぶりて

われら
我等一行
五つ身魂

せいち
これの聖
地に導かれ

こころ
心の空も
爽かに

天國淨土に上る如

嬉し樂しの今日の日

神の恵の尊さを

一層深く知られけり

神が表に現はれて

善と惡とを立て別ける

此世を造りし神直日

心も廣き大直日

唯何事も人の世は

直日に見直せ聞き直せ

身の過ちは宣り直す

三五教の神の教

宣り傳へ行く樂しさは

三千世界の世の中に

是に増したる業はなし

三千世界の梅の花

一度に開く木の花の

開いて散りて實を結ぶ

時は來にけり時は來ぬ

五辨の梅の嚴御靈

嚴の教を經となし

瑞の教を緯として

錦の宮に現れませる

國治立大神や

埴安彦や埴安姫の

神の御言を畏みて

此世を開く宣傳使

暗夜を晴らす朝日子の

日の出神の御守り
天教山に現れませる

神伊奘諾大神や
地教の山に永久に

鎮まりましたして現世を
堅磐常磐に守ります

神伊奘册大神や
高照姫の御前に

慎み敬ひ鹿兒自物
膝折り伏せて願ぎまつる

あゝ惟神々々
御靈幸倍ましまして

初稚姫や玉能姫
玉治別の宣傳使

久助お民の信徒が
堅磐常磐の後の世も

神の經綸に漏れ落ちず
太しき功績を建てしめよ

神は我等を守ります
神に任せし此身魂

天地の間に生けるもの
他人もなければ仇もなし

父子兄弟睦じく
世界柁かけ引きならし

貴賤揃うて神の世の
樂しき月日を送るまで

神に受けたる玉の緒の
命を長く守りませ

あななひけつ 三五教の御光を 三千世界に隈もなく

て 照らさせ給へ 諏訪の湖 千尋の底に永久に

しづ 鎮まりぬます 龍姫の 皇大神よ平けく

やす いと安らげく 聞き召せ 神の教の道にある

いづ 嚴の御靈の五つ柱 慎み敬ひ願ぎまつる

かむながら あゝ惟神々々 御靈幸倍ましますよ

かむながら 御靈の幸を給へかし

うた と歌ひ終るや、初稚姫は又もや立ち上り、諏訪の湖面に向つて優しき蕾の唇を開

しゆくか き祝歌を歌ふ。

わたし 私わたくしの父ちちは三五あななひの 神かみの教をしへの宣傳せんでん使し

あめ 天あめと地つちとは一時いつときに 開ひらき初はじむる時とき置お師かし

かみ 神かみの命みことの空助もくすけぞ 言こと依より別わけの神言みこともて

自轉倒島の中心地

鎮まりぬます綾の里

玉照彦や玉照姫の

畏み仕へまつりつつ

神と神との御教を

玉治別や玉能姫

浪風猛る海原を

黄金花咲く龍宮の

巖の都を後にして

高山越えて谷の底

山々谷々數越えて

社の前に着きにけり

千尋の底に永久に

心平に安らかに

高天原に千木高く

錦の宮の神司

貴の命の御仰せ

我は幼き身なれども

うなじに固く蒙ぶりて

教司と諸共に

神の恵に渡りつつ

一つの島に着きにけり

山野を渡りネルソンの

アンナヒエールの里を越え

漸う此處に皇神の

思へば深し諏訪の湖

鎮まりぬます龍姫よ

我が願ぎ事を聞き召せ

天火水地と結びたる

言靈まつる五種の

珍の御玉を賜へかし

三五の月の御教は

いよいよ茲に完成し

三千世界の梅の花

一度に開く常磐木の

松の神世と謳はれて

海の内外の民草は

老も若きも隔てなく

うつしき御代を樂しまむ

あゝ惟神々々

御靈幸倍ましまして

十歳にも足らぬ初稚が

萬里の波濤を乗り越えて

世人を救ふ赤心に

曳かれて此處迄出で来る

思ひの露を汲めよかし

神は我等の身邊を

夜と晝との別ちなく

守らせ給ふと聞くからは

神政成就の御寶

嚴の御靈のいち早く

我等に授け給へかし

謹み敬ひ願ぎまつる

あゝ惟神々々

御靈幸倍ましましてよ

朝日は照るとも曇るとも

月は盈つとも虧くるとも 假令大地は沈むとも

誠は神に通ふべし 誠一つの三五の

神の教の宣傳使 宣る言靈を悉く

完全に委曲に聞し召せ 假令大地は沈むとも

神に誓ひし我魂は 如何なる艱難來るとも

ミロクの世迄も變らまじ 』

と歌ひ終り拍手して傍の芝生の上に腰打ち下ろし息をやすめた。 玉能姫は又もや
立上り湖面に向つて歌ふ。

皇大神の勅もて 言依別命より

金剛不壞の如意寶珠 また紫の神寶を

堅磐常磐の經綸地 隠し納むる神業を

仕へまつりし玉能姫 初稚姫の兩人が

神の教を傳へむと

島の八十島八十の國

大海原を打ち渡り

暑さ寒さの厭ひなく

虎伏す野邊も狼の

狂へる深山も何のその

すこしも厭はず三五の

神の教の御爲に

身も魂も奉げつつ

玉治別に從ひて

漸う此處に詣でけり

此湖に遠津代の

神代の古き昔より

鎮まりみます龍姫よ

御國を思ふ一筋の

妾が心を汲み取らせ

三五教の神の道

岩より堅く搗き固め

神界幽界現界の

救ひの爲に海底に

隠し給ひし五つみたま

天火水地と結びたる

大空擬ふ青き玉

紅葉色なす赤玉や

月の顔水の玉

黄金色なす黄色玉

四魂を結びし紫の

五つの御玉を我々に

授けたまへよ 蠢々に 我は疾く疾く立歸り
國治立大神が 神政成就の神業の
大御寶と奉り 汝が御靈の功績を
千代に八千代に永久に 照しまつらむ 惟神
御靈の幸を賜はりて 我等の願ひをつばらかに
聞き召さへと詔り奉る あゝ惟神々々
御靈幸倍ましませよ

と歌ひ終つて拍手し、傍の芝生の上に息を休めけり。
久助は又もや湖面に向つて、

自轉倒島の瀬戸の海 誠明石の磯の邊に
生れ出でたる久助は 三五教に入信し
玉治別の宣傳使 其他二人の神司
導き給ふ其儘に 御跡を慕ひ神徳を

蒙りまつり世の爲に 力の限り盡さむと

大海原を遙々と 越えて漸う一つ島

大蛇に體を捲かれつつ 九死一生の苦みを

神の御稜威に助けられ 漸う此處に來りけり

我は信徒三五の 神の司に非ざれど

御國を思ひ大神に 仕ふる道に隔てなし

諏訪の湖底に永久に 鎮まりぬます皇神よ

我等夫婦が眞心を 憐み給へ何なりと

一つの御用を仰せられ 神の教の御子として

恥かしからぬ働きを 盡させ給へ惟神

神の御前に村肝の 赤き心を奉り

慎み敬ひ願ぎまつる 畏み畏み願ぎ申す

あゝ惟神々々 御靈幸倍ましませよ

と歌ひ終つて同じく芝生の上に息をやすめたり。お民は又もや立上り諏訪の湖面向つて拍手し、聲淑やかに、

尊き國の礎や 百姓の名に負ひし

君と神とに眞心を 麻柱ひ奉る民子姫

神の御前に平伏して 國治立大神の

ミロク神政の神業に 仕へまつらむ事のよし

完全に委曲に聞き召し 誠の足らぬ我なれど

神の大道は片時も 忘れたる事更になし

守らざる事片時も 無きを切めての取得とし

この湖底に昔より 鎮まりぬます龍宮の

皇大神よ惟神 大御心も平けく

いと安らげく思召し 足らはぬ我等が願言を

見棄て玉はず諾ひて 其程々の功績を

立てさせ玉へ諏訪の湖

鎮まりぬます御神の

御前に畏み願ぎまつる

あゝ惟神々々

御靈幸倍ましませよ

紺碧の湖面は忽ち十字形に波割れて、湖底は判然と現はれたり。殆ど黄金の板を敷き詰めたる如く、一塊の砂礫もなければ、塵芥もなく、藻草もない。恰も黄金の鍋に水を盛りたる如き、清潔にして燦爛たる光輝を放ち、目も眩む許りの莊嚴麗媚さなりき。波の割れ間より幽かに見ゆる金殿玉樓の棟實に床しく、胸躍り魂飛び魄散るが如く、赤珊瑚樹は林の如くにして立竝み居る。珊瑚樹の大木の下を潜つて、静々と現はれ來る玉の顔容月の眉、梅の花か海棠か、但は牡丹の咲き初めし婀娜な姿に擬ふべらなる數多の女神、黄金色の衣を身に纏ひ、黄金造りの龍の冠を戴き乍ら、長柄の唐團扇を笏杖の代りに左手に突きつつ、右手に玉杯を抱え、天火水地結の五色の玉を各五人の殊更崇高なる女神に抱かせ乍ら、玉依姫命は徐々と湖を上り五人が前に現はれ玉ひて、言葉静かに宣り玉ふ。

「汝は初稚姫、玉能姫、玉治別、信徒の久助、お民の五柱、よくも艱難を凌ぎ辛
苦に堪へ、神國成就の爲に遙々此處に來りしこと感賞するに餘りあり。併し乍ら
汝初稚姫は大神よりの特別の思召しを以て、金剛不壞の如意寶珠の神業に參加せ
しめられ、又玉能姫は紫の寶玉の御用を仰せ付けられ、今や三五教擧つて羨望の
的となり居れり。玉治別外二人は未だ斯の如き重大なる神業には奉仕せざれども、
汝等が至誠至實の行ひに賞で、龍宮の神寶たる五種の寶を汝等五人に授くれば、
汝等尚も此上に心身を清らかにし、錦の宮に捧持し歸り、教主言依別命にお渡し
申すべし。今汝に授くるは易けれど、未だ一つ島の宣傳を終へざれば、暫く我等
が手に預りおかむ。華々しき功名手柄を現はし、重大なる神業を神より命ぜらる
るは尤もなりと、一般人より承認さるる迄誠を盡せ。此一つ島はネルソン山を區
域として東西に別れ、東部は三五教の宣傳使黃龍姫守護し居れども、未だ西部に
宣傳する身魂なし。汝等五人は此處に七日七夜の御禊を修し、此島を宣傳して普
く世人を救ひ、大蛇の靈を善道に蘇へらせ、且黃龍姫、梅子姫、蜈蚣姫其他一同
の者を心の底より汝の誠に歸順せしめたる上にて改めて汝の手に渡さむ。初稚姫

には紫の玉、玉治別には青色の玉、玉能姫には紅色の玉、久助には水色、お民には黄色の玉を相渡すべし。されど此神業を仕損じなば、今の妾の誓ひは取消すべければ、忍耐に忍耐を重ねて、人群萬類愛善を命の綱と頼み、苟且にも妬み、そねみ、怒りの心を發するな。妾はこれにて暫く龍の宮居に歸り時を待たむ。いざさらば……」

と言ひ残し、數多の侍女神を隨へ、忽ち巨大なる龍體となりて、一度にドツと飛び込み玉へば、十字形に割れたる湖面は元の如くに治まり、山嶽の如き浪は立ち狂ひ、巨大の水柱は天に沖するかと許り思はれた。五人は感謝の涙に暮れつつも、恭しく拍手をなし、天津祝詞や神言を奏上し、天の數歌を十度唱へ、宣傳歌を聲張り上げて歌ひ終り、再び拍手し、それより七日七夜湖水に御楔を修し、諏訪の湖面に向つて合掌し、皇神に暇を請ひ、宣傳歌を歌ひ乍ら、荆棘茂れる森林の、大蛇猛獸の群居る中を物ともせず、神を力に誠を杖に進み行くこそ雄々しけれ。あゝ惟神靈幸倍坐世。

玉依姫は空色の衣服にて、玉を持てる五人の女神の後に付添ひ玉ひしと聞く。

(大正一一・七・五 舊閏五・一一 加藤明子録)

第一六章 慈愛の涙〔七四六〕

七十五聲の言靈に

因みて澄める諏訪の湖

皇大神が三千歳の

遠き神代の昔より

ミロク神政の曉に

嚴の御靈と現はして

神の御國を固めむと

諏訪の湖底深く

秘め給ひたる珍寶

龍の宮居の司神

玉依姫に言依さし

三千世界の梅の花

五辨の身魂一時に

開く常磐の松の代を

待たせ給ひし畏さよ

浪立ち分けて現れませる

玉たまを欺あざむく姫神ひめがみは

五いつツの玉たまを手てに持もたし

教をしへの御子みこの五柱いつはしら
前まへに寶物じつぶつ現あらはせて

往後わうごを戒いましめ神業しんげふの
完成くわんせいしたる曉あかつきに

手渡てわたしせむと嚴おごそかに
誓ちかひ給たまひし言ことの葉はを

五人ごにんの御子みこは畏かしこみて
夢寐むびにも忘わすれず千早ちはや振ふる

神かみの誠まことを心こころとし 羊ひつじの如ごとくおとなしく

如何いかなる敵てきにも刃向はむかはず
善ぜん一筋ひとすぢの三五あななひの

至誠まことの道みちを立て通とほし
人ひとに譲ゆづるの徳性とくせいを

培つちかひ育そだてし健氣けなげさよ
玉治たまはる別わけや玉能たまの姫ひめ

一層ひとしほ賢さかしき初稚はつわか姫ひめの
神かみの命みことの瑞御みつみたま靈たま

久助きうすけ、お民たみの五人ごにんづれ連れん
諏訪すはの湖みづつみ伏みふし拜をがみ

七日なぬかなな七夜ななの楔みそぎして
身みも魂たましひも淨きよめつつ

大野おほのヶ原がはらをエチエチと
金砂きんしゃ銀砂ぎんしゃを敷しき詰つめし

道みち芝しばイソイソ進すすみ行ゆく。
向むかふの方ほうより馳はせ來きたる

大の男が十五人 出會がしらに一行を

目蒐けて拳を固めつつ 所かまはず打据ゑて

一同息も絶え絶えに 無念の涙くひしばり

笑顔を作り言ひけらく 『心きたなき我々は

金砂銀砂の敷詰めし 清き大地を進みつつ

心に恥らふ折柄に 何處の方か知らねども

吾等が身魂を清めむと 心も厚き皇神の

恵の拳を隈もなく 汚き身體に加へまし

有難涙に咽びます 嗚呼諸人よ諸人よ

汝は吾等の身魂をば 研かせ給ふ御恵の

深くまします眞人よ あゝ有難し有難し

是れより心を改めて 足はぬ吾等の行ひを

補ひ奉り三五の 神の教の司とし

天地の神や諸人に 恥らふ事の無きまでに

身魂を研き奉るべし

嗚呼惟神々々

惠の鞭を嬉しみて

皇大神の御教を

四方の國々宣べ傳へ

世人の爲めに眞心を

盡さむ栞に致します

山より高き父の恩

海より深き母の恩

惠は盡きぬ父母の

我子を愛はる眞心に

優りて尊き御恵み

謹み感謝し奉る

朝日は照るとも曇るとも

月は盈つとも虧くるとも

假令大地は沈むとも

我等の命は失するとも

神の惠の此鞭の

其有難さ何時迄も

忘るる事はあらざらめ

汝は普通の人ならじ

諏訪の湖水に現れませる

皇大神の御心を

持ちて現れます神ならむ

謹み感謝し奉る

嗚呼惟神々々

御靈幸倍ましましてよ

此世を造りし神直日

心も廣き大直日

只何事も人の世は

直日に見直し聞直し

身の過ちは宣り直す

三五教の吾々は

如何なる事も惟神

凡て善意に解釋し

只一言も恨まずに

情の鞭を嬉しみて

厚く感謝し奉る

水も洩らさぬ皇神の

尊き仕組の今の鞭

受けたる此身今日よりは

心の駒に鞭ちて

時々兆す悪念を

山の尾の上に追ひ散らし

河の瀬毎に追拂ひ

大慈大悲の大神の

大御心に報ふべし

進めよ進めよいざ進め

忍の山に逸早く

劍の山も何のその

假令火の中水の底

神の大道の爲ならば

などか厭はむ敷島の

大和心を振おこし

國治立の御前に

奇しき功績を立て奉り

目出度神代にかへり言 申さむ吉き日を樂しまむ

嗚呼惟神々々 御靈幸はひましませよ

と小聲に玉治別は歌ひ終り、打擲された十五人の男に向ひ、一同手を合せて、嬉し涙に咽びける。さしも猛惡なる惡漢も、五人の態度に呆れ返り、感涙に咽び乍ら兩手を合はせて大地に平伏し、陳謝の辭を斷たざりけり。玉治別は大いに喜び茲に一場の宣傳をなしながら、悠悠として此場を立ち去りにけり。

後振り返り見れば障害なき大野原に十五人の荒男は、何れへ消えしか、影も形も見えずなり居たりける。初稚姫は、

「皆さま、今の方は誰方と思ひますか」

「玉治別には、どうも合點が参りませぬ。何處へ行かれたのでせう」

「イエイエ、あの方は天教山に現はれ給ひし、木花咲耶姫の御化身で御座いましたよ」

玉能姫はこれを聞くより「ワツ」と計りに聲を上げ嬉し泣きしながら、

「ア、神様、有難う御座いました。何處迄も吾々の魂を御守り下さいまして、今度の御神業につきましては不斷、御禮の申上げやうなき御心付けを下さいまして、有難う御座います。何とも御禮の申上げ様も御座いませぬ。御蔭を以て漸く忍耐の坂を越える丈けの御神力を戴きました」

と鼻を啜り嬉し涙を絞る。玉治別は啜り泣き一言も發し得ず嗚咽し乍ら、自轉倒島に向ひ兩手を合せ涙をタラタラと流し、是亦感謝に餘念なく、久助、お民も只兩手を合せシヤクリ泣きするのみ。初稚姫は、

「皆様、大神様の眞の御慈愛が解りましたか」

一同は、

「ハイ」

と云つたきり涙滂沱として腮邊に瀧の如く滴たらし居たり。嗚呼惟神靈幸倍坐世。一行は感謝の祝詞を奏上し終つて、又もや炎熱焼くが如き原野を汗に着物を浸し乍ら足を早めて宣傳歌を歌ひ進み行く。

折しも小さき祠の前に醜き一人の男、何事か祈願し居るにぞ、玉治別はツカツ

力と進み寄り、

「モシモシ貴方は何處の方で御座るか、見れば御病氣の體軀と見えまする。何れへお出で遊ばすか」

と尋ぬるに男は玉治別の言葉にフト顔を上げたり。見れば顔面は天刑病にて潰れ、體軀一面得も言はれぬ臭氣芬々として膿汁が流れて居る。玉治別は案に相違し突立つた儘、目を白黒して其男を黙視してゐる。

「私は此向ふの谷間に住む者だが、コンナ醜るしい病を患ひ、誰一人相手になつて呉れるものもなし、若い時より體主靈從のあらん限りを盡し、神に叛いた天罰で、モシ……コレ此通り、世間の「みせしめ」に逢うて居るのだ。最早一足も歩む事は出来ぬ……お前さま、人を助ける宣傳使なれば、此病氣を癒して下さいませ。モシ女の唇を以て此膿汁を吸へば、病氣は全快すると聞きました。何卒お情に助けて下さるまいか」

初稚姫はニコニコし乍ら、

「おぢさま、吸うて癒る事なら吸はして下さい」

と云ふより早く足許の膿汁を「チュウチュウ」と吸うては吐き、吸うては吐き始
めたり。玉能姫は頭の方より顔面、肩先き手と云ふ順序に、「チュウチュウ」と
膿を吸うては吐き出す。玉治別、久助は餘りの事に顔も得上げず、心の中にて一
時も早く病氣平癒をなさしめ給へと、祈願を凝らして居る。お民は又もや立寄つ
て腹部を目蒐けて、膿汁を「チュウチュウ」と吸ひ始めたり。暫くの間、全身隈
なく膿汁を吸ひ出し了りぬ。男は喜び乍ら両手を合せ、路上に蹲踞んで熱き涙に
暮れ居たり。五人は一度に其男を中に置き、傍の流れ水に口を嗽ぎ手を洗ひ天津
祝詞を奏上する。男は忽ち嬉しさうな顔をし乍ら、
「ア、有難う御座いました。誰がコンナ汚い物を、吾子だとして吸うて呉れませう。
お禮は言葉に盡されませぬ」
と一禮し乍ら直に立ちて常人の如く足も健かに歩み出し、終に遠く姿も見えずな
りにけり。玉治別は感激の面色にて、
「三人の御方、ヨウマア助けてやって下さいました。私も女ならば貴方方の如う
に御用が致したいので御座いますが、彼の男が女でなければ不可ぬと申しました

のでつい扣へて居ました。イヤもう恐れ入った御仁慈、國治立大神、神素盞鳴大

神の御心に等しき御志、感激に堪へませぬ」

と又もや熱涙に咽ぶ。三人は愉快氣に神徳を忝なみ、

「あゝ神様、今日は結構な御神徳を頂きました」

と両手を合せ感謝の祝詞を奏上し、一行五人西へ西へと、金砂銀砂の敷詰めたる

如き麗しき野路を、宣傳歌を歌ひ進み行く。

因に云ふ。初稚姫の御魂は三十萬年の後に大本教祖出口直子と顯はれ給ふ神誓

にして、是れより五人は西部一帯を宣傳し、種々の試練に遭ひ、終にオーストラ

リヤの全島を三五教の教に導き、神業を成就したる種々の感ず可き行爲の物語は、

紙數の都合に依りて後日に詳述する事となしたり。嗚呼惟神靈幸倍坐世。

(大正一一・七・五 舊閏五・一一 谷村眞友録)

一、高天原の天界には、地上の世界と同様に住所や家屋があつて、天人が生活して居ることは地上の世界に於ける人間の生活と相似て居るのである。斯くいふ時は現界人は一つの空想として一笑に付し顧みないであらう。それも強ち無理ではないと思ふ。一度も見たことも無く、又天人なるものは人間だと云ふことを知らぬ故である。又天人の住所なるものは、地球現界人の見る天空だと思ふから信じないのである。打見る所天空なるものは冲虚なるが上に、其天人といふものも亦一種の氣體的形體に過ぎないものと思ふからである。故に地の世界の人間は、靈界の事物にも亦自然界同様であるといふ事を會得することが出来ぬからである。現實界即ち自然界の人間は、靈的の何者たるかを知らないから疑ふのである。地上の現界を靈界の移寫だといふことを自覺せないから、天人と云へば天の羽衣を着て、空中を自由自在に飛翔するものと思つてゐるのは人間の不覺である。天人は之等の人間を癡狂者と云つて笑ふのである。

一、天人の生活状態にも各不同があつて、威嚴の高きものの住所は崇高なものである。又それに次ぐものはそれ相應の住所がある。故に天人にも現界人の如く名

位壽福の願ひを持つて居て進歩もあり向上もあるので、決して一定不變の境遇に居るものには無い。愛と信との善徳の進むに従つて倍々莊嚴の天國に到り、又は立派なる地所や家屋に住み、立派なる光輝ある衣服を着し得るものである。何れも靈的生活であるから、その徳に應じて主神より與えへらるるものである。凡ての疑惑を捨てて天國の生活を信じ死後の状態を會得する時は自然に崇高偉大なる事物を見るべく、大歡喜を攝受し得るものである。

一、天人の住宅は地上の世界の家屋と何等の變りも無い。只その美しさが遙に優つてゐるのみである。その家屋には地上の家屋の如く奥の間もあり、寢室もあり、部屋もあり、門もあり、中庭もあり、築山もあり、花園もあり、樹木もあり、山林田畑もあり、泉水もあり、井戸もあつて、住家櫛比し都會の如くに列んで居る。亦坦々たる大道もあり、細道もあり、四辻もあること地上の市街と同一である。一、天界にも又土農工商の區別あり。されど現界人の如く私利私欲に溺れず、只その天職を歡喜して天國の爲に各自の能力を發揮して公共的に盡すのみである。天國に於ける士は決して軍人にあらず、誠の道即ち善と愛と信とを天人に對して

教をしふる宣せん傳でん使しのことである。地ち上じやうに於おいて立り派つぱなる宣せん傳でん使しとなり其その本ほん分ぶんを盡つくし得えた
る善ぜん徳とく者しやは、天てん國こくに住すみても依い然ぜんとして宣せん傳でん使しの職しよくにあるものである。人にん間げんは何ど
處こまでも意い志しや感かん情じやうや又または所しよ主しゆの事じ業げふを死し後ごの世せ界かい迄まで継けい承しやうするものである。又また天てん
國こく靈れい國こくにも、貧ひん富ぶ高かう下げの區く別べつがある。天てん國こくにて富とめるものは地ち上じやうの世せ界かいに於おいてそ
の富とみを善ぜん用ようし、神かみを信しんじ神かみを愛あいするたに金きん銀ぎん財ざい寶ほうを活くわつ用ようしたるものは天てん國こくに於おい
ては最もつとも勝すぐれたる富ふう者しやであり、公こ共きやうのため世せ人じんを救すくふために財ざいを善ぜん用ようしたるもの
は中ちゆう位ゐの富ふう者しやとなつて居ゐる。又また現げん界かいに於おいてその富とみを惡あく用ようし、私し心しん私し欲よくの爲ために費つひや
又または蓄ちく積せきして飽あくことを知しらなかつた者ものは、其その富とみ忽たちち變へんじて臭しゆう穢ゑとなり、窮きゆう乏ぼう
となり、暗あん雲うんとなりて靈れい界かいの極ごく貧ひん者しやと成なり下さがり、大たい抵ていは地ぢ獄ごくに墮だするものである。
又また死し後ごの世せ界かいに於おいて歡くわん喜きの生しやう涯がいを營いまむと思おもふ者ものは、現げん世せに於おいて神かみを理り解かいし、神かみ
を愛あいし神かみを信しんじ、歡くわん喜きの生しやう涯がいを生せい前ぜんより營いみてあなければ成ならぬのである。死し後ご
天てん國こくに上のほり地ぢ獄ごくの苦くを免まぬがれむとして、現げん世せ的てき事じ業げふを捨すてて山さん林りんに隱いん遁とんして世せ事じ
を避さけ、靈れい的てき生せい活くわつを續つづけむとしたる者ものの天てん國こくに在あるものは、矢や張はり生せい前ぜんと同どう様やうに孤こ
獨く不ぶ遇ぐの生しやう涯がいを送おくるものである。故ゆゑに人ひとは天てん國こくに安あん全ぜんなる生せい活くわつを營いまんと望のぞまば、

生前に於て各自の業を勵み、最善の努力を盡さねば死後の安逸な生活は到底爲し得ることは出来ないのである。士は士としての業務を正しく竭し、農工商共に正しき最善を盡して、神を理解し知悉し之を愛し之を信じ善徳を積みておかねばならぬ。又宣傳使は宣傳使としての本分を盡せばそれで良いのである。世間心を起して、農工商に従事する如きは宣傳使の聖職を冒瀆し、一も取らず、二も取らず、死後中有界に彷徨する如き失態を招くものである。故に神の宣傳使たるものは何處までも神の道を舍身的に宣傳し、天下の萬民を愛と信とに導き、天國、靈國の狀態を知悉せしめ、理解せしめ、世人に歡喜の光明を與ふることに努力せなくては成らぬのである。天界に坐ます主の神は仁愛の天使を世に降し、地上の民を教化せしむべく月の光を地上に投げ給うた。宣傳使たるものは、この月光を力として自己の靈魂と心性を研ぎ、神を理解し知悉し、愛と信とを感受し、是を萬民に傳ふべきものである。主一無適の信仰は、宣傳使たるものの第一要素であることを忘れてはならぬ。天界地上の區別なく神の道に仕ふる身魂ほど歡喜を味はふ幸福者は無いのである。

ア、惟神靈幸倍坐世。

大正十一年十二月

王仁

靈の礎（一一）

一、天界即ち神界高天原にも、又地上の如く宮殿や堂宇があつて、神を禮拜し神事を行つて居るのである。その説教又は講義等に從事するものは、勿論天界の宣傳使である。天人は常に愛と證覺の上に於て、益々圓滿具足ならむ事を求めて、靈身の餌となすからである。天人に智性や意性の有ることは、猶地上現界の人間同様である。天人は天界の殿堂や説教所に集合して、其の智的又は意的福音を聽聞し、共に益々圓滿ならむことを望むものであつて、智性は智慧に屬する諸の眞理に依り、意性は愛に屬する諸の善に由つて、常に圓滿具足の境域に進みて止まぬものである。

一、天界の説法は天人各自が處世上の事項に就て、教訓を垂るるに止まつて居る。

要するに愛と仁と信とを完全に體現せる生涯を營まむが爲に説示し聽聞するのである。説法者は高壇の中央に立ち、其面前には證覺の光明勝れたるもの座を占め、聽聞者は宣傳使の視線を外れぬ様に圓形の座を造つて居る。その殿堂や説教所は天國にあつては木造の如く見え、靈國にあつては石造の如く見えて居る。石は眞に相應し、木は善に相應して居るからである。又天國の至聖場は之を殿堂とも説教所とも云はず、只單に神の家と稱へてゐる。そして其建築は餘り崇大なものではない。されど靈國のものは多少の崇大な所がある。

天國淨土の天人を
教導すべき宣傳使
一名神の使者といふ
宣傳神使は何人も
靈の國より來るなり
天國人の任ならず
そも靈國の天人は
善より來り眞に居り
眞理に透徹すればなり
天國淨土に住むものは

愛の徳にて眞を得て

知覺するのみ言説を

試むること敢て無し

彼れ天國の天人は

己が既に知り得たる

所を益々明白に

體得せむと思へばなり

又その未だ知らざりし

眞理を覺り圓滿に

認識せむと努め行く

一度眞を聽く時は

直様之を認識し

つづいて之を知り覺る

眞を愛して措かざるは

その生涯に活用し

之をば己が境涯の

中に同化し實現し

その向上を計るなり。

高天原の主神より

任さし給ひし宣傳使は

自ら説法の才能あり

靈國以外の天人は

神の家にて説くを得ず

而して神の宣傳使は

祭司となるを許されず

神の祭祀を行ふは

天國人の所業にて

靈國人の職ならず

その故如何と尋ねれば

高天原の神界の

祭司を行ふ職掌は

天國に住む天人の

惟神の神業なればなり

そもそも祭司の神業は

靈國に坐す主の神の

愛の御徳に酬ゆべく

奉仕し盡す爲ぞかし

高天原の天界（神界）の

主權を有すは靈國ぞ

善より來たる眞徳を

義として眞に居ればなり

高天原の最奥に

おける説示は證覺の

極度に達し中天の

説示は最下の天國の

説示に比して智慧に充つ

如何となれば天人の

智覺に應じて説けばなり

説示の主眼要點は

何れも主神の具へたる

神しん的てき人じん格かくを各かく人じんが 承しやう認にんすべく教をへ行ゆく
事ことを除のぞけば何なにもなし 之これを思おもへば現げん界かいの
宣せん傳でん使しまた主すの神かみの 神しん格かく威ゐ嚴げんを外ほかにして
説せつ示じすること無なかるべし ア、惟かむ神な々ながら
高たか天あま原はらの天てん界かいの 主す神しんの愛あいとその眞しんに
歡くわん喜きし恭うやまひ奉たてまつる。

大正十一年十二月

王仁

神諭しんゆ

大正五年舊十一月八日

大おほ本もとの神かみの教をしへの通とほりの誠まことの修ぎ業やうのでけてをる身み魂たまは、安ら全くに神しん界かいの御ご用ようが勤つとま

るなれど、修業の出来て居らぬ身魂は辛くなるから、誠の神の道は修業した丈
の事より出来は致さぬぞよ。世に落ちて居りた身魂は、ドンナ辛い修業も致して
居るから、サア爰といふ處では、ビクともせず、安心して御用が勤まるぞよ。世に
出て居りて、今迄結構に暮して来た上流の守護神よ、一時も早く改心なされよ。
モウ世が迫りて来たから、横向く間も無いぞよ。是からは悪の靈の利かぬ時節が
廻りてきたから、今迄のやうな強いもの勝の世の持方は神が赦さぬぞよ。今迄は
加美はドンナ忍耐も致して、此世の来るを待ちて居りたぞよ。日本は欲な人民の
多い國、外國は學の世であるから、ドンナ事でも致すぞよ。日本の人民は神の國
に生れ乍ら、神をおよそに思て、吾よしの強欲計りを考へて、金の事になりたら、
一家親類は愚、親兄弟とでも公事をいたす、慘たらしい身魂に化り切りて居るぞ
よ。是では神國の人民とは申されぬぞよ。

神の初發に修理へた元の祖國は、世界中を守護する役目であるぞよ。世界の難
儀を助けてやらねば、神國の役目が濟まぬから、世界の國の人民を一番先に神心
に捻直して一人も残らず、神心に復へてやらねば神の役が濟まぬので、天の大神

様へ、日々良の金神が御詫をいたして、世の立替を延ばして貰うて、其間に一人でも多く、神國魂に致したさに、神は晝夜の氣苦勞を致して居るから、神國の人民なら、チトは神の心も推量致して身魂を磨いて、世界の御用に立ち下されよ。モウ世が迫りて来て、絶對絶命であるから、何うする間も無いぞよ。神は急げるぞよ。人民が早く改心をいたして下さらぬと、世界中の難澁が激しくなりて、何も彼も總損害となるぞよ。神が經綸た世界の誠を、何も知らずに、吾物に致さうとして、エライ企みは奥が淺うて狭いから、ここまで九分九厘までは面白い程、トントン拍子に來たなれど天の時節が参りて、惡神の世の年の明きとなりて、惡の輪止りで、向ふの國には死物狂を致して居るなれど、何處からも仲裁に這入る事も出來ず、見殺して神なら助けねばならぬなれど、餘り我が強過ぎて何う仕様も無いぞよ。此方良の金神も我が強くて、神々の手に合はいで押籠められて變化する事の無い所まで、ドンナ事にも變化て、ここへ成りたのであるから、モウ一種變化たいと思うたなれど、モウ變化る事が無い様に成りたぞよ。(終)

靈界物語 第二四卷 如意寶珠 亥の巻
終り